
魔法狩人ハンター☆マギカ

アンタレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法狩人ハンター☆マギカ

【Nコード】

N8295T

【作者名】

アンタレス

【あらすじ】

狩人と魔法少女が集う時、
繰り返される悲劇が終わりを始める。
円環の中で、ハンターは何を見ていくのか。

モンスターハンターとのクロスです。
初投稿ですが、暖かい目で見てやってください。

それとMH2とMHP2nd、3rdの曲を聞きながら読むと、とても、いいと思います。（多分。）

プロローグ（前書き）

初投稿ですがよろしくお願ひします。

プロローグ

狩りは架橋に差し掛かっていた。

その日は、ハンターになってまだ二ヶ月。

あるパーティーはアオアシラの討伐依頼で溪流を訪れていた。

「先輩！危ないッ！」

ユクモノシリーズに身を包み、一丁のヘヴィボウガンを構えた女ハンターは叫ぶ。

「大丈夫だ！キンチャク、今だ！」

同じくユクモノシリーズにユクモノ太刀を構えたハンターは、アイルーに指示を出す。

「ニィ！ニャ！」

何処からともなくタル爆弾を取り出し、アオアシラに投げつけた。

「・・・！」

ユクモノ重弩の狙いを定め、アオアシラの足を狙い狙撃した。

狙いたがわず命中し、アオアシラの巨体は地面に崩れた。

何とか起き上がろうともがくが中々動けなかった。

「今だ！」

太刀を抜き、気刃斬りを放つ。

「これで、最後だ!!」

気刃大回転斬りをアオアシラの頭に当てると、アオアシラの体は動かなくなった。

「ふう・・・」

「お疲れ様ですっ!先輩!」

「あの・・・サーシャ、早く剥ぎ取らなくて良いのか?」

「あっ!」

慌ててアオアシラに駆け出していくサーシャを見ながらつぶやく。

「まったく、ハンターやってる時期はほぼ一緒なのにな・・・」

狩猟から数日後――

サーシャ side

ここは私達が住んでいるユクモ村。

ここでは様々なハンター達が訪れ、

まれにハンター達が腰を落ち着けてくれる事もある。

ちなみにユクモ村の温泉は効能が良く効き

他の村のハンターもその為だけに訪れる事もあるらしいんだけど・

・

人はほとんどいなかった。

それもそのはずで、外は大雨と雷が鳴っていたからだ。

当たり前だ。雷に打たれながら温泉に入る、なんて事はする客はいないだろう。

当然、私も雷に打たれながら温泉には入りたくはない。

集会場のドリンク屋がやってなかった事を先輩に伝えると

帰ってからの灼熱しることを楽しみにしていた先輩は相当へこんでいた。

明日にでも飲めば良いのに、集会場と自室をつなぐ廊下を歩きながら私はそう思っていた。

先輩の部屋に着くと、私は迷わず入った。

「先輩くゝ入りますよおくゝ」

「ん？サーシャ？どうしたの？」

「暇なんで来ちゃいました。」

ちようと先輩は道具をポーチに詰めているところだった。

「ご主人くゝ」

その時、アイルーが駆け寄ってきた。

「おう、ティガ、キンチャク。」

アイルーも加わってしばらく談笑し、

私は部屋に戻った。

「さてと、」

俺は道具を詰め、

いつでも狩りにいけるようにしていた。

やることもなく寝ていると、
雷が酷くなった気がしてきた。

ぼんやりと先日雪山草を届けにきたハンターの姿を思い出した。
他には今日浸かれなかった温泉の事も思い出した。

今日温泉に浸かれなかったのは残念だった。
なにしろ灼熱するこは楽しみの一つ。
などと思い浮かべていると、

その後は一瞬だった。

部屋に雷が落ち、雷が俺とキンチャク、ティガを包み込んだ。

プロローグ（後書き）

感想など改善点があればどしどし頼みます。

正直不定期になるかもしれませんがよろしくお願いします。

第一話 名前と、処遇。(前書き)

次ぐらゐに本編スタートします。

第一話 名前と、処遇。

幾つか聞いていいか？ いや、聞かせろ。

ここはどこだ？ うん、病院みたいなのは理解できる。

俺はユクモ村の自室で寝っ転がっていたはずだ。

なんだよ、中学校って？

さっきから聞き覚えのない単語が俺へ向けて飛んで来るんだが？

さらに一つ。

俺は、誰だ？

「――君――」

俺はその人へと顔を向けた。

「はい？」

思わず俺は聞き返してしまった。

「来週から学校に行ってもらおうよ。」

・・・え？

嘘だろ！？オイ？！

えええ？！！？チョイト待って？！！

俺はもう17のハンターだぞ？！！！！

大体学校って何だよ？！

そこまで考えてふと、自分の格好を見る。

・

・

・
・

ええ!?!?!

更に待ってくれ?!

若返ってるし!?!どうなってんだ?!
てかすげーな雷!

落ち着け俺、いいか、今俺は何をすべきか、考えろ。

「ところで君、落ち着いたところで名前を聞きたいんだが・・・」
目の前の人はそう言った。

「え? えーと・・・」

・・・。

やべ、名前、何だっけ?

えーと・・・たしか俺は・・・

「ユクモ村の・・・」

「へ? 湯雲君?」

目の前の人がなんか言っているが無視だ、無視。

今は何でもいいから思い出すんだ!

他には・・・えーと・・・

「溪流・・・茂っている木・・・アオアシラ・・・」

「ねえ？湯雲君？」

「・・・・・・・・」

突然バン！と叩かれた。

「君、湯雲 茂君？」

「え？ええそれです・・・・」
いつの間にか確定してるし！

こうして、俺の新たな日常が幕を上げた。

第二話 登校と、狩猟と（前書き）

はい、はじめていきます。

第二話 登校と、狩猟と

くっ・・・ああ〜」

部屋のベッドで朝目覚めて、ぼんやりと考える。

しかし、どういうわけかユクモ村から見滝原町と言う所へと俺は来てしまった。

一体なぜ？

まあ、名前も与えられた。・・・ッこっちに来てから忘れた事が多いのに、
しっかりと自分がハンターである事、ユクモ村にいたことは覚えて
いる。

それより、とにかく俺は中学校というやつに通う事になるらしい。

・・・大丈夫か、俺？

こっちの知識ゼロだし、覚えているのはモンスター関連、道具とか
だけ。

ユクモノシリーズはいつの間にか消えていた。

こっちは後で探すとして、

「げええ！遅刻確定かよ！！」

ま、まずい・・・

しょっぱなから遅刻というのは結構つらい。

前に知り合いのパーティを待たせた時は酷かった・・・！

無言で、睨まれた経験があり結構つらかった・・・！！

制服に腕を通し、鞆を持って、

なぜかベッド脇に転がっていたビンをしまい、（千里眼の薬が入っていた。なぜ？）

急いで部屋を出る。

「いってきます！！」

その後の俺は走った。

そうだな・・・たとえば初めてドスファンゴに遭遇した時、

武器が片手剣で歯が立たず、全力で逃げ出した時並だったかな？

いや、下手をすれば自転車というやつ（昨日見た。早かった。）を追いつきそうなくらい早かった。

並走している俺を見ておぼちゃんが驚いた顔をしてたっけ。

「転校生を紹介します。湯雲君。暁美さん。」
担任が言うのを見計らって教室に入る。

「湯雲 茂だ。勉強は苦手なので世話になるが、よろしく頼む。」

「暁美ほむらです。よろしくお願いします。」

なんだ？この緊張感・・・？

水を打った様に教室内が静まる。

俺は思わず隣の転校生を見る。

凜とした雰囲気到底知れない物を感じた。

授業が始まる。

「……………」

俺は焦った。何一つ分からない。

冷や汗が出てきた。ついでに刺すように痛い視線を。

例の転校生が、数秒ごとに俺を見てくるのが分かった。

感覚的には村に来る途中に見た、ジンオウガと同じくらいの眼力だ。

「ねえ、湯雲君って何処の学校だったの？」

聞かれた俺は――

「その質問は答えられないよ。」

「じゃあさ、普段何やってたの？」

「狩りの手伝い。」

「狩り？ぶどうとか？」

「よく分からないが、そういう事だ。」

やっべえ！！狩りって言っちゃまった！

何とかなったけど、あまり正体を明かさないようにしよう。

あれ？転校生が・・・ピンク色の髪をした子を連れて行った・・・

特別不思議な事じゃないのに、その、えーと暁・・・転校生が去っていく姿が気になった。

授業。

なんだ、これは?!?!?!

意味の分からない羅列を転校生が前の黒板に書いていく。
当然ながら、俺は分からない。

軽く、ざわめきが起きていた。

授業、科目名は忘れたが、
体を動かす事らしい。

よし、ここで俺も挽回といきますか。

俺の番になった。

「どおおおおおっせえええいいい!!!!!!」

地面を蹴り、全力で飛ぶ。

防具や武器などがない分、体は軽かった。
棒を飛び越え、空中で一回転する事も余裕だった。

自慢ではないが、小さい頃は
三回転ぐらいいできたが、ハンターをやってからはずかしくな
っていた。

振り返ってみると、

先生はペンを落とし、クラスの人は歓声すら上がらなくなっていた。
あれ？俺、まずかった・・・か？

放課後、誘いを断りぶらぶらと街を歩く事にした。
適当に、何か飲もうと鞆を開けビンを取り出し一気におった。

そこで気づいた。

入っていたのは千里眼の薬。

通常なら何もならないはずだが、
どうもモンスターがいるときと同じ感じになった。

・・・バカな！！

この世界にはモンスターはいない？！なのにどうして？！
意味が分からない！！

考えながら、研ぎ澄まされた第六感を頼りに走る。

暗い建物に入った瞬間、俺の体に衝撃が走った。

「いてて、」

「あっ！湯雲君！」

「え？」

見ると、青髪の子とピンク色の髪をした子がいた。

「えーと？」

「助けて!!」

・・・よく見ると、白い動物を抱えていた。

「すまないけど、なんだいそれ？そして名前なんだっけ？」

「美樹さやか！でこっちが鹿目まどか！」

青髪が俺に焦った様子で言う。

うおっ！

突然俺の体は輝きだし、ユクモノシリーズを身に着けていた。

「なん・・・で？」

俺は、混乱した。普段なら駆け出していたが、狩場の雰囲気が変わっていった。

!!

この感じは・・・！

「何かがおかしい!!！気をつけろ!!！」

道は変わり、変な風景になる。

「何かいる！」

「下がっている！！」

俺はそういうや否や背中からユクモノ太刀を取り出し、構えた。

無数の声が聞こえるが、『それ』へと太刀を叩き付けた。

その途端、俺へと飛び掛ってきた。

「りゃあああああああ！！！！」

俺はそれへと突きを入れ、さらに切り上げる。

「がっ！」

そこで、攻撃を食らう。

「湯雲君！！」

誰かの声が聞こえる。

いや、幻聴か、ぼんやりと考えながら、目の前に落ちた閃光玉を掴み、投げつける。

周りを光が包むその途端、一つの大きな影が焦ったように動いた。

間違いない。こいつがリーダー。

ドスジャギイの群れを潰した時、残ったリーダーと同じ反応。

その途端、痛みを忘れ、駆け出す。

「はああああ！！！」

気刃斬りを繰り返す。

慌てて逃げ出すが、修正して大上段からの一撃を叩き込む。

そのまま気刃大回転斬りにつなげる。

そこで、『それ』は力尽きた。

「——っう！！」

終わった途端、忘れた痛みがぶり返してきた。

「湯雲君!!」

鹿目さんが近寄ってくる。

大丈夫と、手を振った。

うん。めっさ痛い。

回復薬を取り出しあおったところで、

「危なかったわね……って終わっちゃたか……」

「誰だ!!」

俺は、警戒しながら収めた太刀に手を伸ばす。

第二話 登校と、狩猟と（後書き）

さて、次はいよいよあの人が！

第三話 驚愕と、興味と。 (前書き)

今回は短めです。

第三話 驚愕と、興味と。

その現れた人は、金髪でロール（詳しくは知らない）がいた。

何かしゃべっているが半分は理解不能だった。

むしろ、ふつふつと疑問が頭に浮かんでくる。

Q B？なんだそれ？だいたいなんで一介の学生がこんな意味不明の空間にいるんだ？

鹿目がその人と話しているが、どうやら興味の対象が俺に対して写りつつあった。

とりあえず質問をぶつけてみる。

「あんたは、一体・・・」

そこで、俺の質問の答えが言われる事はなかった。

転校生が何処からともなく現れたからだ。

「転校生・・・！」

「魔女なら倒したわ。」

「私があるのは——」

「飲み込みが悪いのね、見逃してあげるっていつてるの。」

「お互いに余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」
沈黙。

しばらくにらみ合った後、転校生は去っていった。

俺は治療を始め

その生き物を見ていると、いつの間にか
金髪ロールが手を当てた。

へ？ どういうことだ？

いつの間にか手ひどくやられたはずの傷が治っていった。

「ああ・・・」

何処からともなく安堵の声が上がる。

「ありがとうマミ。助かったよ。」

その生き物が声を出した——つてえええ！？

こいつ、しゃべった？！

バカな——っ！！

こっちじゃ人間のほかもしゃべるが、
それはアイルーだけだ。

猫がしゃべらないのは昨日確認したはず！なのに、どうして？！

「お礼はこの子達に、私は通りかかったがけだから。」

マミと呼ばれた金髪がしゃべっているが、正直どうでもいい。

「どうもありがとう。僕の名前はキュウベえ」

俺は目を見据えて『それ』を見た。

——ッ！！？

俺は自分の目が信じられなくなりそうだった。

なにせ、『それ』からはまったく生気がなかったからだ。

まるで、ぬいぐるみ。

無機質な高い声。

見た目で正直騙されそうになった。

皆が話すが、内容は頭には入っていなかった。

そんな俺の心境を通り過ぎて、

キュウベえは続ける。

「僕、君達にお願いがあつてきたんだ。」

「お、お願い？」

「僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ。」

「僕は君達の願い事をなんでも一つかなえて上げる。」

「えっ、本当？」

「願い事？」

「何だって構わない、どんな奇跡だって起こしてあげるよ。」

目を輝かせて（主に美樹が）キュウベえを凝視する。

俺はそれはじめて聞く単語——魔法少女とやらに少しだけ、ほんの少し、興味を持った。

第三話 驚愕と、興味と。(後書き)

書き上げて、ようやく一話終了・・・
結構疲れるんですね・・・

感想などをお持ちしています。

第四話 追憶と、説明と。(前書き)

うゝん・・・

いまいち美樹のキャラがたってない気がする・・・

感想などでもらえれば幸いです。

第四話 追憶と、説明と。

「おい、おい！」

俺はある意識の中で夢——だろうか？それを見ていた。

誰だろう。誰かが俺を呼んでいる。

俺は・・・

俺を起こした人は・・・

ギザミシリーズだろうか？いや違う細部が異なっていた。
背中には・・・双剣？

なんなんだ・・・？

「とにかくヤツには気をつけろ！ヤツは——！！」

意識が戻る。

なんだ・・・今の夢・・・？

とにかく起きて気づく。

どうやら寝なれたユクモ村の部屋ではないようだ。

それに昨日の話・・・

魔女と魔法少女ねえ・・・

正直、俺には昨日巴先輩の家で聞いた話は理解に苦しむ。

もちろん、キュウベえが話した事も。

「素敵なお部屋・・・」

昨日、俺は巴先輩の部屋にいた。

「一人暮らしだから気にしないで。」

そう巴先輩はいったが、この歳で一人暮らしはロクな事があつたとは思えない。

まあ、俺はハンターになりたいといったら、親父は両手を上げて喜んでくれた。

村にはハンターも少なく、結構自分自身懂れていたから俺へ賛成してくれのだが。

「魔女ってなんなの？魔法少女とは違うの？」

「願いから生まれたのが魔法少女なら、魔女は呪いから生まれた存在なんだ。」

「魔法少女が希望を振りまくのなら、魔女は絶望を撒き散らす。」

「希望と絶望か・・・」

手当てをした腕をさすりながら呟く。

「理由のはっきりしない事故や自殺なんかはかなりの確率で魔女による物なの。」

いつになく真剣な顔の巴先輩。

「形のない存在とかっていうのかい？」

もしそうだったら、まだむこうの方が安全だ。

「ええ。」

「そりゃおつかないわな。どうして誰も気づかないんだ？」

「魔女は結界の奥に潜んで、人の目には触れないからね。君達がさつきいたところだよ。」

「結構危ないところだったのよ？まあ、君が居たから何とかなかったけど。」

「まあ、はい。」

結構人から感謝される事には慣れたが、こうも面と向かって言われると結構アレだ。

「願いをかなえる代わりに魔法少女の戦いは常に死と隣り合わせ」

「それで相談何だけどしばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

これは男の俺には関係のない話のようだ。

結局の所、最終的な判断は自分でして欲しい。だって自分の問題だし。

そろそろ退散させてもらおうでしょうか——って、

「鹿目、掴んだ俺の腕を離せ。」

「まだ、湯雲君の話は聞いてないよ。」

そうか、目を背けた事から戻さざるおえないか。

「そうね、私もあの事は気になるし。」

「はぁ、分かったよ・・・」

覚悟を決めて話し始める。

「俺はな、実はこの世界の人間じゃないのかもしれない。」

「「「ッ!!」」」

全員がギョっとした様子で俺を見つめる。

構わず俺は続けた。

自分はユクモ村というところに住んでいること。

雷に打たれてこの世界に訪れた事。

自分がハンターという存在で、それがなにをするのかを。

「——って訳だ。」

「えーっと・・・湯雲君はつまり、ハンターという仕事について」

「生き物を狩る存在だって事・・・」

「まあ、そういうことだ。」

「じゃ、じゃああの格好は・・・」

「ん。狩りにいくときの装備だな。」

とかなんとかやっていくと時間は過ぎていった。

帰り道。

俺はハンターになった理由を思い出した。

あるときだ。旅行中、俺はモンスターの群れに囲まれていた。

乱暴にゆれる馬車から振り落とされ、もう死ぬしかない。
そう思った。

そこで、一人のハンターが現れた。

ギザミシリーズをまとい、ギルドナイトセイバーを背中にかけたそのハンターを。

一瞬でランポスの群れを蹴散らし、
幼い俺を担ぎ上げガシガシと頭を撫でていったそのハンターを。

その背中に憧れて、俺はハンターになったのだ。

いつか、俺もあなりたい、と。

「——雲君、湯雲君。」

ぼんやりとした考えを追い払う。

「ん？どした鹿目？」

「まどかでいいよ。それより、何でハンターっていう危険な職業についたの？」

「確かに、魔法少女とは違って願いもかなえてもらえないのに——」

美樹——つとさやかもつなげてくる。（名前で呼んで欲しいと頼まれた。）

確かにもっともな質問だろう。

ハンターになる理由は様々だ。

狩る事の楽しみを感じてる奴や、村の為、最近聞いたガンナーの話では家族を養うってのも居たな・・・

少し、考えこう答える。

「俺は、俺にとってハンターって言うのは憧れなんだ。」

「憧れ？」

「そう、昔な——」
子供の頃合った話を言う。

「へえーじゃあそのハンターさん見たくなるのが、」

「俺の願い、だ。」

「っと、俺こっちだから」

「うん、また明日。」

「じゃあねー湯雲——！」

適当に手を上げておく。

俺は家に帰って今日の出来事を反芻する。

魔法少女に魔女とか、意味が分からない。

それに、

もう、俺は他人事で済まされる状況ではなさそうだ・・・

第四話 追憶と、説明と。 (後書き)

はい、結構つらいですがなんとか上げていきますので感想とかよろしくです。

第五話 出撃と、猫達と（前書き）

サブタイトル変えたほうがいいですかねえ・・・

そして短めです。

第五話 出撃と、猫達と

ご、ご主人が、消えた、ニヤ？」

ここはユクモ村農場。

「うん、確かに雷が落ちて・・・消えちゃったニヤ・・・」

「レウス・・・元気だすニヤ・・・」

レウスとよばれたアイルーは落ち込んでいた。

当たり前だ。何しろ最古参のアイルーで、ご主人の相棒とまで言われたアイルーである。

慰めているのは、ブーメラン一筋のアイルー、シュガー。

「ご、ご主人は一体何処に・・・」

キンチャクという名前の付いたアイルーは、タル爆弾の整備をせずにうろうろと歩き回った。

それはともかく、他のアイルー全員が落ち込んでいた。

ここのアイルーの半分は捨てられたり、野良であつたりと様々な事情拾われた存在。

そこに現れたのが今の主人であり、雇われた以上の存在であつた。

そこで、主人が消えてしまえば、不安になるのは当然だ。

「ならば、行くか？」

ふと、振り返ると、ギザミXシリーズにガンチャリオット改を装備したハンターがいた。

「どなた様ニヤ？」

「主人の行方を知っている者、とでも。」

その瞬間、アイルー達の目つきが変わった。

「本当ニヤ？」

全員の覚悟は決まった。
後は、行くだけ。

第五話 出撃と、猫達と（後書き）

アイルーがでるのは、もう少し後ですかね。

第六話 命かけてもやりたい事か（前書き）

はい、脈拍なくサブタイトル変えました。

ネタが尽きてしまったので・・・その・・・

第六話 命かけてもやりたい事か

?????

side

「ぐっ……」

突然襲ってきた頭痛に頭を抑えた。

ノイズのような音に顔をしかめる。

俺はそのまま床に倒れた。

……

なんだ、この感じ……？

俺は学校にいたはずなのに……ここは？

そこは夕焼けの空。高いビルの前に俺はいた。

誰かが落ちてくる。やばい、あの高さでは——！

全力で走り、手を伸ばす。

そこで不意に、意識が戻ってくる。

「大丈夫？」

「あ、ああ、ここは？」

「保健室よ。突然倒れちゃって大変だったわ。」

「あ、ありがとう、巴さん。」

「そんな事より汗だくよ？大丈夫？」

巴さんに言われて、顔を手で拭く。

確かに俺は汗だくだ。

「私、用事あるから行くね。」

「あ、ああ。」

湯雲side

「おっはよー!」

全力で走りながら、前を歩くまどかとさやかとあと一人（誰だっけ？）

の前を通り抜ける。

別に遅刻はしないが、体が鈍るため走っている。

「あ・・・」

「雲——!」

何か知っているが、正直聞き取れない。

そのまま走り、学校へ。

「ふわあああ・・・」

授業中、大欠伸をする。

「湯雲君、貴方は真面目にやってください。」
怒られてしまった。

「すみません。」

そう言いつつ、退屈な事この上ない授業を聞き流す。

これなら、まだ教官の講義に出てたほうがいいな・・・

ちらりとさやかの方を見ると寝ていた。

午後。

俺は、机に突っ伏して寝ていた。

そのまま、そうしたかった。

しかし、どうにもそれは無理みたいだ。

授業が終わるや否や、さやかが俺を起こしにきたからだ。

「コラコラ湯雲く。今日は暇なんでしょう？」

更に

その瞬間、俺はクラスの半数の視線を感じた。

って、おい！シャレになんない目で見られてるぞ！？

おい、その男子、無言で「湯雲潰す・・・」とか言うのやめろ！！

怖ええって！！

今日ほどモドリ玉を使いたいと思った日はない・・・！！

どこかで打ち合わせをしていたが、

半分以上居眠りしていたため話を聞く事ができなかった。（後でさ

やかに殴られた。めっさ痛い！）

魔女退治見学ツアーが始まった。

「命かけてもしたい事ねえ・・・」

確かにハンターは命がけだ。

しかし、魔法少女とは『何か』が決定的に違う。
そんな事を考えながら、三人の後を付いていく。

次の瞬間、落下していく姿が映った。

巴先輩が変身と同時に走っていったが、
追い越して、受け止めた人影があった。

その人は、

見慣れない防寒着、
いや、いつか会った人の防具に良く似ていた。

確かポツケ村だったか？

肩に一本の太刀を背負っていた。

そして何より驚いたのが、

「ゆ、雪永君・・・？」

巴先輩が発した一言だった。

第六話 命かけてもやりたい事か（後書き）

正直、ここからは速度が落ちます。

第七話 それはとってもうれしなって（前書き）

今回は長めです。

第七話 それはとってもうれしいなって

雪永 side

俺は、あの後すぐに駆け出してビルを探した。

分かった事はここからでは少々時間がかかるということだった。

なんとか間に合ったが、まだ少し余裕があった。

その間に、ふと思った。

俺はなぜここにいるんだ？

俺は数日前の事を思い出す。

依頼で雪山を訪れ、灰水晶の原石の運搬中

轟竜、ティガレックスに襲われてから

とっさに雪原まで走って逃げて――

この先が思い出せない……

そこで気づく。ビルの屋上に人が立っているのを。

「っ!!」

全力で俺は走っていく。
あれが予知夢か何かだとすれば、5秒以内に頭から落ちてあの人は死ぬ。

そんな未来があって、それを覆せるなら
俺は喜んでその役を務めてみせる。

「うおおおおお――!!!!」

両腕を伸ばし、落ちてくる人をキャッチする。

・・・なんとか無事だ。

「よかった・・・」

思わず呟くが、思わぬ人から声をかけられる。

「ゆ、雪永君・・・？」

なぜか、少しファンシーな格好（と言うのだろうか？）をした巴さんがそこには立っていた。

いや、違う。

後ろには青髪の女子とピンク色の髪の女子と
一本の大剣のような物を背負ったハンターがいた。

——バカな！！？

あれは確かユクモ村の装備のユクモノシリーズ！？
武器は何だか分からないが、最近開発された物だろう。

その時、俺の脳裏にその男に対して妙な感じがあった。
どこかであったような・・・そんな感じだ。

湯雲 side

俺は巴先輩が放った一言に驚いた。

「巴先輩、知り合いですか・・・？」
まどかが尋ねる。

装備から見てもポケ村のハンターだろう。

「えーと・・・とりあえず名前いいっすか？」

俺はとりあえず、聞く。

「え？ええ。彼は雪永幸輝君。私のクラスメイトよ。」

巴先輩が教えてくれた。

・・・しかし、なぜクラスメイトにハンターが居るんだ・・・？

「なあ、俺、アンタにどこかであったか？」

え・・・？

いや待て・・・俺は――

この人に会った事がある、だって？

いや、確かに何処かで・・・

そこで俺は思い出した。

ユクモ村に、雪山草を届けにきたハンターの顔を。

それは今まさに俺の前に居る男の顔だった。

「まさか、あの時の!!」

「え?二人って知り合いだったの?!」
「さやかが追求してくるがひとまず無視。」

「なあ、覚えてるか?えーとユクモ村に居た・・・」

「ああ!そういえば俺に灼熱しるこをくれたあの!」
「向こうも思い出してくれたらしい。」

しかし、きっかけが灼熱しるこって・・・

見れば俺ら以外の三人はキョトンとした顔をしていた。

「ま、まあとにかく魔女退治に行きましょうか!」

なんとか仕切りなおすらしい。

「待て。」

「何?」

「俺も行く。」

「雪永君が？」

「見る限りその・・・」

「湯雲な。」

「湯雲も同行していたし、人数は多い方がいい。」

「ええ、いいわよ。」

巴先輩が承諾する。

ひとまず中へと突入する。

その前にさやかのかのバットがメイスへと変わった。

「気休めだけど、それで身を守るぐらいにはなるわ。」

「さて、行こうか。」

雪永は骨刀【狼牙】を抜き放ちながら言った。

「よし！」

俺はスラッシュアックス、

銘をユクモノ剣斧を抜き、斧モードにすると

雪永、巴先輩、まどか、さやか、俺の順で結界へと足を進めた。

「来るなっ！、来るなッ！」

さやかがメイスを振るう。

弾かれた使い魔を切り上げ、そのまま剣モードにして別の使い魔を斬り付ける。

「どう、怖い？」

武器を収め走っているときに巴先輩が聞いてきた。

「なんてこと、ないっ！」

さやかが言ったが、声が震えている。

「この程度、せいぜいランポス程度か・・・」

「ブルファンゴよりは楽だなこりゃ。」

結界の最深部へとたどり着く。

「うわ・・・」

「あんなのと戦うんですか？」

まどかとさやかは嫌悪感を出していたが、

「よし、俺も行くか。」

「待って、雪永君。」

巴先輩が雪永を呼び止め、
何かを言った。

そして渋々了承したようだった。

「大丈夫、負けるもんですか。」

そういつて魔女の前へと飛び出していった。

スカートの下から銃を取り出し、撃ったと思えば、

帽子からも無数の銃を取り出し打ち続ける。

「不味いな・・・」

幸輝が呟く。（さっき幸輝で呼んでもらいたいと言っていた。）

「え？」

一瞬、視線を向け戻すと巴先輩が蔓のような物に捕まり振り回されていた。

ドゴン！

壁に当たり、盛大な音を立てた。

「ママさんー！！」

さやかが叫ぶ。

「湯雲、行くぞ！」

「ああ！」

そういつて俺と幸輝は飛び出した。

「あ！ちよつと！！」

「でええええい！！！」

ユクモノ剣斧を取り出し、剣モードで胴体を切りつける。

「はあ！！」

幸輝は骨刀【狼牙】を振り下ろし、突きへつなげると蔓を切り上げて切断した。

「うりゃああああ！」

俺はそのまま、属性解放突きを食らわせると魔女は大きくひるんだ。

「ティロ・ファイナーレ！」

巴先輩が叫ぶと、大きな銃からもはや砲撃に近い攻撃が繰り出された。（すげえ爆風だった。）

魔女は消し飛んで、巴先輩は何処からともなくティーセットを取り出した。

そして、こちらに笑いかけてきた。

「か、勝ったの？」

「す、すごい・・・」

まどかとさやかが呟く。

いつもの風景に戻る。

それは一つの狩りの終わりを意味していた。

「これがグリーンフシード。これは――」

巴先輩が説明をするが、俺は聞いていなかった。

ずっと後ろから感じる気配を気にしていたからだ。

「誰――」

幸輝が言い終わる前に、マミさん（マミでいいといわれたが、どうにもそんな感じになれない。）

が、グリーンフシードを投げた。

何も居ないはずの暗い空間、ただし気配だけはあったところからパシン、と音が鳴った。

「曉美ほむら・・・!」

「後一回くらいは使えるわ。貴方にあげるは。」

「それとも人と分け合うのは不服かしら？」

「貴方の獲物よ。」

「そう。それが貴方の答えなのね。」

そういつて立ち去っていった。

投身自殺しようとしてい人の介抱を済ませ、
帰路に着いた。

帰りの話では、当然だが、マミさんの話になった。

まあ、あまり俺の話はしたくない。

「なんつーかさ・・・マミさん大人びてないか？」

「確かに・・・」

「でもどうして？」

「いやね・・・俺から見てもなんつーか・・・」

「ま、いっか。」

「それより湯雲、あんたあんな事してて怖くないの？」
風向きが変わってくる。

「うーん・・・でもまあそれが仕事だし。それに、」

「俺は前にも言ったような事でだな、その過程で人から感謝されて
るわけだし。」

「でもまあ、人から感謝されるっていうのはさ」

「それはとってもうれしいなって、さ。」

第七話 それはとってもうれしなって（後書き）

次はどうしよう・・・

マミさんはどうしようか迷っていますが・・・

第八話 そいつはな、馬鹿でどうしようもない奴だったよ（前書き）

はい。

待たせましたが、そろそろあげていきたいです。

第八話 そいつはな、馬鹿でどうしようもない奴だったよ

湯雲 side

「終わりましたね・・・」

「かつこいいなー！マミさん！」

「しかし、グリーンシードは落とさなかったが・・・？」

「今のは分裂した使い魔だからね。グリーンシードは持ってないよ。」

「なら、俺達が相手した方がいいんじゃない？」
ユクモノ鉈をしまいながらたずねる。

「でも、それじゃあ見学にはならないでしょう？」

「まあ、確かにそうだな・・・」
幸輝が同意する。

「行きましょ。」

「所で、マミさんはどういう願い事を？」

「……………」

マミさんの表情が強張ったのを見て、俺はまずい事をした、そう思った。

「……………」

幸輝はそれを感じたようで、小さく首を横に振った。

おそらく、幸輝は

これ以上は彼女が話さない限り聞くな、という意味だろう。

話は予想通りだった。

交通事故にあい、親を失って自分自身も瀕死だったらしい。

その時現れたのがキュウベえだった。

そして、マミさんは契約し命を取り留めた。

しかし、契約によって代わりに魔法少女になった。

なんつー話だ。

俺も命の危機に陥った事はあったが、
無条件で助けてくれる人がいた。

俺は好きでこの『ハンター』という職業に就いたが、
ママさんは考える時間もなく、ただただ生きるために戦う事になっ
た。

ある意味理不尽な話だ。

「ねえ、ママさん。」

「えっ？」

「願い事だけどき、自分の事じゃなきゃ駄目なのかな？」

「たとえば、あたしなんかより困っている人がいてさ、」

「それって上条君の事？」
はて、誰だろう？

「でも、あまり感心できた話ではないわ。」

「全くだ。」

珍しく静観していた幸輝が同意する。

「他人の願いを叶えるという事はそれは自分自身が死んでもいい——そこまで考えてるのか？」

「だから、たとえば——」

「そういう願いは少なからず身を削る。報われなくても、だ。」

「それにな、俺はそうして失敗した奴を見てきた。・・・そいつはな、馬鹿でどうしようもない奴だったよ。」

俺はその境遇に同情した。

まさか、マミさんがそんな状態になっていたなんて。

俺がハンターになる時は、

親父から弟までに反対されたっけな。

だけど俺はハンターになるという事を押し通した。

その結果が昔の俺か・・・

前までうつとうしいと思っていた親父の言葉が今なら良く分かる。

それにしてもさやかにあそこまで言う必要はなかったな・・・

まったく、自分の性格が嫌になってくる・・・

湯雲 side

俺達は幸輝やママさんと別れた後、いつもの3人で歩いていた。

「まったく!! 雪永のやつ!!」
さやかはさっきからあんな調子だ。

「ま、まあまあ、

正直、幸輝の奴は・・・。
最初に会った時からそうだ。

妙に勘がいいと思えば、仲間とは衝突するし・・・

さやかの事だって心配していたが、うまく伝えられなかったんだろ
う・・・

「な、なあ、さやか・・・」

じろりと俺を見てくる。

怖わあ!!

コイツ相当にキレてる!!
話したくないな・・・

「ゆ、雪永の事だけどさ、あいつは最初からあななんだ。」

「つまり、偏屈野郎って事？」

「違う。あいつは——」

あれ？俺ってなんで幸輝の事をこんなに知っているんだろう？

確か2回だけ狩りに一緒にいっただけなのに・・・ッ！！

痛ッ！！何だこれ・・・！？

これは・・・轟竜！？

どういう事だ？！

幸輝に何があったんだ・・・？

その時、俺の頭には轟竜ティガレックスと戦っている幸輝の姿が鮮明に浮かんだ。

さやかが尋ねてくる。

「あいつは——何？」

「と、とにかくあいつにも何かあったんだよ。きつとな。」

そこで痛む頭を抑えながら会話を切り上げて帰路に着いた。

第八話 そいつはな、馬鹿でどうしようもない奴だったよ（後書き）

三話入りました。

どうか終わりまで見てやってください。

第九話　なんだって・・・こんな所に・・・（前書き）

おまたせしました。

最近気が付いたのですが、湯雲の戦闘シーンは溪流のボスの音楽を流すと楽しめると思います。雪永は私的には2ndの雪山がお勧めです。

他にぴったりの音楽があれば、ぜひお教えください。

第九話　なんだって・・・こんな所に・・・

??? side

「う・・・」

ここは何処だ？

俺は確か――

「そうだ・・・！」

俺は、笹草健助は、

「なんだって・・・こんな所に・・・」

また、これが繰り返される世界なら・・・

止めてやりたいが・・・

「無理だろうな・・・」

ハンター達に干渉できない今の俺では。

「――っ!!」

病室を出た俺の前には、美樹さやかが泣きそうな顔で駆け抜けていった。

「……なんだってんだ？」
そこまで考え、思い出す。

上条恭介。

その名前を。

ここの病院に入院し、さやかが魔法少女になるきっかけになった人物。

そして、さやかが……

止めよう。この話は。

開きっぱなしのドアを開け、俺は中に入る。

「どちら様でしょうか……？」

「俺は笹草健助。すまないがちょっといいかな？」

「いいですけど？……ああ、すいません。僕は上条恭介です。」

恭介と話しながらこう思う。

向こうの世界のハンターには干渉が難しくても、
こちらの世界の人なら干渉して未来を変えて見せよう、と。

「かああゝ・・・」

授業を終えて帰り支度を済ませると、
さやか of 奴がまどかを伴って俺を病院へと連れてきた。

「で、用件を聞こうか。」

「えっと・・・恭介 of 奴 of 見舞いだよ。ハハハ。」
俺に関係なさそうな話だな。オイ。

「ッ！湯雲君、さやかちゃん、あれ！」

「グリーンシードだ！孵化が始まっている！！」

「まどか！マミさんの連絡先は！？」

「えっ？うんん。」

「マズったな・・・。」

まどかが首を振る。

コイツは本格的にやばいな・・・

今いるのは、役にたたなそうな獣見たいなのが一匹。

一般人が二人。

で、ハンターである、いわば戦闘員が俺一人。

しかも俺は飛竜ならまだしも、（それでも危険だが、場数を踏んで
るから二人を逃がす事はできるだろう。）

魔女なんて専門外だ。

くそ……。オトモアイルーでもいればな……。

どうする……。？

三人共離れるのは論外。

病院だから被害甚大になるのは目に見えている。

「まったく、仕方ねえな……」

ユクモノシリーズを纏い、ユクモノ剣斧改を装備する。（いつのまにか強化されてた。なぜ？）

「二人共、ここは俺に任せてマミさんと幸輝を探してほしい。」

二人は探しにいらったのが得策だろう。

危険だが、ペイントでも当てとけば幸輝達が来たときの発見が容易になる。

「まどか、行って。あたしはこいつを見張ってる。」

「え？」

「無茶だよ！」

「俺でも守りきれる保障はないぞ？」

「結果がとじたら、出られなくなる！」

そういつても、さやかは本気だ。

何かを背負っているような・・・そんな何時かの俺みたいな目だ。

「しゃーない。まどか、行って来い。」

「そんな・・・湯雲君・・・」

「行って来い。頼んだぞ。」

「死なないでね！絶対だよ！」

そう言って、そのまま走っていった。

俺は手を上げながら、それに答える。

「任せておけ！！」

さてと。

俺は基本、安全志向なんだが
その安全志向を危険な所に突っ込んだ元凶を見る。

「・・・まったく、アンタは無茶やるねえ・・・」

「ごめん・・・でも・・・」

「いって。何かあるんだろ？」

そういつつ、武器をユクモノ剣斧改からユクモノ銃槍に変える。

さやかがいる以上、防御力のある盾を持った武器を選ぶ。

「さて、いっちょ行きますか！」

全く、俺の周りは無茶をするのが多い連中だ。
久しぶりに、無理を試みますかね！！

第九話　なんだって・・・こんな所に・・・（後書き）

はい、次はいよいよアレですね。
作者としてもがんばっていきます！

第十話 もう何も怖くない（前書き）

感想などがあつたらぜひ書き込んでくれるとありがたいです。
次話を書く励みになるんで。

「――君、雪――が――雪永君!!」

「ッ!!!!!!」

はっとなり、机から頭を上げる。

頭を上げると、そこにはマミが俺の顔を覗き込むような形で見ていた。

「授業、終わったわよ。それよりどうしたの?」

「あ、ああ。わ、悪い。」

珍しく俺は眠っていたらしい。

「どうしたの? 真っ青だけど・・・?」

「いや、何でもないんだ、ハハハ。」

どうして今そんな物を見せようとする。

何でそうなる。

自分自身への戒めか？それとも・・・

そうだとしたら、俺は、どうしようもない、クズだ。

自分が守るものを投げ出して、無謀にも挑みかかって、また更に失っしまった。

「さ、帰りましょう。」

「ああ。」

机の中に教科書を入れ、（置き勉強？そんなのデフォルトだ！）
鞆を取り、教室を出る。

「雪永君、その・・・」

「ん？どうした？」

「ありがとね。」

「礼を言われる覚えはないが、俺なんかやったっけ？」

「私がクラスで孤立してたのを助けてくれたじゃない。」

「ああ。その事か。」

正直、マミはクラスで浮いた存在となっていた。

しかし、今は違う。

まあ、少々手を貸しただけなんだが……

「マミさん！雪永先輩！！」

「まどか！どうした！？」

凄い慌てようで、まどかが走ってきた。

「グリーンシールドが病院にあって、孵化寸前で……湯雲君とさやかちゃんが……」

病院！？下手をすれば大惨事だ！

「分かった。もういい。」

湯雲の奴なら大丈夫だろう。しかし……

マミと目を合わせる。

その瞬間、俺の脳裏にはティガレックスに頭を噛み砕かれた後輩の姿が浮かんだ。

なんで……今こんな時にッ！！

体の震えを押さえつけ、走り出す。

「ここね・・・」

マミがソウルジェムをかざすと、入り口があいた。

「よし、行くぞッ!!」

マフモフシリーズを纏い、骨刀【狼牙】を装備し、飛び込んだ。

湯雲 side

「結界がとじた!!」

「怖いかい？」

「そりゃ、まあ。」

「俺はぜんぜん。」

それより怖い経験があるからな・・・

「願い事をきめてくれれば、今でも魔法少女にしてあげられるよ？」

「いい。やめとく。できる事ならいい加減な事で決めたくないから。」

「じゃあ、湯雲、僕と契約して魔法狩人にならないかい？」

「断る。俺はハンター一筋なんだね。」

雪永 side

「全く、さやかも無茶するね・・・」

「でも冴えた手だわ。こうすれば、」

「なるほど、ねッ!!」

俺は石ころを後ろに全力で投げた。

「・・・曉美ほむらさん。今回はどういった用事で？」

「二人の安全は保障するわ。今回は手を——」

曉美が何か言う前に、マミはリボンで縛り上げた。

「ば、馬鹿ッ！こんな事している場合じゃ！」

マミはすでに聞く耳持たずといった雰囲気で、歩いていった。

「ゆ、雪永幸輝、」

「・・・」

「今回の魔女は次元が違うわ。何かあったら・・・」

「分かった。所で、後でアンタが何者かを教えてくれ。

俺には、普通の魔法少女には見えないのでな。暁美ほむら。」

俺が急いで後を追うと、二人が何かを話している最中だった。傍に近づき、話を聞く。

「——それが嫌でしょうがなかったんです。」

「でもママさんと会って、誰かを助けるために戦ってるの、見せてもらって

同じことが、私にもできるかもしれないって言われて。」

「だから私、魔法少女になればそれで願いは叶っちゃうんです。」

「こんな自分でも、誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたら、それが一番の夢だから。」

なるほど・・・

まどかは自分自身に対しての劣等感でも感じていたんだろうか・・・

何だかあの『後輩』にそっくりだな・・・。

って、何考えてるんだ俺は!!

「だから私、頑張っているママさんに憧れているんです。」

「憧れるほどのものなんかじゃないわよ。魔法少女なんて。そういうママはぼつぼつと言い出した。」

「無理して格好つけてるだけで、怖くても辛くても、誰にも相談できないし、ひとりぼっちで泣いてばかり良いものじゃないわよ。魔法少女なんて。」

「やれやれ・・・」

俺はため息をついた。

まさか、そんな事だとはな・・・

「全く・・・気が付かなかったのか？」

ママは自分の葛藤が解けている事に気づいていないな・・・

・・・ちよいと、手を貸そうか。

「えっ？」

「雪永君・・・? どういう事・・・?」

「すでにな、ママの周りには共に肩を並べて戦う仲間がいる。」

「俺に湯雲に、さやかにまどか。」

「これだけ居りゃ、もう十分過ぎる。」

「だから、もう一人じゃない。そうだろう？」

「・・・そうね、そうなんだよね。」

やけに晴れ晴れとした表情でマミは言った。

「もう何も怖くない。」

第十話 もう何も怖くない（後書き）

じゃ、次回をお楽しみに！

第十一話 そんな道理が、あつてたまるか（前書き）

本日は二話投稿です。

第十一話 そんな道理が、あつてたまるか

雪永 side

「それは、頼もしい限りだ。」

マミが言った事に俺は素直にそう言ったが、頭の中では、別だった。

寧ろ俺は、感づいていたのかも知れない。

マミがまどかの手を引き、使い魔を打ち倒し先に進んだ。

扉を開け、ドーナツの陰にいる湯雲とさやかを見て少し、安心した。急いで湯雲に声をかける。

そして、長い椅子に魔女がいるのを見て、マミが飛び出していった。俺はその魔女に何か、不安を覚えた。

まるで、初めてゲリヨスと相対した時の、あの感覚を。

「湯雲！すぐ飛び出せるようにしてくれ！！」

「え・・・？」

なんとか、湯雲は武器を変更し、スラッシュアックスに切り替えた。

俺は既に柄に手を掛け、いつでも抜刀状態にできるようにした。

「マミ！気をつけろ！！」

「大丈夫。」

「せっかくの所悪いけど、一気に決めさせてもらおうよ！」

「フィロフィナーレ！！」

湯雲 side

俺は正直、戸惑った。

冷静なはずの雪永がいつになく、焦っていたからだ。

あいつに一体何があった？

「フィロフィナーレ!!」

マミさんが止めを刺す。

その瞬間、俺はユクモノ剣斧改から手を離してしまった。

それが間違いだ。

拘束されたはずの魔女が口を開けると、中から長い化け物が現れた。

そのまま、マミさんの頭部を食いちぎろうとする。

「あ……」

俺は呆然と立ち尽くした。

そこで飛び出した人影がいた。

雪永幸輝——。

雪永 side

魔女が撃ち抜かれた瞬間、
俺の頭にあの光景がフラッシュバックする。

ティガレックスに頭部を食いちぎられた、あの後輩を――。

その瞬間、俺はマミ目掛けて駆け出していた。

俺が走ると同時に、長い化け物がマミを食いちぎろうと口を開けた。
そこでマミの顔がさっと変わり、絶望に染まる。

このままでも間にあうか怪しい・・・

あの時と同じ状況。

5秒もすれば、マミは頭を食われて死んじまう。

あの時の俺は迷った。

だけど、今は違う。

マミを助ける。

それ以外の選択肢は、今の俺には必要ない！

マミの奴だって、やっと一人じゃなくなったのに――！！

こんなの理不尽にも程がある――！！

そんな道理が、あったたまるか！！！！

俺は、もう誰も失ってしまいたくない！！

そう願うと、体は軽くなった。

そのまま走りこみ、

「うあああああああああ！！！！！！」

右腕を伸ばすと、半分閉まりかけの口に手を突っ込み、
マミの体を掴む。

そのまま抱きとめ、引っ張り出す。

直後。

鋭い歯が防具を切り裂き、俺の右腕に噛み付いた。

「あああああああああああ！！！！！！！！」

痛みを感じ、絶叫しながら右腕を引き抜き、そのまま飛びのく。

右腕を見ると、肘から下が赤く、血で染まっていた。
やべ・・・精霊の加護がなかったら持ってた・・・。

「雪、永、く……ん……」

腕に抱きとめられ、顔半分を血で染めたマミが呟く。

「少し……待ってろ……」
そう返すのが精一杯だった。

骨刀【狼牙】を引き抜き、魔女目掛けて振り下ろす。
それが今できる最大の攻撃だった。

ズキン、と右腕が痛む。

剣筋が乱れ、弾かれる。

「あ……」

その瞬間を待っていたとばかりに、俺を食いちぎろうと歯が迫る。

ガキン、という音にうつすら目を開けると。

その状況を見る。

ハンターシリーズを装備したハンター。
それが大剣の腹で、受け止めていた。

「誰だ・・・あんた・・・？」
そのハンターが口を開く。

「大村 武人。ただのハンターだ。」

「よくやったな。ええつと、まあいい。後は、俺が請け負った。ゆ
っくり休め。」

第十一話 そんな道理が、あつてたまるか（後書き）

さて、次回は新しいハンターの登場です。

第十二話 腹・・・減った・・・（前書き）

はい。

もうサブタイトルがギャグですが、いつもどおり
はじめます。

第十二話 腹・・・減った・・・

湯雲 side

俺は急いで幸輝とマミさんを後退させ、前に出た。

幸輝の奴は腕をやられたこの状況でも冷静だが、（それでも若干冷や汗が出ていた。）

マミさんはさっきまでの元気はなくなり、意気消沈していた。

戦っている大剣使いを見ると――

「だああああ!!」

大剣使いは、そのままなぎ払いにつなげた。

長い化け物の牙とぶつかり、何本かの牙をへし折った。

しかし、そこでとまる。

体当たりを仕掛けてくるが、

「武人!!」

何処からともなく、発砲音が聞こえ長い化け物に命中する。

命中し、爆発する。

「徹甲榴弾だと・・・?」

止血を終えた幸輝が呟く。

確かに、変だ。

俺らの他には、ましてやガンナーはいないはず……

射撃された方を見ると、

ゲネポスシリーズにタンクメイズ装備のハンターが
装填していた。

「よくやった、榛名!!」

「ハンター……?」

さやかが言う。

「そんな事より、あれだ!!」

俺は飛び出し、ユクモノ剣斧改を叩きつけ、そのまま斬り上げる。

「だっ!はっ!はっ!」

俺は息の続く限り、振り回し続けた。

理由は、あのハンターが溜め切りの体勢に入っていたからだ。

「だぁぁぁ!!」

縦切りに振り下ろし、

「——うあああああああああ！！！！」

全力で振り下ろし、それは奴の体を切断した。

「はあ、はあ、終わった・・・か・・・」

「まだだ！！」

大剣使いが振り返る。

「榛名！！あれだ！！」

長椅子に座った、奴を指差す。

無言で撃ち、そして結界が無くなる。

「危ない所を助けてくれてありがとう。」

「ん？ああ。気にするな。それよりそっちの人は平気なのか？」

「大丈夫です。助かりました。」

「ならよかった。はっはっはっ!!」

豪快といった様子で笑っていた。

「それより聞きたい事があるんですが・・・」

「ああ。そうだった。ちなみに、ここは何処だ？」

俺達は雪山でドドブランゴの狩猟をしていたはずなんだが、何かに吹っ飛ばされたと思ったら変な場所にいるし。」

「通りかかったら防具が付いて何だか変な物とも戦ったし・・・」

「幸輝・・・これなのかな？」

「ああ。恐らく。」

「二人とも、いいか？」

「ん？」

そして、幸輝の説明が始まった。

ここは見滝原という街で、

『この』世界では、魔女という物が様々な事故を起こしたりする事。

自分達も、何かの拍子にこっちの世界にやってきてしまった事。

そこで魔法少女と魔女の戦いに巻き込まれて、戦っている事。

「どうする?」

「いや、しばらくあんたらと行動するよ。ここの世界の事も良く分からないうし。」

「そうだね・・・。」

「じゃあこれからよろしく。榛名圭一です。」

「前に名乗ったけど、大村武人だ。」

「この世界では、雪永幸輝でよろしく頼む。」

「俺は——『ゴキユルル』・・・」

おい! いい感じで俺のタイミング潰されたぞ!!

「は、腹・・・減った・・・。」

「た、武人・・・」

そんな事が有りながらも、新しい仲間が増えた。

第十二話 腹・・・減った・・・（後書き）

誤字、感想などがあればよろしく頼みます。

第十三話　そうか、それならばお互い頑張ろう（前書き）

今回は少々視点が変わります。

第十三話 そうか、それならばお互い頑張ろう

笹草 side

「なあ、恭介君。」

「なんです？」

「時に自分の願い、たとえば――」
「そこで恭介の腕を指差す。」

「腕が直るという事ができる状態になったらどうする？」

「えっと・・・つまり、怪我が治る、ということですか？」

「そう。ただし、自分の大切な何かを犠牲にすることになるがな。」

「つまり、何かを失って願いを叶えるということですか？」

「そうさ。」

「僕は――」

「すまない、少し待っていてくれ。」

そうやって病室を飛び出した。

外に出て、辺りを見回す。

あった。

魔女の結界。

俺は、レイアSシリーズと炎剣リオレウスを身につけ
結界へと飛び込んだ。

立ちふさがる使い魔に蹴りを放ち、なぎ払う。

扉を壊すようにして入ると、ちょうどだ。

マミさんが魔女を銃で殴っていた。

まずい！

止めなくては——！

駆け出そうとし、止める。

それより先にマフモフシリーズのハンターが飛び出していったからだ。

間一髪でマミさんを助けた。

前に出ようとした俺の腕を誰かがつかんだ。

「ずいぶん大きくなったな、小僧。」
それは、紛れもなく、

「どうした？」

ギザミXシリーズに双聖剣ギルドナイトを装備した、

俺をハンターという道に行くきっかけとなった、

ハンターだった。

「所で、お前は行かなくてもいい。」

「どうして、ですか？」

「他のハンターがやってくる。行くぞ。」

俺は連れられて、話された。

「お前は这个世界でハンターには干渉できない。」

「分かってます。」

そんなこと、実証済みだ。

ためしに前の世界で話しかけた瞬間、

俺は消えちまった。

「だが、俺はハンターに干渉できる。しかし、この世界の人物には干渉できない。」

「どういうことですか？」

「つまりだ。俺達はこの世界で起こる悲劇を知っているが、干渉できる事と、できない事がある。」

「しかも俺と君は、お互いに違う事に干渉できる。」

「俺は、悲劇を回避したいだけです。」

「しかし、それは無理だ。」

「何故・・・です・・・？」

「つまり、暁美ほむらは悲劇を無くそうとしているが、おそらくそれは無理だろう。」

「悲劇を回避するための条件というものがある。」

一つ、と指を立てる。

「まずは、一つ目。巴ミミの生存だが、これはもう回避された。」

「どうゆう事ですか？」

「雪永幸輝、あのマフモフのハンターが助けたのを君は見たはずだ。」

「ああ。見ましたよ。」

「二つ、美樹さやかおよび、佐倉杏子の生存。これはかなり難しい条件だ。」

「確かに。」

俺は何度か見てきた。

さやかが魔女化する所、杏子が死亡する所も。

「まずハッキリさせておこう。美樹さやかが魔法少女になった場合、魔女化するのはほぼ確実だ。」

「なんですって？」

「彼女の願いはこのすぐ後。干渉しても、もう間に合わないだろう。」

「じゃあどうすればいいんです？」

「イレギュラーの存在に頼るしかない。」

「イレギュラー？　どういうことだ？」

「つまり、湯雲茂、雪永幸輝、大村武人、榛名圭一。」

「さらにまだ運しだいでもくるかもしれないハンターもいる。」

「説明すれば、ここには俺——剣崎　真と笹草　健助しかいないはずなんだ。」

「なのに俺達はこうやって舞台袖に隠れている。今主役はイレギュラーのあの四人だ。」

「しかし、この二つさえクリアすれば後は楽なのでは？」

「甘いよ。笹草健助。」

「暁美ほむらは鹿目まどかの生存のみを最終目標としている。」

「仮に他の魔法少女と鹿目まどかを天秤にかけると、絶対に両方助けるという案は出ない。」

「ワルキプスの夜の撃退には、今いる全員が生存し俺達が居ても厳しいと思いますけど。」

「そっちではなく、魔法少女組全員が生きていなければ最高の終わりとはいえない。」

「じゃあ美樹さやかはどうするんです？間に合いませんよ。」

「何、分の悪い賭けだが、秘策がある。」

「とにかく、鹿目まどかの魔法少女を止める。当面はそれでいい。」

「それと、感づいてるかも知れないが――。」

「分かってます。」

「そうか、それならばお互い頑張ろう。」

「俺が表になるのは決戦の時だけですか。」

「そうだ。それでは、また会おう。」

第十四話 やっと、吹っ切れた（前書き）

次回はちよいとプロフィールでも乗せてみましょうか。

それと、雪永のキャラが壊れてるような・・・

第十四話 やっと、吹っ切れた

雪永side

「おい！雪永、その腕どうしたんだよ？」

学校に行くとは何回も同じ事を言われた。

全く、たかが腕を吊っているぐらいで大袈裟な。

帰り道。

「雪永さん、今日もマミさんは休み？」

「ああ。」

「マミさんも気にやんでんのかな・・・？」

ここ数日、マミは学校にも来ていない。

おそらく自分の油断が俺の怪我を招いてしまった事を気にしているのだろう。

「あたし、用事あるから。」

「ああ、じゃあな。さやか。」

「俺病院行かなきゃな・・・」
肩をすくめる。

「じゃ、また明日。」

近づいて湯雲に耳うちする。

（まどかのやつに気、配っといてくれ。）

「え？」

それだけ言って身を翻す。

病院に行き、腕を見せると

1週間は安静、という事だった。

まったく洒落にならん。魔女退治って言うのも。

しかし、意味が分からない・・・

キュウベえはそこまで魔法少女を増やそうとするんだ？

地球がどうなろうと知った事ではない、で済むはずなんだが・・・

まあ、いいか。余計な先入観は先を曇らせるだけだ。

それより、マミの方が問題だろう。

エレベーターのボタンを押して、乗り込む。

「あ・・・」

さやかが乗っていた。やはり、時間をずらすべきだったか・・・

「・・・・・・・・」

気まずい雰囲気になる。

「なあ、さやか。」

「・・・・・・・・」

暗い表情をしたさやかは沈黙を守った。

「あの時は変な風に言って悪かった。許してくれ。」

「なんで・・・」

「なんで、あたしの指が動くの・・・」
「は？何の事だ？」

「あたしじゃなくて、恭介が・・・」

また、恭介ってやつの事か・・・

「さやか、お前魔法少女になって恭介ってやつを助けたいのか？」

「・・・・・・・・」

やれやれ。

「魔法少女になるのなら、俺は薦めない。」

「でも、奇跡を起こせば恭介は・・・・。」

さやかがそこまで言った時、

パチン、と俺の頭に一つの推測が浮かんた。

あわやママが死ぬ所を見る所でも揺るがない、いや揺るいでいるが・

つまりアレか・・・

その事は、さやかにとってはおそらく大問題だろう。
気がつけば口が開いていた。

「お前、恭介って奴の事、好きなのか？」

言って直後に後悔する。

その後、沈黙が続く。

「すまん、変な事を聞いた。忘れてくれ。」

そこでチーンとなり、扉が開く。

俺は歩く。

ここの雰囲気には慣れそうもないが、
なんだろう。漠然とした息苦しさを感じる。
胃の中に氷を丸呑みした感じ・・・

また、やっちゃったか。

俺自身、駄目だというのは自負してる。

また、勘が鋭いというのもだ。

目的地について、上を見上げる。

高い所だな・・・ここは・・・。

一応住所も確認したが、ここであっているらしい。

「マミ。雪永だ。居るなら返事してくれ。」
ドアをノックしながら反応を待つ。

ガチャという音がすると、ドアが開いた。

巴マミ。数日前までは元気のあつたはずのその人物は、
今ではひっそりと影が落ちていた。

「ごめん・・・なさい・・・。」

中に入るとマミはぽつりとつぶやくように言った。

「だから、謝る事じゃない。」

「むしろそっちは喜んでいいはずなんだ。」

「なんで・・・雪永君はそうなったのに・・・」

「死んだらそこまでの所だったんだろ？」

「あのな、マミは無傷で他人が片腕一本怪我しただけだ。他人だぞ
他人。」

「俺も肝心要の命はあるんだ。これ以上の儲け物はないだろ？」
「それで俺も一週間もすればまた元通りだ。」

「でも・・・私は・・・っ」

「俺だって感謝しているよ。」

「どう・・・して・・・なのっ・・・」

「やっと、吹っ切れた。いろんな事から。」

あるのは薄く覚えているあの事。

俺が後輩を、商隊の人を死なせてしまったあの事。

俺が塞ぎ込んでしまう原因となった、あのモンスター。
轟竜ティガレックス。

ママになら、語ってもいい気がする。

俺はどっかりと腰を下ろし、壁にもたれる。

そして、俺は語りだす。

あの日の事を。

第十四話 やっと、吹っ切れた（後書き）

次回は回想です。

雪永の過去が明らかに！！

第十五話 回想（前書き）

今回は、モンハン世界の話です。

第十五話 回想

「商隊の護衛ですか？」

「そうじゃ。近々ここを通る商隊の護衛を引き受けてもらえんかの？」

「いいですよ。」

それが、すべての始まりだった。

俺は作ったばかりの骨刀【狼牙】を背負い、後輩のハンター（ガンナー）と向かった。

この時、俺はある程度は準備した。

光蟲と素材玉を調合し、閃光玉を5つ。

回復薬グレートを10個。

こんがり肉を6個。

砥石を10個。

索敵用に双眼鏡。

一応何かあった時のために、ホットドリンクも4つ。

投げナイフも一応支給品としてもらい、

マヒダケと調合して、麻痺投げナイフにしておいた。

依頼の日。

マフモフシリーズ（自分の中では相当な強化をしておいた。）に骨刀【狼牙】という装備で行った。

後輩の奴は、ギアノスシリーズにチェーンブリッツだった。

「こんにちは。」

「こんにちは。今回の護衛を引き受けさせていただきます。」

「ええ。よろしくお願いします。」

「ねえ。今回の人達は大丈夫なの？」

「大丈夫だから。ね？」

子供が不安そうにしていた。

「すみません……どうにもあの子は……」

「いえ……大丈夫です……では行きましょう。」

そんな時、奴が現れた。

轟竜ティガレックス。

奴は高台から飛び降りざまに、馬車の一つを噛み砕き、中の人を食い荒らしていた。

「先輩!!」

あいつはすぐさま撃ちだしたが、全弾鱗にはじかれた。

「逃げてください!!」

俺は叫びながら閃光玉を投げつける。

そのまま、ティガレックスはひるんだ。

でも、それが間違いだったのかも知れない。

腕を前に押し出しながら、氷の塊を飛ばしてきた。

俺は必死になってしゃがんだ。

俺の背を掠めるように、氷の塊は飛んでいき――

商隊の馬車に激突した。

急いで駆け寄った時には、

そのまま斜面へと滑り落ちていく馬車。

その中から投げ出された子供。

俺は手を伸ばした。あと3cm。それだけで俺はあの子を助けられ

なかった。

俺の手が空を切ると同時に、そのまま谷底へ落ちていく。

子の口が動く。

「ど
な
い
の
?」
た
す
け
て
く
れ

俺は顔を伏せた。ただ、そうするしかなかった。

そして、戻った時。

「うああああ！！！！やめ、ギアアアア！！
痛い痛い痛い！！
助け——！！！」

ちょうど後輩が、頭を食われている所だった。

「離せええええええええええ！！！！！」

無我夢中で突撃するが、その時既に後輩は頭を食いちぎられ雪の上を赤く染めていた。

「ガアアアアアアアアアア！！！！！！！」

咆哮が俺を吹き飛ばす。

俺は、そのまま意識を失っていった。

「起きた時は嫌だったよ。数日間、俺を責めたてる夢ばかり見てたからな。」

「で、マミを守れた時、俺分かったんだ。」

「今の俺なら、守れる力があるってさ。」

「だから、ママも元気出して欲しい。」

「まだまだ先輩ぶってなきゃいけないんだろ。」

「う、ん。」

「よし、じゃ明日から頑張ろう。」

そこまで言って、立ち上がろうとする。

そこで俺の視界は暗く、ママの声が遠く聞こえる。

立てない……？

やっぱり、ここ数日無理しすぎた、か？

「ゆ、雪永君！？」

後ろの壁に倒れるように寄りかかる。

大丈夫だ、そう言う事すら今の俺にはできなかった。

まぶたが重くなり、目を閉じてしまう。

ぷつん、と意識が途切れる。

第十五話 回想（後書き）

この小説で何か希望などがあれば感想で言っていただけばうれしいです。

第十六話 生きてる限り、次がある

「僕はッ——！！！！」

恭介の怒鳴り声が聞こえた。

俺はちょうど恭介の病室に向かう途中だった。

俺が扉の前まで行くと、さやかが泣きながら走っていった。

病室の扉を開け、中に入る。

そこには、血の飛び散った布団。

砕けた音楽プレーヤー。

そして、血のついた左手と泣く恭介の姿。

「…恭介。」

「うっうわああああ…」

「恭介！！」

俺は思わず怒鳴ってしまった。

「っ！！」

喉を引きつかせ、泣き止む。

「すまない。何があったか聞かせてもらえるか？」

予想通り、といった所か。

さやかがいとも通りに音楽を聞かせてきたが、

自分には嫌がらせとか何とか言っちゃったとか何とか。

…どうしようとも、これでさやかの魔法少女化が確定したな。

とりあえず俺は恭介に、

「おい、恭介。」

「ささ…草さん……」

「お前、何八つ当たりしてるんだよ。」

「え…」

「小さい頃から自分を支えてくれた奴だぞ？嫌がらせで音楽なんて聞かせるか？」

「だいたい、何だよ。お前。腕が動かないからお終いだ？」

「本気で言っているとしたらどうしようも無いな。」

「じゃあ、どうしろって言うんです！！」

「自分の腕が動かないなんて思っている時点で、お前の負けだ。」
そこまで言って、俺は気づいた。

「悪い、言いすぎた。」

「僕は…一体どうすれば…」

俺は気がつくにあの話をしていた。

人づてに聞いて、今も現役のハンターの話を。

「…昔な、俺なんて程遠いくらい強い、剣士が居た。」

「そいつはな、自分のしてる事が全て自分の生きが이었다。」

「ある日な、事故で握力を失ったんだよ。」

「え？」

「そいつは選択を迫られたらしい。引退するか、続けるか。」

「…その人は？」

「自分の全てだ。そうそう捨てられない。そう思ったが今までのようにはいかない。」

「そんな時にな、自分はどうすりゃいいって事に当然なった。」

「で、何を思ったかは知らないが猟師になっただけらしい。」

少し本当の話を捻じ曲げた気がするが、まあいいか…

「その話がどうしたんです？」

「つまりだ。」

こういう話は苦手だが、しょうがない。

「俺は一人者だが、恭介には支えてくれる奴が居るから他に頑張れ。って事。」

「片腕無くして笛吹いてる奴だって居るんだぜ？」

「そう…ですか…」

「人は生きてる限り、次がある。俺の言葉だ。」

「……僕もひどい事を言いました。ごめんなさい。」

「謝るなら、支えてくれた奴に謝って来い。」

そうですね、そうって俺と恭介は笑った。

第十六話 生きてる限り、次がある（後書き）

はい、うまく笹草の奴が言ってくれました。

これでいいです、よね？

第十七話 ああ、立派な役だったさ。(前書き)

はいアニメ四話入りました。

ところで湯雲達の人物紹介みたいなものって
つけたほうがいいですか？

第十七話 ああ、立派な役だったさ。

「湯雲、マミさんの調子は？」

「分からない：でも大丈夫さ、きつと。」

「居るな……」

「魔女？」

「地形が分かりにくいな…」

「待て、何m先だ？」

「ざつと200m。あっちだ。」
大村が倉庫の方を指差す。

つてオイ！！

なんだよあれ！？人が集まってる！？

何かあったら大惨事になるぞ……！

「くす！」

大村が走り出す。

くそ、間に合ってくれ…

早く走り過ぎて、息がづらい…
なら、これだ!!

強走薬を飲み、最大速度で倉庫に行く。

「くそ！扉が開かない!!」

「どいて!!」

装備してバストーンメイジに弾を装填し、
撃つ。

緩やかな放物線を描きながら着弾と同時に爆発する。

少し、扉がへこんだだけだった。

「ちっ！下がってろ!!」

大村がヴァルキリーブレイドを振りかぶり、溜め斬りの体勢に入る。

「うおおおおおおおらあああああ!!!!」
バキィ!

扉がひしゃげ、そのまま内側に倒れる。

所有者さん。

正直、すまない。

人が奥の扉に集まり、壊そうとしていた。

「おい！何やっているんだ！！」

大村が怒鳴ると、一斉にこっちを見る。

鉄パイプや角材を手に、襲い掛かってきた。

「武器は使わないで！！」

「素手で戦えって事？」

とか言いながら、襲い掛かってくる鉄パイプをはじき、
鳩尾に一撃をかます。

危っねえ！！

「上等だ！！」

大村は、五人ほどをまとめて掴むと
ほおり投げる。

…あいつ、なりは（ギリギリ）学生だよな？

榛名は…あらら、逃げ回ってる。

——って！音爆弾！？

榛名が手に持ったそれを投げるのと、
耳を塞ぐのはほぼ同時だった。

キイイーン!!という大音量。

もう、痛みすら感じるんだが…

「湯雲、あそこに誰か居るだろうから行って来い。」
辛そうな大村が言った。

「ああ。」

やはり扉は閉まっていた。

ユクモノバーストを取り出し、スイッチを押す。

先端から炎が噴出し、轟音とともにドアを吹き飛ばす。

竜撃砲でこじ開けたドアから中に入る。

「湯…雲……君？」

中にはまどかが居た。

ついでに羽の生えたテレビの魔女に小人の使い魔まで居た。

無言でリロードし、一度しよう。

ポーチの蓋をあけ鬼人薬を取り出し、飲み干す。

ユクモノバーストを構え、テレビに向けて突く。
刺さり次第、砲撃に繋げる。

更にそこからクイックリロード。

「であああああ!!!!」

左腕に力を込め、叩き付ける。

スイッチを押す。

フルバーストで吹き飛ばすと、

グリーンシールドを落として魔女は消えた。

「まどか。」

「私、……。」

後半の方が聞き取れなかったが、
まあ、いっか。

「何、言ってるんだよ。今回は手柄じゃねえか！」

「でも、私何も役に立ってないし……」

「あのな、ここに来るまでお前が何かしたんだろ？」

「じゃねえと俺も間に合わなかったからな。」

「私が、何かの役に立ったの……」

「ああ、立派な役だったさ。契約なんかしてなくてもな。」

「ま、何はともあれだ。今日は遅いし送って行くよ。」

ある鉄塔の上。

「せっかく人が来てやったのに！話が違うんじゃない？」

「悪いけど、ママが戦えなくなってもこの街にはハンターが居るからね。」

「どういことだよ？」

「うーん、僕にもよく分からないけど他の世界から来たらしいんだ。」

「なにそれ。」

「まあ、他にも一人さっき契約した魔法少女が居るからね。」

「超むかつく。」

そして何かを思いついた顔つきになる。

「でもさ、こんないい縄張りみすみすひょっこことハンターとかいう奴達にくれてやるのも癪じゃない。」

「どうするつもりだい？杏子。」

「決まってんじゃん。」

「要するに、ぶっ潰しやえばいいんでしょ？」

「そいつらを。」

第十七話 ああ、立派な役だったさ。(後書き)

さて、次回に続く。

って事で。

第十八話 俺は、どうすりゃいい…？ (前書き)

行きます。

第十八話 俺は、どうすりゃいい…？

「大村、次は？」

「南西700m。ぎりぎり見滝原のエリアだ。」

「あれ？ マミさんと雪永先輩は？」

ああ、あの二人か…。

何だか急に仲良くなったよな、あいつら。

「あいつらは別に動いてるよ。」

「じゃ、行こうか。」

マミさんが動けるようになって数日、俺達（と言っても、ほとんどは大村と榛名だが。）

は見滝原の魔女の狩猟に乗り出していた。

「いや待て…もう一体出てきやがった。」

「なら、俺が…」

「いや、俺に任せろ。」

大村が言い出した。

「そうか。任せる。」

「ああ。そっちは榛名と行ってほしい。」

そういつて大村は駆け出していった。

「まどか、帰ってもいいんだぞ？」

「ううん。いいの。わたしだって役に立ちたいし。」

「はぁ…はぁ……」

走り初めて物の5分でまどかはへたり込んでしまった。

…まったく、こいつは……

「榛名、先行っててくれ。」

「でもいいの？」

「ああ。逃がしたりしたら目も当てられないからな。」

「じゃ、先に行ってるね。」

雪永の奴からは連絡がない。
おそらくマミさんの所だろう。

ユクモノカサを外し、まどかに近寄る。

「大丈夫か？」

「ごめん。足引っ張っちゃって。」

「ああ、別に構わない。」

雪永から言われた事が気になった為、置いていこうとは思えなかった。

「で、どんな感じだよ。魔法少女になりたいっていうのは。」
正直言って、俺の意見は変わりつつあった。

マミさんが下手を打てば死ぬ状態だったが故に。

「怖いよ…。でも——」

バン！という音とともにユクモノカサを被り、俺はまどかを背負い、走り出す。

「ちょ、ちょっと——湯雲君!？」

何かがぶつかる音。

榛名が向かった方向だ!!

「さやか!？」

そこには魔法少女となったさやかと、バストンメイジを構えた榛名が居た。

——だけじゃない!!

赤い髪、赤い服を着て、槍を持った少女がいた。

しかも二人は、あちこち擦り傷や切り傷があった。

「榛名！待ってろ!!」

加勢するべく飛び込むが、何かに阻まれた。

「無駄だよ。」

ちっ!! 結界か何かか!!

「さやかちゃん!!」

「大丈夫……」

明らかに大丈夫ではない。

それに榛名の方は動きが変だ。

「やああああ!!」

さやかが切り込むが、

「はっ! トウシローごときがあたしに勝てるわけ無いだろ!!」

さやかの剣をはじき、槍を突き刺す。

すかさず榛名は弾を撃ちだして援護するが、鎖でつながれた槍は、榛名を壁に押し付ける。

「ハンター何ていうのも聞いてみたけどたいした事ないね!」

榛名は、本来ガンナーだ。

剣士ならまだしも、

間合いがないとまともに戦えない。

「痛っ!!」

バストンメイジを取り落としてしまう。

やばい……

俺は、どうすりゃいい…？

「ニャアア~~~~!!」

そこに聞こえてきたのは、

ガーグアに揺られる荷台の車輪の音。

そして、

「ニャニャニャ~~~~!!!!」

荷台から振り落とされる、

俺の相棒でもあり、

友でもある

オトモアイルー達の鳴き声だった。

第十八話 俺は、どうすりゃいい…？（後書き）

さて、次回はいよいよ

オトモアイルの参戦です。

第十九話 負ける道理などない（前書き）

戦闘シーンが書きづらい…

第十九話 負ける道理などない

正直、僕達は焦ったニヤ。

いきなりこちらの人が着てないような
防具を着ていて、それでいて

「お前達の主人は異世界に居る。」

なんていいだすんだからニヤ。

でも、それはどこか信じてもいい、
必死な感じがしたニヤ。

それに、僕はご主人に恩があるニヤ。

その為なら、どこにだって飛んで行く。
そう決めたニヤ。

ご主人が新米のオトモアイルーの装備として作ってくれた
ユクモノネコカサとユクモノネコドウギを羽織って、
自分のユクモノネコ太刀を肩にかけ、
皆と馬車に乗ったニヤ。

振り落とされて、まず見えたのはご主人と
ピンク髪の女の子。

そして自分の前にはハンターと騎士のような格好の女の子がいたニ
ヤ。

湯雲 side

「あ…あいつら…」

正直俺は驚いた。

二度と会えないと思っていた、アイルー達。

「ご主人…！」

その声ではっとする。

そうだ。今、槍使いからさやかと榛名を助けられるのは
結界内にいるアイルー達だけなのだ。

「全員聞け！さやかと榛名——そのハンターと青いのの援護に回ってくれ！」

「ニャー!!」

そういつて、二人を守るように配置につく。

「湯雲君…大丈夫なの？」

「問題ない。あいつらを信じろ。」

何せ、俺の最高の相棒達だ。負ける道理などない。

「へえ…うざいやつにはうざい仲間がいるもんだねえ？」

こいつ完全に侮ってやがる…痛い目見せてやりたいッ…!

「レウス!!」

レウスはアイアンネコソードを叩きつける。

その目には、もはや怒りとも取れる物が浮かんでいた。

「ニャアアア…!!」

別のアイルー、キンチャクにいたっては大タル爆弾を取り出して突っ込んでいた。

爆音とともに大爆発を起こした。

榛名はその隙にバストンメイジを回収し、

「さやか!!」

さやかへと発砲した。

…おそらく回復弾でも撃ち込んだのだろう。

「さやかちゃん!!」

まどかが叫ぶが大丈夫だ。

「ニャ!!」

シュガーがマカネコピックを投げた。

「こいつら!!」

赤い槍使いが苦虫をかんだような顔になっていった。

強引に薙ぎ払ってアイルー達から逃走するが、

「…こつから先は通さないニャ。」

ネコ武者の防具に武者ネコノ太刀。

「ジュウベエ!!」

俺のオトモの中でも最強である

ジュウベエがそこには立っていた。

「このくらい——」

…まったく、侮るからそうなるんだ。

バキン、という音と共に赤いやつの槍がへし折られていた。

奴は、あわてて逃げ出した。

「待ちやがれ!!」

俺は全力で追っていくが、

「湯雲!!」

大村がちょうど来た為、いったん引き下がる事にした。
それよりも、榛名とさやかが心配だった。

何しろ、鈍い音まで聞こえていた。
頭でも打ってたら大変だ。

事情を聞いた大村は、

「分かった。アイツは俺に任せとけ。」

そう言って、変わりに追跡していった。

…俺としては、なぜあいつがここでドンパチやり出したのかが気になる。

なので、二人に事情を聞くことにした。

第十九話 負ける道理などない（後書き）

ちよいと、アイルーの説明を。

レウス

毛並み 赤虎

防具 アロイシリーズ

武器 アイアンネコソード

攻撃方法 近接、ブーメラン

性格 勇敢

です。

ちなみにアイルーで出してほしい名前とかがあれば
感想へどうぞ！

第二十話 ただの、ハンターさ（前書き）

今回は

笹草ルートです

第二十話 ただの、ハンターさ

笹草 side

「急に直った…。」

いつものとおり、俺と恭介はしょーもない話をしていた。話してるうちに恭介の指が動き出していた。

まずい…

何度も見た光景。

これは、さやかが魔法少女になったという事だろう…。

「よかったじゃないか！！恭介！」

「はい。笹草さん…」

畜生……また、か。

「どうしたんですか？」

「いや、何でもない……」

「それより、幼馴染のやつをよんだほうがいいんじゃないか？」

「あ、そうですね。」

しばらくして、さやかの奴が来た。

「ごめん、さやか。」

「え？どうしたの？」

「さやかにはひどい事言っちゃったよね…。」

俺が言うのもなんだが、現金な奴だよ、全く。

「ま、いいよ。それよりさ、外にでない？」

さて、俺は退散するかな。

「あ、笹草さんっ！」

「俺がいると邪魔だろ？」

「そんなことないです！！」

で、俺も連れ立って屋上へ。

「屋上なんか何の用が？」

「皆！どうしてここに？」

「お前からは処分してくれといわれたがどうにもな。」「
バイオリンを恭介に渡した。」

その後は、恭介の演奏が屋上に響いた。

すばらしい、いい演奏だった。

それはまるでこれから起こるであろう事を忘れさせてくれる、

最高にいい、演奏だ。

さて、さやかにちょっと忠告してきますか。

「さやか、ちょっといいか？」

俺は恭介の隣にいるさやかを呼ぶ。

「なんですか？」

「ちょっと場所変えるか。」

そういつて病院の中庭に。

「さやか、お前魔法少女になったんだってな。」

「っ！！！」

さやかが明らかに驚きの姿勢を見せる。
当たり前だ。

さやかにとって俺の印象は、気のいい兄ちゃんぐらいだったしな。

「ど…どうしてその事を…？」

「何、まァ色々とな。」

「なんなんですか、あなたは！！」

さやかはもう臨戦態勢一歩手前だ。

やばいな、ここらで正体がある程度明かしておくか。

体を光が包み、レイアSシリーズを纏う。

「これが俺の正体、湯雲達と同じハンターさ。」

「ええ！？」

「それとこの事は他の人には言うな。湯雲達ハンターにもだ。」
「どうし——」

強引だが、仕方ない。

「とりあえず、忠告だけしておく。」

「な、何…？」

「これから君は困難にぶち当たるだろう。」

「絶望の淵に立たされ、魔——」

やべ、魔法少女の成れの果てが魔女なんて今、言えるわけがない。

「と、とにかく君が一人で立ち向かっていくには酷な事が多すぎる。」

「つまり、どうゆう事？」

いつの間にか変身したさやかが剣を向けてくる。
脅しのつもりだろうが、手が震えているぞ。

「榛名圭一。何かあった時は彼に相談してみるといい。君の良きパートナーとなってくれるだろう。」

ま、俺が思うに剣士には後衛の人間が必要だと踏んだだけなんだが。

「最後にひとつ。」

「鹿目まどかの事を守ってやってほしい。俺個人の願いだ。」
そういつて深く、頭を下げる。

顔を上げると、驚いたようにさやかは固まっていた。

「あんたは何者なの!？」

「笹草健助。ただのハンターだ。」

そういつてその場を立ち去る。

第二十話 ただの、ハンターさ（後書き）

はい、うまくいったのかは作者にもよく分かりません。

でも、なんとなく書いていたらこうなりました。

第二十一話 (前書き)

結構キャラが壊れますね。
なんとかせんと・・・

第二十一話

雪永side

「所で、ママが復帰した事は皆に伝わっているのか？」

「ええ、私がもう動ける事は皆知っていると思うわ…」
そこで俺の腕を見てきた。

「大丈夫、大丈夫。太刀は振れないけど、このくらいならな。」
フロストエッジ改を見せる。

…つと、ペイントの匂い？

「ママ、携帯使えるか？」

「ええ、持っているけど、どうして？」

「鹿目にかけてみて欲しい。」

「もしもし、鹿目さん？」

『ま、ママさん！大変なんです！さやかちゃんが！！』
「雪永には聞こえてない。」

「えっ!？」

おいおい、何かあったのか…

まあ、いいか。

マミと共に現場へ。

「榛名、さやか！しっかりしろ！」

そこにいたのは、軽症のさやかと明らかに重症の榛名だった。

「湯雲、何があった？」

「何かあってな。俺が来たときにはもう遅かった。」
そう言って俯く。

「さやか、何があったんだ。」

「赤い、魔法少女が…」

「何だと？」

赤い、魔法少女？

「そいつが私と榛名が使い魔を倒す所を邪魔したんだ。」
なるほど…

「で、突っかかっていたら吹っ飛ばされて…」

「榛名がッ…！」

おそらくさやかを守ろうとして楯になった、という事だろう。

「馬鹿野郎が…」

「あたしが馬鹿ですよ——」

「違えよ。」

「何で、逃げなかったんだ！」

「新米が勝てるわけないだろ！普通！」

思っているのとは別の言葉が飛び出していく。

「そのせいで榛名が、「雪永さん、」ッ！！」

「僕が…好き好んで…やったんですから…あまりさやかを…責めないでください…」

「僕は、パートナーを…助けたかったただけですから…」
そこまで言って気づく。

自分も、同じ事をした事を。

「すまなかった。さやか。俺は、」

「三度も、同じ事をしてしまった。」

「だが、心配、したんだ。」

「また、誰かが死んだりするんじゃないか、って。」

「俺は——どうしようもなく、それが怖かったんだ。分かってくれ。」

「あたしも、無茶な事言って、ごめん。」

「ママさんを助けようとした時、あたしは、迷っちゃった。」

「でも、」

「すまない!! 逃がしちゃった!!」
大村が戻ってきた。

「あ、ああ。それでどうだった？」
雰囲気ぶちこわしだな…大村。

「北見滝原市。そこまでいったんだが——逃げられた。」
「で、この件は俺に任せて欲しい。」

「とりあえず榛名の治療を——」

「ニヤニヤ〜!」

そこで、湯雲の後ろに

オトモアイルーがいた。

しかも複数が集まって榛名の治療をしていた。

「ご主人。榛名さんの治療が終わりましたのニャ。」

「ああ、皆。こいつは俺の相棒達だ。よろしく頼む。」

「儲かってるんですか？湯雲さん。」

起き上がりながら榛名が尋ねる。

基本アイルーをここまで雇ったりはしない。

「え、ええっと…」

「ま、まあいいじゃんか。それより、さやか落ち込むなよ!!」
強引に切り替える。

「う、ん。」

ま、俺もさやかとは和解…できたのか？

とにかく、大荒れだな、これは。

第二十一話 (後書き)

押絵だか書こうとして失敗したあ！！！！！

第二十二話 どうなってるんだよ…まったく(前書き)

始めますね。

第二十二話 どうなってるんだよ…まったく

湯雲 side

「ともかく、何があって突っかったんだ？」
俺はさやかに尋ねる。

「あいつが、」

「魔女に人が襲われてもいいって。言っただよ!!」

…なんて野郎だ。

さやかに聞いたところ、
奴はこういったらしい。

「4, 5人食って魔女になるまで待てっての。」

「そうすりゃグリーンフィードを落とすから。」

「あんた、卵産む前の鶏してどうするんだい？」

そこでさやかは反論するが、
食物連鎖がどうか、人を食って魔女になった奴を倒したほうがどうとか言われたらしい。

…待て、そいつはおかしい。

魔法少女はこの世界では（少し違うが）ハンターのような存在のはず。

俺らハンターだって何も好き勝手に狩りをしてるわけじゃない。

自然から必要な物を頂く。人を襲うモンスターを狩る。

街を守る。人を守り、助ける。

ハンターというのはそういった事をするだろう。（俺の中の価値観では。）

しかもそいつはそれが当たり前だと抜かした。

で、

そこで榛名がぶち切れちゃったらしい。

当たり前だ。俺だったら飛び掛かっていくと思う。

バキィィ！！と全力の右ストレートをそいつに向けて放った。

当然榛名には関心なしだった為顔面に一撃貰ってしまった。

その上さやかの話では、

「あの人を否定する気かッ！！！！そんな事、僕は絶対許さないッ！！」

「そんな事が当たり前じゃないッ！！当たり前であってたまるかッ

！！

平然とそんな事が言える君みたいな奴は、
人の皮被った、人でなしの、クズで、くそやろうだッ！！！！」

と榛名が絶叫し、
そこから戦闘となる。

「…さやか、あいつに何かあったのか？
正直俺にも予想外だ。」

「ううん、なんにも。」

榛名のやつを見ると、
大村が暴走した時のストッパーになっていたのを見た事があるからだ。

「…あ、あいつがキレるのも無理ねえか、な。」
いつの間にか隣にいた大村が呟く。
その表情はこころなしか、暗かった。

「どうゆう事だ？」

俺は正直言って疑問だった。

「こればかりは、あいつに聞いてくれ。俺が話せる事じゃない。」

隣にいた幸輝は俺に首を振った。

前みたくその件の介入は避けろ、という事？

考えていると大村が、

「ま、この件は俺が何とかするよ。」

俺、学校言っていないしな、と大村は言った。

「じゃ、また明日な。」

幸輝の奴とも別れて、一人、道を歩く。

そんな時。

「久しぶりじゃないか。」

「誰——てええええええええええ!?!」
ギザミシリーズ（細部が変わっている）にギルドナイトセイバー（
?）
を装備したハンターが立っていた。

うん、これは、あれだね。

「まあ、うん。あれだ。」

俺は疲れてるんだろう。
だから、こうしてありもしない者が見えるんだ。

「おいっ!! 何でもいいが、話を聞け!!」

こんな所に俺の恩人はいない。いるはずが無い。

「何ですか?」

「とにかくだ。これからが山場になってくる。」

よ、よし。目の前の恩人存在を信じるとして、
一体何の山場なんだ?

「美樹さやかには気をつけろ。」

そういつて、目の前の恩人は消えていった。

どうなってるんだよ…まったく。

第二十三話（前書き）

人物紹介ができたので後書きに載せておきますね。
あくまでも、初期設定ですが。

第二十三話

大村 side 17..43

「そろそろ、か。」

あの榛名が怪我した日から翌日。

俺は、北見滝原へと足を進めていた。
もちろん、赤い魔法少女の探索だ。

正直、此方で出方を待つ方法もあるのだが、
今回はこちらから出向く。

足を使うのは、捜査の基本だ。
昔の俺のやり方でいけば、なんとかなる。

防具のスキルに自動マーキングがある。（ちなみに今は防具はつけてない。）

剥ぎ取りのスキルはここでは役に立たないだろう。
こいつで魔女を見つけ次第、そいつが現れるのを待つ。

で、魔女の討伐後に拘束、あるいは戦闘不能する。

最悪、逃走用の道具もあるが、相手は魔法少女。
油断はいけない。

過信は油断を生み、油断は怪我を生む。

「にしても、暇だ…」

はあく、と息を吐く。

全盛期の俺には感覚が戻れないらしい。
数年前はよかったな…

って…何考えてるんだか。

まだ俺は22だ。（こつちじゃ見た目は16くれーだけど。）

「はあく…」

「そこの兄ちゃん、どうしたんだい？」
そういつて、赤い髪の毛——ッ！！

や、やばい。

例の魔法少女だ。（なぜかという昨日の追跡時に電灯の明かりで顔が見えていたので分かる。）

「ん？どうしたんだい。化け物に会ったような顔して。」
どうやら、俺の顔は割れてないらしい。

「い、いや、何でもないんだ。」
何とかして切り抜けないとな…

そんな時だった。
悲鳴が。

そちらへ顔を向けると、

俺の目には、橋から落ちそうなまだ5歳ぐらいの子が。
「ッ！！」

頭で考える前に体が動いた。
俺を動かしたのは現役時代の癖と、先輩との約束だ。

間に合え！！

「ちょっと、兄ちゃん！？」

赤髪の少女が何か言っているが、気にできない。

橋の欄干から、子が落ちていく。

俺はそれに続くように飛び込む。

「あ——」
見てしまった。

ちょうど俺と子の落ちる落下点には、
大きな岩がある事を。

「兄ちゃんッ——！！！」
後ろで声が聞こえる。

致し方ない！

今回の目標は崩れるが、人命救助が優先だ！

光が包み、ハンターシリーズを身につける。

「ッう！！」

子を抱えて何とか着地を試みる。

しかし、不安定な状態で掴んだ為に
体勢が崩れたままだった。

「わああああ——ッ！！！」

ドン、と叩き付けられるようにまず岩に全身が衝撃を受ける。

「くう…かはあ！！」

次にバシヤァン、と水に全身が浸かる。

「ゲッホ！ゲッホ！！はあ、はあ、」
ひとまず息を落ち着けて、岸へと。

俺は防具付けたまま狩猟する
地方の事を思い出していた。

モガの村に行ってよかった。

などと、正直どうでもいい事を考えていた。

「兄ちゃん！だいじよ、ッ！！」

岸に上がった俺を見て、
少女は息を呑んだ。

目の前にいたのは昨日見かけたハンターだからだな。うん。

他の人に見られる前に防具をはずして、
子を近くにいた大人へと渡した。

「ありがとうございます。貴方がいなければどうなっていた事か…」

「どういたしまして。じゃ、俺はこれで。」
そういつて一目散に逃げ出す。

「待てよ、兄ちゃん。」

裏路地に入ったところで、後ろから声がかかる。

とっさに榛名から拝借して腰につけた投げナイフに手を掛ける。

「なんだい。あんな格好して。」

おそらく相手はこっちがハンターだと分かっているだろう。

「ただの人助けだが？」

「なんで、こんな所にいるんだよッ!!」

「居ちゃ悪いか？」

「悪いね。」

即答。

「そうか。なら出て行こう。」

「待てって言ってるんだよ。」

言葉に憎悪がこもり始めた。

「なら、なんでこっちのエリアに入ってきた？」

「答える必要はない。」

ゆっくりと槍を構える。

臨戦態勢って事か…

「なら、とっ捕まえて聞いてやる！」

言った瞬間、突っ込んできた。

「甘い！」

大剣で受け止め、大剣ごと蹴りを入れる。

大剣は少女を巻き込み、下敷きに使っていた。

「この程度でッ！！」

大剣をふきとばしながら起き上がった。

「…やるじゃないか。」

あの手は現役時代の拘束技なんだが…

ああまでして簡単にやぶられると、なんだかなあ…

硬化薬グレートを取り出し、飲む。

素手であれば、何とかなる。

「はあ！！」

気合とともに槍が突き出される。

俺は柄の部分を掴みとり、奪い取る。

「ひッ!!」

「だありゃ!!!!」

槍ごと壁に放り投げ、すばやくネットで拘束する。

「さて、聞こうか。なんでここにきてさやかか奴に危害を加えたのかを。」

投げナイフを突きつけながら、俺は尋ねた。

あれ? 何か俺、外道になってる気がする……。

第二十三話（後書き）

湯雲 茂

基本的には、安全第一の戦い方をする。

ユクモノ武器なら何でも扱えるため、

様々な武器を使い変幻自在の戦いを見せる。

プライベートでは結構だらしない。

いまいち危機感に鈍い。

武器は基本安全志向の為、ガンズ、ランスなどの重量型だが
本人は太刀やスラッシュアックスの使い方が上。

装備

ユクモノシリーズ

ユクモノ系の武器ならなんでも扱える。

第二十四話 ハツタリをかましてみるか（前書き）

今回は大村ではなく、
雪永視点です。

第二十四話 ハツタリをかましてみるか

雪永 Side 19..28

俺は、暁美ほむらと話していた。

「で、わざわざマミを気絶させてまで俺を誘い出した訳を聞こうか。」

「あなたは、一体何者なの？」

「ハンターだ。」

俺は無表情で答え、相手の顔色を疑った。

「で、今度はこっちから聞かせてもらう。お前の目的は何だ？なぜ鹿目を執拗に追ってくる？」

「……………」

沈黙。

実は湯雲や鹿目と帰りに別れても後を付けてみれば、暁美の奴がいたじゃないか。

「何だか、事あるたびに鹿目に忠告してるのはなぜだ？」

「こっちが聞く限りじゃ、肝心の部分は明かさずに忠告しても鹿目は「はい、そうですね。」とでも言うか？」

「アンタには話してない事が多すぎる。」

「そっちが話せば協力するがあまりにもアンタの話は下手だ。」

「ッ……！」

少しだが、動揺し始めたな…

ハツタリをかましてみるか。

「何か、隠してるだろ。とんでもない秘密でも。俺でも分かる。六割が嘘だ。ちなみに四割は勘。」

その後、いつの間にか暁美ほむらは消えていた。

……まいったな…。

正直、俺には暁美ほむらが何かをしようとしているのは分かる。しかし、それは一体何だ？そこが分からない。

とにかく情報が少ない。

だが一つだけはっきりしている事がある。

これは俺の勘だが、暁美ほむらは何か重要なキーを握ってる。

暁美ほむらをそこまでして動かそうとするもの――

それは、何だ？

俺の考え一つでは、まず鹿目まどかが大きく関係している事だろう。そうでなければそこまでストーリーカー気味について来たりしない。

そして、二つ目の疑問。

それは、俺達の存在だ。

俺達は本来ここにいるはずの無い人間。なぜ、なんの目的でここにいる？

しかも、俺『雪永幸輝』は『湯雲 茂』と面識がある。

で、湯雲から始まったとすれば、オトモアイルーまで介入してきた。

俺、その次は『大村武人』と『榛名圭一』。で大村と榛名は同じ狩り仲間。

湯雲の相棒がアイルー達とすれば、

俺の相棒は誰になる？

魔法少女であるマミは除くとして――

まさか、な。

その時、俺の頭に一人のランス使いが思い浮かんだ。

うーむ……

この件は、保留だ。

さて、もう一つ。

魔法少女の存在だ。

ソウルジェムとグリーンシード。さらに魔女。

マミから聞いたところ、グリーンシードでソウルジェムを浄化するらしい。

……やっぱり、おかしい所が多すぎる。

なんで、魔女の卵であるグリーンシードでソウルジェムの浄化ができるんだ？

大体、マミが浄化する所を見たが、もはやアレは、浄化というより移し変えに近い。

同じ容器に移す。

その行為そっくりだ。

ん？待てよ——

魔法少女、魔女。

魔法少女が成長すればなんて呼ばれるのだろうか？

60のバアちゃんになったら？

果たして、それは魔法少女と呼ぶのか？

もはやそれは魔女だ。

「そういえば、魔法少女を縮めると、魔女だよ……な……？」
待て、大体なんで呼びかたが魔女なんだ？

それじゃあ、まるで女だと確定しているようじゃないか？

—— ツツ！！！！！！！！

何で、女だと分かってるんだ！？

自分の言った可能性に気づく。

もし、もしだ、

俺の今考えた仮定がそのままそっくりそのまま大当たりだとすれば
……………

魔法少女のなれのはての正体が、魔女？

マミの奴が魔女？

……そんなはずある物か。
俺はその考えを否定する。

あの人あたりのいい笑顔を浮かべるマミが魔女？
……そんな訳ないだろ。

ハハハ、疲れてるんだ、俺は。
だからそんな突拍子もない解答をはじき出してしまったんだ。

どんだけ疲れてるんだ、俺は。

今日は、早く寝よう。

第二十四話 ハツタリをかましてみるか（後書き）

人物紹介です。

雪永 幸輝

冷静な思考の持ち主だが、仲間を救う為には身を省みない性格。パーティーの中ではいち早く敵を倒す事を考えている。

先陣を大体の割合で切っており、切り込み役とも言われる。

勘が鋭く、物事を見通す事が多い。

しかし、それを伝えようとしても裏目に出る割合のほうが大きい上、自分の考えを伝えるのが下手で周りによく衝突する。

最近ではバマミと友人となり、少し丸くなった。

装備

マフモフシリーズ

骨刀【狼牙】フロストエッジ改

第二十五話 もう、いいよな（前書き）

今回は短めです

第二十五話 もう、いいよな

大村 side 18..54

「入りなよ。」

あれから俺は杏子（名前を覚えてもらった。）を解放し（俺が外道に思えてきた為）

杏子に連れられた俺は、古ぼけた教会にいた。

「ここは？」

「食うかい？」

リンゴが投げられる。

それを受け取り、

「ちよつとばかり長い話になる。」
そういつて話し始めた。

「ここはね、親父の教会なんだ。」

「なるほど。」

それならば、先ほど扉を蹴破った意味も分かる。

「親父はさ、やさしすぎる人でさ、ある時教義に無い事まで説教しはじめたんだ。」

「信者の足はぱったりでさ、教会からも破門されちゃってさ……」
確かに、正しかったのかもしれない。

俺にはそれを確かめるすべはないが、
きっと皆の事を何より考えていたのだろう。

俺には、その事が他人事には聞こえなかった。

「納得できなかったよ。親父はただ、人と違う事を言っただけだ。」

「悔しかった、許せなかった、私にはあの人を分かつとしないなんて。」

「……それで、契約した訳か。」

「ああ。皆が親父の話を真面目に聞いてくれますように、って。」

聞くのも痛々しかった。

いつかの自分と被る気がして。

「で、あたしと親父で表と裏でこの世界を救うんだって。」

「何でこうなっているんだ？」

何も無ければ、それでパッピーエンドなんだが。

ぐらりと見回すと、手入れどころか、人が住んでいるのかも怪しい所だ。

「バレちゃったのさ……」

「魔法少女、って事がか？」

杏子はああ、と頷き続けた。

「それで、あたしを魔女扱いして、」

「最後は家族を道連れに無理心中さ。」

「あたし一人を残してさ。」

酷い話だ。

誰かが、誰かを救おうとして、誰も幸せにはならない。

「あたしの身勝手な願いが、家族を

「そのときに、誓ったんだ。」

「自分の為だけにしか魔法を使わない。そう誓ったんだ。」

「あんたの気持ちは分かるよ……」

つぶやいた瞬間、キッ！と睨み付け、

「うるさい！！アンタなんかにあたしの何が分かるって言うのさ！
」

「俺はな、親に捨てられたんだ。」

杏子が息を呑むのが分かった。

「そっちの話も聞いたんだ。こっちにも話させろよ。」

「ある時、俺は捨てられていたんだ。」

「村で育てられて、それでも、まだ小さい村だった——」
俺も、もう言っちゃってもいい、よな——

ただの、恥さらしにしか…ならないけど。

第二十五話 もう、いいよな（後書き）

人物紹介

榛名 圭一

仲間思いのガンナー。いざとなれば単身敵と渡り合う事も躊躇しない。

仲間を傷つける事を嫌い、

自分の事は二の次になることもしばしば。

まめな性格でしっかり者。

射撃能力は随一だが、格闘戦は苦手。

感情に駆られて暴走するときもあり、

そのたびに自己険悪に陥る事もしばしば。

基本的に接近戦はできないので、投げナイフは常に持っている。

視力は高い。しかし代わりに身体能力は低く、

ヘビーボウガンを構えるのがやっとな。

装備

イーオスシリーズ

バストンメイジ

第二十六話 笑っちゃうだろ、そんなこと。

8年前――。

俺は人の役に立つ、それも俺がやりたい事をしたかった。

そんでハンター稼業についたわけだ。

人の為に俺は密林を、森丘を、火山を、雪山を、砂漠を駆けずり回り、

日々モンスターを狩る毎日だった。

そんな時だ。

俺にギルドナイトになって欲しいという事が伝わったのだ。

もちろん、俺は悩んだ。

十代のギルドナイトも珍しい上、村を離れてドンドルマのような大きな街に住む事になるからだ。

だけど、人の役にたちたい――その一心でギルドナイトになったんだ。

しばらくは、よかったさ。

先輩は俺に良くしてくれたし、嫌がらせ何かも見つけては俺に知れないように怒っていたからだ。

仕事もモンスターの生態調査や、分布など、何より興味を惹いたのが古龍だ。

何十年も生き、力強さに、俺は何よりも惹かれたね。

……けどな、そんな日々は長くは続かない。

ある時、俺はギルドナイトの仕事である密猟者、あるいは法を犯したハンターを追っていた。

それで、血を吐くような思いをしつつ、やっと尻尾をつかんだのさ。

「ギルドナイトだ!! その両名は手を組んでうつ伏せになれ!!」

「……これは、これは、どういう事ですか？」

「いえ、何でも無い事でしよう。」

なんと、その密猟者達といたのは、俺の上司のお偉いさん方だった。

「……君は、何て事をしてくれたんだ………」

「おかげで、私は罪人じゃないか。」

「罪を犯した貴方にも責任がありますッ！！とにかく、連行しますよ！！！」

「やれやれ、君はどうやら私が何なのか——」

「分かってますよ。貴方は俺などのような者の上に立つ人です。」

「しかし、法を犯した時点で、貴方は俺の上司ではなく、」

「ただの、罪人です！！！」

「君は頭が固い。私がやっている事は——」

「そんな事はただの詭弁です。」

「ほう、それなら――」

「後は任せますよ。」

了解しました。との声とともに、俺は拘束され、地面に縛り付けられた。

「なッ!!?」

見ると、それは俺と同じギルドナイトだった。

「やはり、こういう時に備えておく事が一番ですね。」

「何故……?」

「何故、ですかねえ?」

直後、視界が暗転する。

殴りつけられている――そう気づいた時には、体はいうことを聞かずに倒れこんだ。

「それでは、この者の処分は?」

「そうですねえ……じゃあ、この悪事の真犯人という事に。」
そうすれば、うまくいけば死罪にもなりますから、と言われているのが聞こえた。

俺が覚えているのはそこまでだ。

「それで、どうなったんだ？」
杏子が尋ねてくる。

「先輩がさ、がんばってくれてな。」
あの後、俺はギルドナイトを強制的に辞めさせられた。
それだけで済んだ。
死罪などもなくなった。

「だけど、先輩は、俺に最後まで謝っていたよ。」
ごめん。ごめんな。と、泣きながら俺に土下座していた。

「それからはさ、大変だよ。」

「え？」

「密猟事件の犯人扱いだからさ、しかも重大な。」

「村には入れてくれなくなるは、人に避けられるは。」
それで、俺は防具も、武器もドンドルマの俺の居た部屋に置いてき

た。

「でさ、ある時思ったんだ。」

「記憶喪失の振りをすればいい、ってさ。」

「大変だったさ。川に飛び降りて記憶喪失の振りをするのは。毎日、毎日何も知らない振りをした。」

防具も慣れた物から新米のハンターシリーズに変えて。

「次にさ、違う性格を装っている事にしたんだ。」

今までのような、皆の幸せを願う優しい青年ではなく、

熱血で無茶をやらかす狩人の仮面を被る事にした。

ジャンボ村に帰っても、皆は変わらずに接してくれた。

……それが、逆に辛かった。

自分以外の全てが変わらずに、

自分一人が、何やってるんだろう。

……そう、思っちゃったのさ。

でも、演技してるうちにだんだん

それが本当の自分なんだ、そう思ったんだ。

だけど、辛かった。

笑っちゃもうだろ、そんなこと。偽者の仮面被ったやつが本物で、

今までの俺は偽者なんだからさ。

まったく、こんなことなら捨ててしまえばよかったんだ。

だけど、捨てられなかった。捨て切れなかった。

何より、俺のハンターを続ける為の原動力だったしな。

第二十六話 笑っちゃうだろ、そんなこと。(後書き)

人物紹介です。

大村 武人

熱血大剣使い。どんな状況下でも粘り強く諦めない。

その為、どんな無謀な状況でも引っくり返す、事もある。

数多くの経験を積んでいるが本人の性格（といっても演技だが）と経歴の影響か、

一緒に組もうとするハンターは少ない。

情に厚く、面倒事や他人事でも全力で突っ走って解決する事もあるが、

その場合大抵榛名のフォローが入る。

榛名とは同じジャンボ村出身。

装備

ヴァルキリーブレイド

ハンターシリーズ

第二十七話　　なんだか、こうゆうのもいいな

大村 side

「……………」

「なんてな、暗い話はあまり好きじゃないんだ。」

「どうして、」

「どうしてそんな風に笑ってられるのさ!!」

「今が在るからに決まってるだろ。」

「あの後な、その先輩から手紙が何通も来た。」
「なんて?」

「助けてやれずに、すまなかった。」

「そう書いてあったよ。」

「だけど、俺は先輩に感謝してるよ。」

「あの時は死んでもおかしくないからな。」

「そういう杏子こそ、泣きたいなら泣けばいいじゃないか。」

「ッ！」

「何時までも意地張ってんじゃないねえ。ま、最も今泣かないほうがいいぞ？」

「どういう意味だよ。」

正直、あれで隠れてるとは思えんがな。

「さやか！居るんだろ！！」

さっきからちらちら見えていたが、

「ばれてたか……」

さやかだ。

「榛名の奴も、いるんだろ？」

「…武人……僕は……」

「あゝ、何湿っぽい事言っやがる！」

「ごめん。あんたの事、勘違いしてた。」

「あたしは……」

「あー！もういいだろ！それより湯雲のどこ、行こうか！」
俺は手をパンパンと叩いてそういった。

「何で？」

前の俺に戻る必要なんてない。

「あいつにまあ、色々頼んだからだ!!」
（主に酒とか。）

今ここに居る俺、

それが大村武人なのだから。

やはり、俺はいつもの俺のままでいよう。

そう、決めた。

「湯雲く入るぞく！」

返事を待たずに、家へ入る。

「いらっしやいませなのニャー!!!」

板前スーツ姿のアイルーが出迎える。

「おう、よく来たな。ま、上がってくれ。」

「で、なんであたしまで来る羽目になるんだ？」

俺の後ろに隠れた杏子が尋ねる。

まあ気持ちちは分かるが……

先日ボコされた相手が、笑顔で料理振舞ってくれる事はほばないしな。

「ハハハ……アイルーが料理を作りすぎちまってな……」

そして、部屋に入ると

「うわ……」

「こんなにあたしも食べられないぞ……」

テーブルに溢れんばかりの料理の数々。

「ゆ、湯雲さん……これはさすがに……」

「だ、だよな……」

「ま、まどかとマミさんも呼んだほうがいいんじゃないですか？」

「後幸輝の奴もだな……。」

「ご主人！！まだまだ来るのですかニヤ？」

「それならば、ボク達はまだまだがんばりますニヤ！！！！」
キッチンからは、数匹のアイルーの声。

ま、まさかな……。

「ほ、ほらまあ大村！これ採酒！！あとハコビールも！！」
強引に酒を薦めて来る湯雲。

「ああ、貰うよ。」

ジョッキについて、ぐびぐびと採酒を飲む。

……う、うまい……！

横では、さやかと杏子がアイルーに尋ねられていた。

「お二方、何か飲みますかニャ？」

「じゃあこのユクモラムネというやつで……」

「あたしはボコボコーラ？とかいうのを。」

などとやり取りが交わされていた。

しばらくして、

ピンポン、という音になると、

「はいー！どうぞ！」

「お邪魔します。湯雲君。」

「こんにちは。湯雲。」

まどかとキュウベえだった。

「まどかか。何か飲むか？それとマミさんと幸輝は？」

湯雲ー！上がるぞー！という声とともに、
マミさんと雪永が部屋へと。

それぞれが、ドリンクをアイルーに伝えた。

ちなみに、まどかが堅米茶【雁木】。雪永は溪流天然水。マミさんはセレブリティー。

榛名の奴は、硬茶【矢倉】。

「いやー今日はなんだかあれですねえ……」
集まった面々を眺める。

もはや、今の状況はちょっとしたパーティーだ。

アイルーが忙しく、料理を運ぶ傍らに――

まどかは既にテンションの意味で取り残されているし、マミさんや幸輝は笑っていた。

榛名はさやかに悪乗りされて困り果てた顔を浮かべいた。
湯雲は、はにかんだ表情になっていたが。

「なんだか……こういうのもいいもんだな。」
杏子がつぶやく。

「ハハ、そうだな。」
ハコビールを飲みつつ俺は同意する。

仲間が居る。

それは、何よりの幸福だ。

そんな事をふと思った夜だった。

第二十七話　　なんだか、こうゆうのもいいな（後書き）

人物紹介です。

笹草　健助

元からいる人物に干渉し、決まった終わりを覆そうとする存在。

いわばイレギュラーであり、全員が笑っていられる終わりを目指す。

剣崎と共に湯雲の正体を知っている。

本人にもいくつかの秘密があり、

それを知る者はもう居ない。

装備

炎剣リオレウス

レイアSシリーズ

第二十八話　もう、この人、教官じゃないか（前書き）

はい、今回は雪永の意外なスキルが明らかになります。

……この設定、大丈夫か……？

第二十八話 もう、この人、教官じゃないか

榛名 side

「さやか、僕に相談って何なのさ？」

僕は今、さやかからある相談を受けていた。

強くなるにはどうしたらいいか、という事だった。

「あたし、あの時ネコよりも役に立たなかった……」
当たり前だ。

「あれは、ただのネコじゃなくてオトモアイルーだよ？ しかも動きを見るに、相当な訓練を積んでる。」

「そんなオトモアイルーと新米のさやかじゃ張り合おうとしても無理だよ。でもなんで僕に相談するのさ？」
最もな疑問だった。

どちらかというとこれはガンナーである僕より、他の人が適任のはずなのに。

「……………」

沈黙、か。

「まあ、でもやっぱり訓練と経験だと思うよ。」

「やっぱり才能のある人は……」

「才能が、どうしたのさ？」

才能、なんて言葉は二番目に嫌いだ。
自分のやってる事が否定されそうで。

「魔法少女にも、才能によって強かったりするらしい。」

「なら、そこは努力でカバーすればいい。」
あれ？なんか、大村に感化されてないか？僕。

実際、ハンターやっていて最初はまともに弾が命中する事すら無かった。

とにかく、練習だ。

精密射撃のスキルのおかげもあるけど、
練習だ。

「なら、こんど湯雲さんか雪永さんにでも訓練してもらえばいいんじゃない？」

あの二人なら、適任だろう。

「う、ん。今度会ったら言ってみる。」

翌日――

「湯雲さん」

「榛名、どうした？」

皆と一緒に居た湯雲さんに声を掛ける。

「ちよつとさやかに剣の練習を頼みたいんですが……」

「うん……それなら、アイルー達とやってみたらどうだ？」

「ちよつと、湯雲！」

「どうしたんだ？ さやか。」

「あたしはネコ以下だって言うの！？」

「あ……う、まあぶっちゃけると、同等だ。ただな、」

「生兵法以下なんだよ。今のさやかの剣筋はさ。」

「なん……」

「そんな言い方ってないよ……」

「う…まあ剣っていうのはさ、力任せに振りゃいい、なんて物じゃないんだ。」

「なんだ、」

「さやか、試しに俺と模擬戦してみてくれ。先に一撃当てたほうの勝ち。」

ユクモノシリーズを纏った湯雲さんが、拳を握る。

「なめるんじゃないわよ!!」

さやかが剣を構える。

2秒後――。

「負けた……?」

さやかの剣を避け、一撃。

それだけだった。

「大振りは厳禁。」

「さやかの剣は片手剣っぽいし幸輝に聞いたほうがいいと思うぞ?」

「どうしてです?」

「幸輝は太刀と片手剣、両方の使いだからだ。」

初耳だ。

「……分かった、そうする。」

さやかも、一応その意見を聞いたらしい。

「悪いな、あまり力になれなくて。」

「ううん、いいの。」

「そうか。」

「幸輝か？ ちょっと頼みたい事があってだな…来てくれ」
電話を使って、雪永さんと呼んでいた。

「よし、分かった。」

話を聞いた雪永さんが剣の特訓に付き合ってくれた。

最近、マミさんと一緒に居る光景が最近学校でも（三年の教室を通りかかったときに聞こえた）

ちょっとした話題になっていた。

今見ると、不思議な光景だ。

数日前までは、二人とも犬猿の仲だったのに。

「ところで、何で雪永の武器は……」
フロストエッジ改の事だろう。

「ああ、これは氷属性といってな……」
なにやら、属性に対しての講義を始めてしまった。

「——というわけだ。でだな、さやかの剣はまだ短いほうだが、
太刀ぐらいにもなると——」

ノンストップで語り続けていた。

「——そのほうが相手に与えるダメージが跳ね上がるというわけ
だ。ま、この辺は体に身につくからな。」

「……幸輝、お前、教官にでもなった方がいいんじゃないか？」
湯雲さんが口を挟む。

「自分でいうのもアレだが、現場向きなんだ。俺は。」
「でだ、さすがに慣れるまでは複数で動く事を薦める。特に後衛の
人とな。」

「幸輝、でもそれって……」
「俺は、マミか榛名の奴と組むといいと思う。お前のボウガンなら
回復弾、鬼人弾と硬化弾が使える。」

「つまり、フォロー役としてはいいと？」

「そういう事だ。」

「ついでに言うとな、常に大振りで振るのは止めろ。なぜかと言うとな」――

「――て言うわけだ。」
長い。

「でだ、盾があればそこで中断し――」

「――そうすれば少しはマシになる。」

「ま、言ってくれば盾ぐらいは貸すがな。」
フロストエッジの盾を取り出し、呟く。

ひんやりと、冷たい空気が流れていく。

ふと、思った。

この人、教官じゃないか。と。

第二十八話 もう、この人、教官じゃないか（後書き）

アイルー紹介。

ジュウベエ

性格 ねばり上手

標的傾向 バランス

毛並み 茶アイルー

攻撃方法 近接のみ

装備

武者ネコノ太刀

武者ネコシリーズ

第二十九話 (前書き)

ちよつと論理がむちゃくちゃ、
くちゃくちゃかも知れませんが
どうぞ。

第二十九話

湯雲 side

あれから、数日後。

俺達は毎晩狩りに出ているようなものだ。

……正直疲れる。

そんな時だった。

歩道橋を歩いているとさやかが転び、ソウルジェムが落ちてしまった。

そのまま、トラックの荷台へ。

「あ——」

その後、5秒、いやもう少し長かったかもしれないが、

突然、さやかが倒れてしまった。

「おい！？さやか！！」

返事にも応答しない。

首すじに手を当てると——

「脈がない……！！」

「嘘だろ、オイ！？」

どうなってるんだ…一体？

劍崎 side

「くっ！！どうやらさやかがソウルジェムを落としたらしい！！」
不味い、どうする——？

「笹草、どうするんだ？」

「こうするだけだ！！」
投げナイフをトラック目掛けて投げつける。

ロープを結んだナイフを投げ、トラックに引っ掛ける。

「くっ……!!」

足元がザザザ、と言う音を立てながら引っ張られる。

「ううおおおおおおおお!!」

ガノトトスの一本釣りの手法でトラックを止める。

すかさず飛び乗り、ソウルジェムを回収する。

「こらー!!」

「やべ、剣崎!!」

そういうとけむり玉を4、5個ばら撒き、逃げる。
笹草と別れ、しばらく走り、例の歩道橋へ向かう。」

「動かないで。」
後ろから声が。

「こいつを渡してほしいんだろ？ 暁美ほむら。」

「——ッ！なぜ……？」

「今は言えないが、それより早くこれを渡して来い。」

さて、退散するかな。

そう思ったときには、すでにほむらは目の前にいた。

「はや!!」

「それより、何で貴方は私の名前を知っているの？」

その疑問には答えられる。

だが、今、ここで明かしてもいいのか？

「一応聞くが、誰にも話さないという制約つきなら、話してやってもいい。」

「……分かったわ。」

「というか、最初に尋ねるが、本当に俺の事は知らないんだな？」

「はじめの日からそんな名前は聞いた事がない。」

「そうか、まあ原因はお前にあるんだがな。」

「どうゆう事？」

「この世界をループさせ、何回も繰り返しては失敗していた。」

「でだ、あるとき何かの弾みで俺はこっちに来た。」

「ちなみにそっちは何回もループをしたはず。」

「だがな、俺はこの会話を今回も含めて2、3回しかしてないんだよ。」

「どうも、俺が試した事によると、ループしたときにあんたの記憶からは俺達ハンターという文字が消えてるんだ。」

「つまり？」

「暁美ほむら。アンタは毎回分の記憶を持ってる。だが、俺達に関するものは何一つ覚えてない。」

「それと話の関係は？それに——」

「何でこんな事をするのかが分からないわ。」

「ほむら、お前と誓ったから。」

——絶対にこんな終わりを覆す。

そう、最初のループで誓った。

「ついでに言えば、俺が幾つかの世界を体験していない事も知った。」

「ちょうど、バマミが暴走した時に俺は居なかったが別のハンターがいたんだ。」

笹草健助の事だ。

彼は俺が居なかった世界に行き、そこで幾つかの情報を得た。

「俺は、それよりも多くの世界を歩いて幾つかの成功を収めた——ただな、」

成功、とはもちろん魔女を魔法少女に戻す事だ。

「リセットされたのさ。」

「俺は一度だけ、鹿目まどかを魔女から戻した事がある。」

「もちろん、ほむらが時間干渉でその世界を去った後だが。」

「ッ！！！」

驚く。それはそうだろう。

自分が諦めた事が他人にできてしまったのだから。

「その後、俺も死んでその世界から移動だ。」

「それで、これが今回だ。」

「これは俺の推理だが——」

おそらく、こういう原理だろう。

本来、俺達ハンターがここに来たのは単なる偶然ではなく、なんらかの使命？を与えられたからなのだろう。

そうでなければ、俺が死んだ時そのまま天国行きか、俺達のいる世界へ戻れるはず。

つまり俺達は、そのなんらかの使命を果たす必要があるわけだ。

その、何なのかはまだ分からないが。

「けれど、疑問点がまだあるわ。」

「何で貴方は毎回の体験をしていないのか。」

「確かにそれは疑問だが――」

「それと、魔女を元に戻す方法というのはなんなのかしら？」

「それは――」

第二十九話 (後書き)

剣崎 真

突然現れたG級ハンター。

湯雲をハンターの世界に引き込んだ張本人。

様々な事が謎に包まれているが、湯雲達の知らない事をも知っている
本当に謎の多いハンター。

ハンター達に情報を与え、時に手助けする存在。

装備

ギザミXシリーズ

双聖剣ギルドナイト

第三十話 ホームルームとハンターランクって似てるよね。(前書き)

はい、サブタイトルからして「なんじゃこりゃー!」というのですが、

今回は日常です。

第三十話 ホームルームとハンターランクって似てるよね。

湯雲 side

「くっ……あ〜」

只今7…18分。

アイルー達に揺り起こされた俺は、

朝からギガントミートのステーキとリュウノテールのシチューというご馳走を頂き（胃がもたれそうだ……）

更に弁当を（尋常じゃない量）持たされた。

それを鞆へと積み込むと、学校へ。

「おはよ〜」

あまり気のない挨拶をしつつ、自分の席へ。

「あ、湯雲君、おはよう。」

何人かに挨拶されたので一応返しておき、

その際に三年のママさんと誰々がどうしたとか言っていたが、詳しくは聞こえなかった。

それでは、いざ眠りの世界へ……

「お〜っす！おはよう湯雲〜！」

とは行かなかった。

さやかをやつ……

「あゝそうそう、今日転校生が来るんだって。クラスの話題でそういう事が出ていた。」

「へえ、どんな奴だろう？」

時は経ち、先生が来てHRへ。

あ、HRとHRホームルームハンターランク
って似てるよな？

ふと、そんな事を思ったり。

「——はい。今日の連絡は以上です。」

「それと、今日はもう一つ。転校生を紹介します。」
教室内が騒がしくなる。

どんな人が来るんだろ？
暁美さん、湯雲君と続いているから、やっぱりカッコいい人かな？
いやいや、他に——

などど騒がしいが、

俺からすれば、正直どーでもいい。

「榛名圭一です。よろしくお願いします。」
わけなかった。

はあ？

……何で榛名の奴がここに居るんだ！？？

待て待て、意味が分からん……

その頃――

雪永side

「えーそれでは、転校生を紹介します。」
俺は頬杖をつきながらその話を受け流していた。

それにしても、転校生か……………。

どれ、どんな奴が来るのか興味が出てきたな……

「どうぞ。」

そいつは教室のドアをガラツ、と開けて堂々とした足取りで入ってきた。

学生離れした、がっしりとした体つき。

「大村武人だ。田舎者だが、皆の世話になる。よろしく頼む。」

は？

俺はアホのように口を開け、目の前に居る人物を見る。

マミの方も口を開けて、ぽかんとしていた。

どっからどう見ても、大村武人だ。

訳が分からない……。 (ま、学生に見えないこともないが……)

湯雲 side

昼休み。

「はアアアあるううううなあああくううん!!」
俺は（大量の）弁当を消費するべく、いたってふつーの笑顔で榛名の奴に話しかけた。

「ヒッ!! な、なななんですか湯雲さん!」
若干引いていたが、何とか榛名の奴はとどまった。

「弁当でも食わないか。いや、食って、食べてください、食べちゃってくださいお願いします!!」

「いいですけど何があったんですか!? 必死すぎて怖いですッ!!」

「まあ、まあ座れや、いや座ってくださいお願いします。」
訝しみながら、腰を下ろす。

「湯、雲さん……これは……」

「あ、ああ。」

そこには、二段重ねの弁当の一段目にはギガントミートのステーキが。

付け合せにスライスサボテンと激辛ニンジン、西国パセリが。

うん。普段なら諸手あげて喜ぶけど、（量が）尋常じゃないよね。

見てよこれ。誰か、分けて欲しい人居るでしょ？ねえ！分けるからさ、欲しそうな目してよ……！

もう一つを開けると、頑固パンが。（ご丁寧にフルーツジャムとチリチーズが挟んであった。）

あまりの多さに俺と榛名が立ち尽くしていると、

「湯雲君」

まどかとさやかに誘われて、屋上に行こうという事に。

「よし、榛名、行くか！」

弁当を畳み、階段へと。

「いや、それにしても榛名が来るとは予想してなかったよ。」

「あははは……」

「それより、さやかは恭介のやつとはいいいのか？」

「確かに話すらないけど……」

「ホラ、まあ、その、アイツにも色々あるだろうし、ね。」

「そうか。」

「湯雲さん、湯雲さん。」

「ん？どした？」

「この際、二人にもちよっと手伝ってもらいませんか？」

ああ、あのボリューム満点^{すぎ}弁当か。

屋上では、マミさんと幸輝がいた。

「幸輝くく手伝ってくれくく」

「んくく」

半分以上寝てるな、コイツ。

「なあ、なあ、聞いてくれよ今日榛名がさ——」

「こっちには大村君が来たわ。」

マミさん、それはマジですか……

「はあくあく。さて、寝たし——」

「幸輝、弁当食うの手伝え!!!」

「いいが、まさか『あーん』何てのは嫌だぞ。」

半分まだ寝てるな。普段の幸輝ならこんな事は口走ったりしない。

「えっ、二人ってまさかコレ!!!?」

さやかが、悪乗りする。

「違う違う!!!」

俺はそっちの部類じゃない!!!

って、まどかは顔赤くしない!

「誰がやるか、そんな事。」

幸輝は冷静に否定する。

「アイルー達が弁当を少し作りすぎちゃったんですよ。」
榛名。あの量が少しといえる量なのか？

「よし、それなら手伝おう。」

15分後――

「な、何て量なんだ……」

弁当の多さに手伝ってくれた幸輝（まどかやさやかも手伝ってくれた。）
が呟く。

「うう、辛い……」

さやかが呻くように言った。

「とりあえず、堅米茶【雁木】だ……」

水筒から堅米茶を飲むと、ようやく落ち着いた。

「あれ？所で大村は？」

「クラスに居ると思う。」

そんなこんなで、今日という日が過ぎていく。（今日は魔女も使い魔もでなかった。）

第三十話 ホームルームとハンターランクって似てるよね。(後書き)

それと、三十話突破ありがとうございます。

少なくとも、自分の小説に来ていただきありがとうございます。

皆さんが読んでいただいているのが、

作者にとっても喜びです。

これからもがんばりますので感想なども、よろしくお願いします。

第三十一話 (前書き)

あーうー……

慣れない事書いたりしたから
結構恥ずかしい……

でも、どうぞ見てやってください。
ちなみに作者の限界です。

第三十一話

雪永side

h俺はあの弁当事件の翌日、
マミから呼び出されていた。

……何か不味い事したかな？

「あ、ゆ、雪永君…。」

「どうした？」

明らかに様子が変だ。

心なしか顔も赤い。

「あの、私——」

顔を赤らめたまま、言った。

「雪永君の事が好きなの!!」

待て待て……

よし、落ち着け雪永幸輝。

まずは目の前の状況を考えろ。

思いだせ。

別に前々からそんな節が無かったわけじゃない。

今、マミは俺に何ていった？

好きだ。そう言ったな？

うん、正解だ。

で、俺はどうすればいい？

マミの事を俺はどう思っているんだ？

——俺は好き……なのか？

そりゃあもちろん、

待て、大体俺は何時居なくなるかも分からないんだぞ？
そんな奴がマミの隣に居ていいのか？

そもそも俺はマミの事が好きなんだろうか？

それは――

「好きだ。」

思わず口から飛び出した言葉に自分でも驚く。

しかし、頭ではこう思った。

雪永幸輝は巴マミの事が好きなのだろう。
だからこそ、口に出してしまったんだ。

「雪永君……。それは――」

「ああ。俺もマミの事が好きだ。大好きだ。」

「こんな狩りばかりしている俺で良ければ、」

「私は雪永君のそういうところが好きになったの。」

「じゃ、俺と付き合ってくれるのか？」

それは、俺が生涯言うはずがないと思った言葉だった。

それに対してマミは、笑顔でこういった。

「ええ。もちろんよ。」

マミとあの後、何ともいえない気分のまま家へと。

……なんなんだろう？この気持ち。

手を触れると、顔がほてっているのが分かった。

ベッドへと入ったとたん、眠気が出てきた。
急に訪れた眠気に逆らわず、意識を手放す。

——夢の世界。

頭では、理解していた。

ここが夢である事を。

一つを除いて。

目の前の相棒。

ランス装備のもう名前も思い出せないハンター。

——幸輝。起きろ。

誰だ？

——こっちじゃ樋口龍太って言われてる。

そうか龍太。でもなんでだ？

——いいか、時間がない。これから話す事は夢じゃない。よく聞くんだ。

なんだと？

——まずだ。ソウルジェムの正体だ。

——いいか、ソウルジェムはお前の推理通り、穢れを溜め込むとグリーンフシードになる。

馬鹿な!! そんなはずが――

――薄々勘のいいお前なら感づいているはずだ。現実を見ろ。

――ついでに美樹さやか、分かるな?

ああ、何度か剣の練習にも付き合ったしな。

――まず、これから近いうちに美樹さやかが魔女化する。
なんだって!?

――落ち着け、彼女を助ける方法ならある。
どうすれば!?! どうすればいい!?!?

――お前には無理だ。
どうしてだ!!

――それよりも巴マミの事だ。
マミがどうした。

――美樹さやかが魔女化した後、巴マミはほぼ確実に錯乱して佐
倉杏子を撃ち殺す。
なんだって!!!!

――実際に起こる事だ。お前が告白されたのは知っているがな。
苦笑を浮かべながら話続ける。

――美樹さやかは他のハンターがどうにかするだろう。それより
お前は、

——巴マミの暴走を何とかして阻止してくれ。お前にしかできない事だ。
分かった。だが——

——どうしてそんな事が分かるんだ。だろ？
ああ。

——簡単な事さ。

——俺は、もう、

——死んでいるからさ。

なら、なんで俺とこうして話せるんだ？

おかしい、とは自分でも思う。

——物には魂が宿る、そう村長から教わったろ。

お前、まさか——

——幸輝の首飾り。あれ、俺が渡した物だろ？

そう…なのか……。

——つと。そろそろ時間だ。じゃ、俺が手助けする事はする。

まだ、まだ話が——

——運が良けりゃ、また会えるかもな。

必死に手を伸ばすが、掴めない。

——がんばれよ。幸輝。

龍太は光となり、消えていった。

第三十一話 （後書き）

樋口 龍太

突撃志向の持ち主。その中でもランスを使った突撃の威力は他のハンターよりも高い。

雪永と組んでいたため、

記憶を失っても感覚はさび付いてはいない。

父親に憧れてハンターになった根っからのハンター。

前の時間軸で皆を助けられなかった事を後悔している。

今は死亡して魂のみの存在。

装備

ハンターシリーズ

レッドテイル

第三十二話 何もできないなんて、間違ってるだろ（前書き）

そういえば、アイルー達がいまいち活躍してませんね……

第三十二話 何もできないなんて、間違ってるだろ

湯雲 side

「おい！さやか！？」

俺は今信じられない事を見ていた。

もう、見慣れた魔女。それに立ち向かうさやか。
しかし様子がおかしい。

何時もなら、無茶な戦い方のしないはずの彼女は、
今、幾つもの蛇を模した首に全身を噛み付かれながら、剣を振るっていた。

「あはは、あはははは！！！！」

自分の鮮血を振りまいている彼女は、どこかネジが取れたように狂った笑いを浮かべていた。

「さやかちゃん！そんな戦い方、やめて！！」

隣では、まどかの悲痛な叫びが聞こえる。

「杏子！さやかを止める！榛名、アレの用意！！」

「う、うん！」

バストンメイジに何かを装填。

「も、目標、よし。」

撃ちだした弾丸はさやかに命中し、そのままさやかを倒れさせた。

「さやかちゃん!!」

「心配ない、睡眠弾だ。」

着弾時の煙の色から見ておそらくそうだろう。

「——おおおおおおおお!!」

大村が駆け出す。

今、ここで俺にできること——

「とりゃ!!」

閃光玉を投げつけて、

俺と大村が切り込めるように、蛇の視界を奪い取る。

「どおおせえええいい!!」

大村が全力の溜め斬りを中心にぶち込む。

「なら俺も!!」

ユクモノスライサーを引き抜き、鬼人化。

「だああああ!!」

体が軽くなり、頭が興奮するのを感じながらただひたすらに、斬る。

斬る、斬る、斬る斬る、斬る斬る斬る、斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る。

興奮状態が続く。

俺はその興奮に身を任せ、回転斬り。そして、乱舞。

ヒュンヒュンという音を刃が奏でながら、蛇の頭を切り裂く。

血が顔に張り付く。

うつとうしいはずの返り血でさえ、今は身にかかると更にハイになる元だった。

「は は は は は あっ は は は は は は は は は ! ! !」

更に乱舞で最後の二頭を斬りおとす。

「はっはっ：はー、はー、はー、はー……」

やべ……いつの間にか鬼人化してた……。

風景が崩壊して、それと同時に元の風景に戻る。

「はー、はー、ゴホッ、はー、はー」

咳き込みながら、グリーンシードを回収する。

「湯雲君……大丈夫？」

心配そうに見てくるまどか。

おそらくさやかと同じようにみえたのだろう。

俺は平気だと言う様に手を振っておく。

それでも心配そうに見てきたところで、大村が説明をしていた。

「大丈夫だ。今の湯雲は、鬼人化の影——」

「それより、はー、さ、さや、かの、はー、調子、はー、どうだ？」
呼吸が追いつかずに尋ねる。

大村が眠るさやかを見せる。

あちこち傷だらけだ。

俺は思わずに、視線を外してしまった。

「それは平気だが、何かあったのか？」

大村の質問に、まどかと榛名は大きく肩を震わせた。

「まどか、すまないが何かあったのなら言って欲しいんだが……」

「でも、こればかりは——」

「さやかの事を思ってだ。頼む！」

頭を下げ、頼み込む。

このままさやかが暴走し続ければ、いずれマミさんのように（雪永が助けてくれたが、）
なってしまうかもしれない。

そんな俺の雰囲気を押されたのか、渋々と言った様子で話してくれた。

「あのね――」

聞き終わって、一言。

「マジかよ……………」

それは、友人に恋仲を取られてしまうが、

こんな抜け殻みたいな体で好きだなんて言えないし、何もできない。

そんな感じの話だった。

いくら、先日にもウルジエムが魂の結晶で体が抜け殻だと言われた。
その時俺は――

「キュウベエ…………お前…………！」

ユクモノノダチを突きつけた。

「だから、どうしたっていうのさ？」

「お前、自分が何をしたかって分かってるのか……！」

「はあ…僕としてはむしろ感謝されたい気持ちなんだけどね。」

「感謝……だど？」

「僕は、君達のようなハンターみたいな屈強な人じゃない、少女を契約しているんだよ？」

「それが、どうしたんだ！？」

「君達ハンターで耐えられる怪我が、普通の人に耐えられるはずがないじゃないか。」

「だから僕は魂を具現化して、手に持って戦えるようにしてあげたんだよ？」

「だから、魔法少女は、普通の人、つまりは全身を串刺しにされても、血を一滴残らず取られても死なないようにできるのさ。」

「ふざけんじゃねえ！！それじゃああたし達はゾンビじゃないか！！」

「でも、弱点だらけの人体より、よほどいいじゃないか。」

その時、ズドンと一発の銃声が。

キュウベえは頭を吹っ飛ばされていた。

「はー、はー、はー、」

榛名がバストンメイジで撃ったのだ。

「は、榛名君……？」

「全く、君達の行動は理解出来ない……」

「な!!」

俺は視線を向ける。

そこには撃ち抜かれたキュウベえが。

「かわりはいくらでもあるけど、無意味に潰されるのはもったいないじゃないか。」

しかし、さやかが言っていた事である、

何もできないなんて、間違ってるだろ。

「榛名、お前知ってたのか？」

「う、ん。僕に相談されたよ。ただ僕は、何も言えなかった。」

「どうして!?!」

「分からない……。どうすればいいのか、僕には…分からないかった。」

「所で、さやかの奴は？」

「杏子がついているはずだが？」

その時、駆け寄ってきた杏子がこういった。
え!?!

「杏子!?!」

「すまねえ、さやかの奴が逃げちまった……」

は？

マジかよ……………

第三十二話 何もできないなんて、間違ってるだろ（後書き）

そろそろ、ですかね。

感想待ってます。

第三十三話 だが、やるしかない（前書き）

今回は結構暗めです。

第三十三話 だが、やるしかない

湯雲 side

皆と別れた後、

「まどか？」

俺は呼びかけるが、どこにもまどかの姿は無かった。

どこに行ったんだ？

そこで、ぽつぽつと雨が降ってきた。

「ありゃあ……」

これは本降りの一歩手前、といったところか。

幸輝、お前ならどういった？

俺には……何が正解だか、分からないんだよ……

どうしたら、いいんだ。

誰か、教えてくれよ。

雨をしのぐ為、俺は、雨に打たれつつその辺へと駆け込む。

しかし、人影を見つけると、すぐさまその考えは失せた。

まどかとさやかがいたからだ。

「さやかちゃん…あんな戦い方、ないよ。」

この声は、まどかか。

俺はかろうじて聞き取れて、見つからない位置まで見つからないように移動する。

うまーく自販機の裏に隠れて、話をきく。

「感じないから傷ついてもいいなんて、駄目だよ。」

「ああでもしないと、勝てないんだよ。」

「あんな戦い方したら、さやかちゃんの為にならないよ。」

「あたしの為？それって何よ？」

「こんな姿で、何があたしの為になるって言うの？」
ソウルジェムを取り出し、見せる。

「今のあたしは魔女を殺す為にしか存在意義はないの。」
俺は思わず、ゾツとした。
足が震えた。

ハハハ、おかしいな……雨のせいじゃないのは分かってるんだ……
……。

なんなんだよ、このデジャヴは……！

経験してないはずなのに、俺は既視感にとらわれていた。

「幸せ？……じゃあ、あんたが戦ってよ。」

「ッ……………」

俺は思わずに、幸輝の言葉を思い出していた。

「他人の願いを叶えるという事はそれは自分自身が死んでもいい——そこまで考えてるのか？」

「だから、たとえば——」

「そういう願いは少なからず身を削る。報われなくても、だ。」

「それにな、俺はそうして失敗した奴を見てきた。……そいつはな、馬鹿でどうしようもない奴だったよ。」
アレはどこか、諦めと皮肉や——

まるで、自分自身の事をさしていた気がする。

そして今、さやかがその言葉通りに身を削っている。

その上、さやかが次に口走った事は、
真正正銘、驚いた。

「キュウベエから聞いたの。あんた誰よりも才能あるんでしょ？」
は！？マジかよ！！

俺の驚きをよそに、さやかは続けられる。

「あたしみたいな苦労しなくても簡単に魔女をやっつけられるんでしょ？」

「あたしを助けたいんだったら、まず、あたしと同じ立場になってみなさいよ。」

「ッ…そんな……」

「無理でしょう。」
当たり前だ。

そんなの、死に行くのを分かってて行くような事だ。

大体、今のさやかには論理も無茶苦茶だ。
さやかの本音を平たく言ってしまうば、

ただ単に、道連れが欲しいだけなのだろう。

そんな状態の奴に、俺が何を言っても無駄だろう。

「ただの同情で、人間止められるわけないもんね……！」
はき捨てるように、さやかは言った。

「ど、同情なんかじゃッ……」

「何でも出来るくせに、自分では何もしないあんたの代わりにあたしがこんな目にあっているの。」

「それを棚に上げて、知ったようなこと言わないで。」

やばい、俺でもキレそうだ……。

魔法少女になる事、それはさやか自身が願いを持ってなった事だ。それをまどかの代わりになった、なんて、自分勝手な論理だ。

恭介の腕を直す事は、さやか自身が望んだ事。

だが、今の俺が正論を言った所で、

「ハンターであるあんたに何が分かるって言うのよ」

とか返されちまうのがオチだろう。

「おい、そりゃあずいぶん変な論理じゃないか。」
誰だ？

「笹草……アンタに何が分かるって言うの!!!!?」

笹草……? 何者だ?

「恭介の腕を直す事はさやか自身が望んだ事。」

「だが、自分に恭介が振り向いてくれないからといって八つ当たりか?」

「うるさい……!」

「自分が願ってそうだったのに、それを鹿目に押し付けるのか。」

「黙れッ!!」

「自分の行いすら、否定するのか。」

「ッ!!!!」

さやかは、一瞬で変身してその人に襲い掛かった。

しかし、その人は一瞬で防具を身に纏った。
レイアSシリーズ。それを纏った状態にだ。

「ふんッ!!」

剣を掴み、さやかへと拳を叩き込んだ。

「うがっ！！！」

吹っ飛ばされるさやか。

「動かないのも、自分の責任のはずだ。さやか。
諭すように、言った。」

「……アンタなんか、」

「あたしの何が分かるって言うのよ！！！！」
剣を構え、突撃する。

「何があったかはアレだが、」
大剣を引き抜く。

「物事を投げた時点で、お前の負けだッ！！！！」
大剣の腹で、さやかを殴った。

吹っ飛んで、こちらに来る。

「ぎゃ——！」

叫び声すら上がる暇は無かった。

「よ、よお……」
やべ……

自販機の下敷きになっているため、
まともな行動が取れないな……。

「ッ——！！」

俺を見るなり、さやかは駆け出していった。

「さやかちゃん！！」

俺は、自販機から這い出て、
笹草と言われた奴へと目を向けるが、そこには何も無かった。

剣崎 side

「な、なあアレで良かったのか？」

俺は心配そうに見てくる笹草の奴を見る。

今の状態を見る限り、関係は俺の経験上かなり不味い。いや、最悪だろう。

修復するのも一苦労だ。修復を怠った場合の成功率が下がるからな。

「ああ、大丈夫だ。問題は無い。」

「よかった……。」

「それと、お前には悪いがこれで美樹さやか魔女化確定だ。」

「ちゃんと、助かるんだよな……？」

打って変わってにらみ付けるような表情になる。

「助かるさ。任せておけ。」

「助からなかったら、俺はお前を殺すからな。」

「ああ、構わない。それより、お前の方も準備はしっかりとな。」

本当はかなり怪しい賭けだ。

だが、やるしかない。

ここが二つ目の山場。

だが、何としても乗り越える。乗り越えなくてはならない。

ハッピーエンドを手に入れる為に、な。

第三十四話 大丈夫だ、問題は、ない。(前書き)

はい、そろそろ物語も架橋へ差し掛かってきましたね。

第三十四話 大丈夫だ、問題は、ない。

笹草 side

俺がもうさやかとの関係は最悪だろう。
おそらく、関係の修復もできなくなる。

しかし、こうするしかなかった。

あのままではさやかが魔女から復帰できても、
どうしようも無くなつてほむらに殺されるかもしれない。

これで、よかったんだ。

今のさやかは、
自分のために奇跡を願った事を自覚できなくて、ねたみを積もらせていた状態。

それにさやかは気づくだろうか？

いや、気づいてもらわなくては困る。

何の為に俺が動いたのかが、分からなくなる。

仮に後悔に気づいても、魔女化する方が先だろう。
さやかには、少しでも幸せになって欲しい。

それを願ったのは、龍太の奴だ。

しかし、

魔女を助けられるのは相棒である榛名圭一……

つまり後は、榛名次第か……。

すまないな、龍太。

やっぱり俺にはさやかを助けるなんて、無理だったよ……。

雪永 s i d e

「あ……さ………?」

俺はベットから飛び起き、今の時刻を確認する。

5..58分。

学校へ行くには早すぎる時間。

——幸輝。

龍太？

——ここ数日の内に話していた事が必ず起こる。

ああ。

——巴マミの方を任せた。

——それじゃあ俺は、別件でな。しばらく手助け不可だ。

ああ。分かった。

さて、俺は今の状況を誰かに話すべきなのだろうか？

——いや、絶対に話すな。

どうしてだ？

——誰も信じない上、お前の信用がガタ落ち、更に巴マミの暴走の可能性がある。

なるほどな……

——話すのであれば、さやかが魔女化から復帰した時だ。

——仮に復帰に失敗した場合、知らなかったフリをしろ。いいな。

分かったよ……

——その、えっとな。

どうした？

——頑張れよ、幸輝。

ありがとうな。龍太。

——じゃ、俺はもう行くからな。

ああ。

剣崎 side

「ワルプルギスの夜の出現地点はおそらくここだろう？」

俺は暁美の家で、対策会議を開いていた。
ちなみに、笹草健助と佐倉杏子も同席している。

「ええ、統計上は大当たりね。」

「統計？」

「ああ。」

「一体何時この街にワルプルギスの夜が来たって言うんだよ？」

俺もほむらも沈黙する。

「すまない。今は、話すわけにはいかないんだ。」
まさか自分が繰り返される時間軸から来た。なんて言えない。

「もうちょっと手の内明かしてもいいんじゃないか？」

（剣崎、言っちゃってもいいか？）
隣の笹草が耳打ちしてくる。

止めろ、そういう代わりに何気ない仕草に見えるよう、指を振る。

「それはぜひ僕からもお願いしたいね。」

「出て行って貰おうか。」

俺は間髪いれずに氷刃【雪月花】の切っ端を向ける。

「やれやれ、僕は招かれざる客という事かい？」

「平たく言えばそうね。」

「今夜は君達にとって重要なはずの情報を届けにきたんだけどね。」

「ああん？」

「美樹さやかは消耗が予想以上に早い、って事か？」
もともと、それが俺にとっては予想通りなんだが。

「そう。さやか自身の消耗もだけど、彼女自身が呪いを生み始めた。」

魔女化の前触れ、だな。

「…誰のせいだと思ってるのさ。」

「このままでは先にワルキルプスの夜が来る前に、厄介な事になる。」

「なんだと？」

「それは僕より彼女自身に聞いてみたほうがいい。」

「君なら知っているんじゃないかな。暁美ほむら。」
ほむらは視線を向け、逸らした。

「やっぱりね。君がどこでその知識を仕入れたのか、僕はとても興味深い。」

「うるさい、消えろ。」
俺がそういうとキュウベえは消えていった。

「それよりも美樹さやかだ。大変な事って何だよ？」

「彼女のソウルジェムは穢れを溜め込みすぎたのよ。」

「そこで、早くしないととんでもない事になる。」
笹草が口を挟む。

「ま、そっちは問題ない。そうだと剣崎？」

「ああ、大丈夫だ。問題は、ない。」

いや、大有りだ。

こちらは既に幾つかの手を打った。
だが、策が通じるかどうかは微妙な所だ。

何せ魔女を魔法少女に戻すのに
俺は一度死んだ身にならなければならなかったからだ。

湯雲 side

ここ数日、皆の間がピリピリしているのが分かった。

幸輝は何かというかその代表だった。

表面上は笑ったりしているが、
なんというか、殺氣がにじみ出ている。
丸で、狩り場の雰囲気にならなっていた。

榛名の奴は毎日さやかを探そうと街を全力疾走しているし、
大村も気が気ではない状態だった。

そして、目の前に居るまどかもどこか虚ろになっていた。

……全く、どうしてるんだよ、さやかは。

俺は腕を組み、必死に足りない脳みそを動かして唸りつつ考えていた。

しかし、俺は幸輝のような勘はどうやらないらしく、担任に変な目で見られたが、そんな事はどうでも良かった。

「えっ？ 帰ってないんですか？」

放課後。俺はまどかに連れられるままにさやかの家を訪ねたが、空振りだった。

「湯雲君、私……。」

「おう、手分けして探すか！」

敢えて明るく振舞い、俺は駆け出す。

そのころ――

第三十四話 大丈夫だ、問題は、ない。(後書き)

さて、次回予告ですが、アイルーが（少しだけ）活躍します。

お楽しみに！

感想など書いていただければ光栄です。

後ちなみに、アイルーの名前はまだ募集中ですので、
性格なども付け加えて欲しければ、ぜひよろしくです。

第三十五話　ここは、何処ニヤ？

??? side

「ここは、何処ニヤ？」

人の話し声が聞こえた俺は急いで物陰に隠れて、箱を引っかぶったニヤ。

話を聞くが、どうも俺には理解できそうには無いのニヤ。

…ソウル——とか何とか。

箱の隙間から目を向けて、状況の把握に努める。

…何だ？

俺は今、目の前で起こっている状況が理解できなかった。

十代くらいの少女が言い争っているようにも見えた。

何かを言い捨てるように言うと黒髪の女が屈みこみ、腕に取り付けた盾？のような物から拳銃を取り出すと

そのまま青髪の人間に突きつけた。

……ちょっと待て!!？

何が起きてやがる!？

引き金を引く指に力が入りかけているのも分かった。

このままじゃあの子死んじゃうニヤ!!

…落ち着け、冷静に。

おそらく、あの黒髪を止めるには俺がいくしかニヤい。

覚悟を決めて、背中のソリッドネコナイフに手を掛けながらダンボールを飛び出す。

「っ！！」

そのままCQCを使い、引き倒す。

ソリッドネコナイフを首元に突きつけながら拘束する。

「その青い子!ここから離れるニャ!!!!」

青髪の子はこちらを見てからよろよろとした立ち上がり、足取りで青い子はその場を去っていった。

…本来ならこんな事はしたくニヤいのだが、そうもいつてられない。

「なぜ、あんな事をした?」

「…………。」

沈黙。

「答えろ!!」

首に刃を近づけて、薄く切る。

そのとたんに体は宙へと浮き、地面にたたき付けられる。

「がッ——！」

「動かないで。」

拳銃を向けられる。

…どうする。

ソリッドネコナイフは向こうへ投げられ、カシャンという音を出していた。

ボスが使ったアレ、使ってみるかニャ。

ボス、あの手うまくいくか分かりませんがやってみますニャ。

「はあ」

のんきにため息をつき、よろよろと歩く。

もちろん心臓はバクバクニヤ。

「お前に撃てるのかニヤ？」

ボスの真似をしながら問いかける。

「私は本気よ。」

…無限バンダニヤの中に冷たい汗が落ちる。

「貴方が何なのか分からないけど、邪魔するようなら撃ってみせるわ。」

…やべーニヤ。更に本気になってるニヤ…。

落ち着け、いいか落ち着くニヤ。

「はあ」

更にため息を。

感づかれないように足に力を込める。

そして、俺は、あの一言を。

「安全装置が外れてないのニヤ。」

ハツタリニヤ。

「え？」

一瞬。一瞬だけ銃に視線を向けていた。

ここしかニヤい！！

一気に距離を詰め、足払い。

素早くナイフを拾いCCCで拘束。

「あなたッ……！」

「さてもう一度聞くニャ。」

「なぜ『さやかー！』」

そこには俺でも分かるイーオスシリーズのハンターが。

「手前え…さやかをどうした！！」

赤い髪に赤い服の少女も。

「まあまあ、杏子さん。そのアイルー。」

「何の用ニャ？」

「青い髪の子を見なかった？」

「それならさっき向こうへ行ったニャ。」

「ありがとう。行こう、杏子さん。」

「ああ。」

二人は去っていった。

「…さて、早くしゃべって——」

「ッ！！！！」

え？

俺はその子が手榴弾のピンを抜くのを見たニヤ。

フラッシュグレネードだというのも。

「ニャアアアアアアア！……！！！！！！」

激しい閃光に思わず手を離してしまった。

走り去っていく音が聞こえた。

「待つ、待つのニャ！……！！！！！！」

そして、取り逃がしてしまったニャ。

「畜生……ニャ！」

第三十五話　ここは、何処ニヤ？（後書き）

はい。

今回は結構凄まじい事になっています。

このアイルーの話は他で短編としてあげる予定です。

第三十六話 あたしって、ほんとバカ(前書き)

更新遅れてしまい、申し訳ないです。

第三十六話 あたしって、ほんとバカ

榛名 side

「さやかッ！」

「……。」

電車に乗ろうとしていたさやかを呼び止めるが、そのまま電車へ乗ってしまった。

「おいっ！さやか！？」

隣には杏子が。

「っ——！！」

改札をすっ飛ばし、電車に乗り込む。

「杏子っ！」

「あたしは後から行く！あんたはさやかと行ってやってくれ！」

人がほとんどいない車内でさやかを見つけた。

寄りかかるように座っていたさやかが、僕にはとても痛々しく思えた。

「さやか。」

呼びかけながら隣へと腰を下ろす。

：何でこんなに傷つけられなければならないんだろう。

人の幸せを願っていたのに、こんな酷すぎる。

「…榛名……あたしさ……。」

さやかがつぶやくように言うが、それは僕には聞こえなかった。

少し離れている所で、二人の大人が話しているのを聞いてしまったからだ。

「——女ってバカだからさ、すぐ金持たせとくと——」

「いやー、ホント女って人間扱いしちゃ駄目っすねー」

この時点で自分が憤って殴りかからないのが不思議だった。

「犬かなんかだと思ってしつけないとねー。」

まずい、押さえろ、押さえろ。

「顔殴るぞっておどせば、大抵の事は黙りますモンね。」

「ちょっと油断すると——」

我慢だ。我慢。忍耐。

思わず僕はさやかの手を握っていた。

「捨てる時とかだと——」

「その点、うらやましいですよ——」

「ねえ。」

さやかは僕の手を解き、そのガラの悪そうな大人に話しかけた。

「その人の話、聞かせてよ。」

「君、中学生？夜遊びは行けないぞ。」

「そっちの子、彼——」

「ねえ、その女の人あなたはあなたの為になんばってたんでしょう？なのに犬と同じなの？役に立たなきゃ捨てちゃうの？」

「なに、こいつ。知り合い？」

もう片方は、いいやと返していた。

さやかを、止めないと——

しかし、体は言う事を聞いてくれない。

「ねえ、この世界って守る価値あるの？あたしは何の為に戦ってきたの？」

「ねえ、教えて、今すぐあんたが教えてよ——」

「でないとあたし——」

「さや、」

魔法少女へと変わったさやかは、

そいつらへと剣を向ける。

「お、お嬢ちゃん、何をしているのかな…?」

「お、おいその彼—ッ!」

僕は止めるわけでもなく、ただただそれを見ていた。

動け、動け!

さやかを止めるんだ!!

さやかの所へと割ってはいる。

「さやか、止めよう。」

「どきなさい、榛名。こいつらは死ぬべきなの。」

強引に退けられて、剣を突き刺す。

「があっ!!」

「ヒ、ヒィ!!」

「死にはしないようにしてる。」

「止めろッ! さやか、そんな事しないでくれ!!」

ゲス野郎達は、僕へとすがりつくように視線を向けてきたが

「どうして、止めるの?」

「そんな事、正義の味方がすることじゃない。」

「でも、あたしは——」

「なら、せめて、僕が殴る。」

イーオスシリーズを身につけて言う。

「…分かった。」

いくら僕が非力でも、それはハンターの中での話だ。
一般人よりは、力はある。

「歯、食いしばってもらえますか?」

「えっ?」

バキィ、とそのゲスの顔面にストレートをぶちかます。

「ヒッ! 助けてくれるんじゃないのかよ!?」

「だから、助けてるじゃないですか。」

もう一人を立てせて、ボディヘ一発。
よろけた所を顔面へとハイキック。

僕も、僕とさやかを止められない。

その後ゲス達を気絶するまでぶん殴った後、
ホームに下りた僕たちと杏子が丁度たどり着いた所だった。

「はあ、やっと見つけた…。」

「さやかさ、いつまで強情張っているわけ？」
チップスをほおぼりつつ杏子は言った。

「悪いね…手間かけさせちゃってさ…」

「なんだよ…らしく無いじゃんか。」
そこで視線を向けられる。

「う、ん。」

「色々あったんだよ…色々と。」
「ふーん。」

「別に、もうどうでもよくなっちゃったんだよね。」

「さやか、」

「榛名、あたしはね、一体何の為に戦ってたのか分からなくなったんだ。」

そういつて、手の平のソウルジェムを見せる。

「さやか、それ、濁りきってるよ……!」

「おい…」

杏子が息をのむのが分かった。」

「希望と絶望のバランスは差し引き0だっていつか、あんた言ってたよね。」

「あたしは前はそう思ってた——。だけど、今は違う!!」

「それは違うよ、さやか!」

「何が違うって言うの? 榛名。」

「今はさやかが悪い方へ考えてるだけだ!」

「あたしがこんなになっても?」

「それに、まださやかは何一つ報われてない!!」

「そうだ。あたしだってハンターやさやかという存在とあう前は寂しかった。だけど出会ってから、毎日が暖かった。そしてなに

よりうれしかったんだ!!」

「：確かにあたしは何人も救ったけど、その分、うらみやねたみが重なって、大切な親友まで傷つけた。」

「それが、どうしたっていうんだよ。時に衝突してしまう事だってあるのに!!」

「でも私は、誰かの幸せを願った分、誰かを呪わずには居られない…。」

「あたしたちってそうゆう存在なんだ。」

涙をこぼしながら、さやかはこう言った。

「あたしって、ほんとバカ…」

その瞬間、僕と杏子の体は吹っ飛んだ。

「さやかッ！！！」

杏子の声が遠く聞こえる。

心なしか、視界も暗い。

薄れていく意識の中、なんとか柵を掴みながら『それ』を見た。

ソウルジェムが割れて、グリーンシードへと変わっていくのを。

…僕は、さやかの相棒として彼女に何もしてやれなかった。
畜生。

——さん。

僕は、あなたのように、人は助けられませんでした。

せめて、まどかさんに仲直りさせてあげたかった……。。

——おい。

誰？

——美樹さやかを助けたいか？

ああ、助けたい。絶対。

——なら、まだ諦めていいときじゃない。

これ以上、どうしろって言うんだ？

——それは、お前次第だ。

第三十七話 知った事じゃない。(前書き)

すいません!!

P Cが見事に大破しちゃいまして、今は親のを借りてます。
結構遅れますが、始めます。

第三十七話 知った事じゃない。

「ねえ、湯雲君…」

「…さやかの事なら、気にするな…」

もちろん、俺にはどうしようもない。

「私が、何もしなかったから…さやかちゃんがああなっちゃったのかな…?」

「そんな事は全ては自分が決めた事、じゃないのか?」

「俺、初めに言ったと思うんだが、」

「…湯雲君は、どうなの? さやかちゃんがどうなってもいいの?」

「それは——」

「君達も僕を恨んでいるのかい?」

「キュウベえ…」

「えつとな、正直俺は恨みたい気持ちでいっぱいなんだが、それでさやかが帰ってこないだろ? 出来るのか?」

「そうだね。それは無理な相談だ。それより「キュウベえ。」

「前に言ってた私がすごい魔法少女になれるって言うのは本当なの?」

「すごい、なんて物じゃないよ君はおそらく最強の魔法少女になれる。それに——」

「湯雲、君達ハンターという存在は皆すごい才能を持っているよ。」
「それが、どうした」

「君は特に強い魔法少、いや魔法狩人になれる。」

「俺が願えば、さやか of 奴も元に戻る、のか？」

「まどかはもちろんだけど、君が願えるならそのくらいは軽いさ。」

「正直、僕としても男である湯雲がこれほどまでのエネルギーを持ち合わせている事が驚きだよ。」

「本来、少女としか契約できないのに、男でありなおかつ素質あふれる人間にあったのははじめてだよ。」

「だけど、俺は契約は——」

「まあ、僕としても無理強いはしないよ。」

「でも、契約してくれるなら、惜しいけど鹿目まどかの事は諦めよう。」

そう切り出してきたか…

ここで俺が迷ったり突っぱねたりすれば、まどかに契約をせまるだろう。

チラリ、とまどかを見る。

勿論、まどかが二つ返事で契約をしてしまうだろう。

そもそも大前提として俺が契約しても、まどかに契約を迫る可能性もある。

どうすりゃいい…。

「そいつに耳を貸すなッ!!!」

ドン、ドン、ドンとボウガンの連射の音。

ベンチのキュウベえへと命中する。

「誰だ!」

「君達が契約させられそうだったので介入した。鹿目を連れてここから離れるんだッ! 急げ!」

銘火竜弩にレイアの防具。

「ありがとう!」

礼を言いながら、まどかを担ぎここから離れる。

あれは、もしかして…

「ひどいよ…何も殺さなくても…」

「まどか。」

「どうして、どうしてなの…」

「鹿目!!!!」

「ヒッ！」

喉をひくつかせながら、俺を見た。

「キュウベえがなにをしてきたか、分かるか？」

「で、でも!!」

「アレが何を目的としているのかなんてどうでもいいし、知った事じゃない。」

「けどな、俺は目の前の不幸が増えるのだけは見過ごすわけにはいかない。」

これは、親父の言葉だ。

「だからな、ええっと…その…」

言葉がうまくまとまらない…

「だからな、…頼むから、自分を責めないで欲しい。」
目の前の不幸を見逃せるほど、俺は腐っちゃいない。

「自分から不幸にいかないでくれ。特に、先が分かってる時ほど。」

家へとたどり着きアイルー達との談笑が終わって寝ようとした時に電話がかかってきた。

「は？」

「だから、 !!!!!!」

「すまない、もう一度いいか？」

「いいか湯雲、さやかが、魔女化しちゃったんだよッ！！！！！」

はい？

第三十八話 人の為には動けない（前書き）

すいません！前回の介入シーンで介入したのはギザミのハンターではなくレイアの防具でした！

第三十八話 人の為には動けない

「あ……え……？」

何が起こったんだ……？

僕と杏子が飛ばされて……

ここは……？

魔女の結界の中？
どうして？

ふと、視線を上げる。

「——！ ツ——！」

叫び声が聞こえる。これは、さやかのだ。

そこに居たのは、楽譜が漂い、車輪とレールが浮かぶ所。

さやかの物であろうサーベルを振るう、魔女。

「ツ——！！」

見た物のおぞましさに、引いてしまう自分。

あれが、さやか？

認めてしまう自分に嫌気すら覚える。

「っ、杏子！」

思わずその名を呼ぶが、どこにも居ない。

その瞬間。視線が合った。

車輪が向かってくる。

バストンメイジに貫通弾LV3を装填し、車輪目掛けて撃つ。

自分を潰そうと、車輪はどんどん増えていく。

ふと、思った。

さやかの相棒として頼られた事もあったが、役に立てない自分。それならば、せめてここに居てやるのも、いいんじゃないか。

バストンメイジを構えたまま、その場に倒れこむ。

向かってくる車輪を敢えて食らう体勢をとる。

：やっぱり、僕には人の為には動けない。
自分の為に動くのが一番良かったのかな。

あ、そういえば武人の事、忘れてた。

車輪が近くに來た時にふと、思い出すが
もう遅かった。

そこで、意識は途絶えた。

「また、あいつらの勧誘か？ インキュベーターさんよ。」
俺は銘火竜弩にLV1貫通弾を装填する。

「懲りないね、君も。」

「当たり前だ。」

「代わりはいくらでも居るけど、」

「もったいない、か？」

「暁美ほむらといい、君といい、なんで邪魔をするのかな？」

「答える必要はない。」

「大体、なんで君が僕の本名を知っているんだい？」
無言で通す。

「…まあ、いいや。でも君達は一切何者なんだい？ 笹草健助。」

「その質問に答える気は無いが、」

「俺はお前の好きにはさせない。宇宙の寿命を延ばす為だろうがそのために人の命を持て遊んでいいと思ってるのか？」

「君達の考えこそ理解できないな。良く考えれば君達にとっても得になるはずなのに。」

「だからって異星人がここの人達を不幸に合わせるのは俺には耐えられない。」

「過去の間がここに来て何をしようって言うんだい？ 既に君達の未来は安泰のはずだよ？」

「確かにな。俺らが生きているのは昔の事だ。俺らには全く関係の無い話だ。だがな、」

「目の前の不幸を見逃せるほど、俺は腐った人間じゃない。」
これは、混じりつけの無い俺の気持ち。

「彼女達の犠牲が何を生むのかを分かって欲しかったんだけどね。
どうやら無理みたいだね。」
「なら、さっさと行ってくれ。そもそも最初から分かうとなどして
いないからな。」

ふう、と息を吐く。

第三十九話 アイツを頼む（前書き）

PCが復活したので更新していきます！
応援よろしくです。

第三十九話 アイツを頼む

「あの、バカ!!」

突然自分から倒れた榛名の奴を見るなり俺はそう口走っていた。

駆け出すが、車輪が榛名を押しつぶすほうが早い――

「ニャ!!」

一匹のアイルーが俺を追い越し、車輪へと何かを投げつける。
それが着地すると同時に爆発して車輪を跳ね飛ばす。

なんだ…? あいつ?

「助けるなら早くするニャ!!」

そういいながら背中中の武器を構え、相対する。

「お前も早く逃げろ!!」

榛名を運び、俺は取って返して双聖剣ギルドナイトを抜き放つが、
既にそのアイルーは逃げて榛名を結界の外へと出していた。

「長居は無用だ…!」

音爆弾を取り出し、さやかが魔女化したものへと投げつける。
以前はこれで隙ができた。今回も効くはず……

キィーン! という音を撒き散らすのと同時に俺は踵を返し、結界
を後にする。

その後、榛名を家へと連れて帰るとあいつは目を覚めました。

「どうして、どうして僕を助けたんですかっ!!」

第一声からしてすごかった。

「落ち着け。」

一度殴りつけ、冷静にさせる。

「さやかを元に戻す方法ならある。」

「ッ!! どんな事です!?!」

「それはな、まずは落ち着くことだ。」

「いい加減に——」

「うるさい。俺を剣崎真を信じるなら教えるが。」

「分かりました…。でもどうすれば…」

「まずだ。捕獲のやり方は分かるな?」

「はい。」

「あれと同じことをすればいい。」

「魔女を……捕獲する事ですか？」

「そうだ。ただ、魔女を捕獲したとしても魂のより場がないといけないからな、さやか死体————といっているんだか分からないが、近くにおいておく必要がある。」

これは俺の実体験から言えることだが、相当しんどい。

「魂が分離する、そういう事ですか……」

「そういう事だ。手は貸せないが、情報なら回してもいい。」

そこでふと、榛名が焦りだした。

「そうだ、ボウガンは……！」

「代わりといっちゃ何だが、これをやる。」

そういうながら布袋から銘火竜弩を取り出し、榛名へと手渡す。

「えっ……いいんですか？こんな物貰っても……？」

「いい。それよりアイツを頼む。」

「はい！」

「今日は休んで、しっかりと頑張れよ。弾丸はここに置いとくから

な。
」

俺は手持ちの貫通弾と火炎弾を置くとさっさと立ち去ることにした。

第四十話

僕は、剣崎さんの事を信用していない訳ではなかったが何分不安だった。

魔女を捕獲できるのに何故しなかったのだろうか？

さやかが魔女化する事も知っていたのに、何故何もしなかったのだろうか？

そんな事を考えながら準備を始めた。

まず鍋に十数個のマヒダケと水を入れて煮込む。

水が黄色に染まった所でマヒダケを取り出して更に煮詰める。

：こんな風にいうと簡単に感じてしまいが、何分時間がかかる。

その間に乾燥させたネムリ草をゴリゴリとすり潰して粉末状にする。マヒダケの方が煮詰まり次第粉末にしたネムリ草を入れる。

注意どおりに赤い色に染めるのだが、無いので食紅で代用する。

これで捕獲用麻酔薬の完成。

本来なら素材玉をつかうのだが、素材玉はネンチャク草が無いため手持ちの投げナイフを使って調合する。

……うん。後十本以上はある。

投げナイフに捕獲用麻酔薬を塗りつける。

捕獲用麻醉ナイフの完成だ。

余った材料で捕獲用麻醉弾を一応作っておく。

「おう、圭一。」

「武人…。」

「俺さ、来る途中『美樹さやかを助けたければ榛名のところに行け』
と言われたんだがな、何かあったのか？」

「さやかを助ける方法が見つかった。」

「…本当か？」

「うん。確証は無いけど、賭けてみたい。」

次の日。

湯雲 side

俺はこの日、まどかの奴と一緒に登校中だった。
変な噂が立つかない、とも思ったが、俺は別な意味で心配だった。

目に見えて元気が無くなっているからだ。

「なあ、まどか。」

「…何…湯雲君…。」

「何も、さやかが助からないって決まった訳じゃないだろ？ 大体、
そんなしけた顔してたらさやかが帰ったときどうしようもないだろ
？」

「……。」

まどかの頬を摘まみ、上下左右に引っ張る。

「いいい！いいいっへはー！」

「シャッキリしろよ」

喝を入れるが余り効果は無いようだ。

——昨日の今日で、学校なんていつてる場合か

頭の中に声が響く。

顔を上げ、辺りを見回す。

いた。ビルの上に杏子が長い髪を揺らしつつ佇んでいた。

——ちよっといいか？話がある。

ああ、勿論オーケーだ。

「まどか、俺は行くがどうする？」

「私も行く。」

「すまないが、一度家に戻ってから行くから遅くなりそうだ。まどかは先に行ってくれ。」

おそらくさやか絡みの話だろう。それなら装備は必要だ。

家に帰り、装備を取る。

ユクモノシリーズに、いつの間にか強化されていた真ユクモノ剣斧を袋に詰める。

「皆！出てきてくれ！！」

家の中のアイルー達を集める。

「ご主人、学校は？」

「んなモン、サボりだ、サボり！それよりさやかを助ける。俺に協力してくれ！」

頭を下げ、頼み込む。

「はぁ〜頭をあげるニャ、ご主人。」

「ここにいる全員、あの人を助きたいニャ。」

「ならば、僕たちも協力するに決まってるニャ。」

「なら、全力で戦うまでニャ。」

「…ありがとな。」

覚悟は決まった。

第四十一話 それは…ちょっと違うと思う

「居た！」

俺は急いで駆け寄ってみる。

「悪い、遅くなった。」

「湯雲か…。」

あれから俺はオトモアイルー達の中で数匹を連れてきていた。

「で、さやかをどうやって助けるんだ？」

「それは――」

作戦とは魔女でも友達の声くらいは覚えているのかも知れない、といった理由からまどかが呼び続けるといった物で、俺達はその間の足止め役らしい。

「分かった。」

「じゃあ、入るぞ。」

結界の中へと入る。

「ニャーここが結界…」

思わず、といった様子でキンチャクが呟く。

今回連れてきたアイルーは、

レウス

キンチャク

シュンギク

ジュウベエ
ジム

の五匹だ。

「ねえ、杏子ちゃん」

「何だよ？」

「誰かにばかり戦わせて、自分は何もしない私って卑怯者なのか？」

「それは…ちょっと違うと思う。」

「確かにな」

「大体、俺だって好きでハンターやってるんだが、危険も多い。」

「それに魔法少女だって誰にも務まるとは限らんだろう？」

「ちよ、それあたしの台詞！」

「…ああ、悪い。だけどな、元々恵まれてさ、家族もいて幸福なのにわざわざ自分から戦いに身をおく必要があるのか？まだ17の俺が言えた事じゃないのかも知れないけど、そんな事は馬鹿げてると思えない。」

「命に関わる事になったらまだしもただそんな事で魔法少女になるならあたしが——」

「ッ、来るニヤ!!」

扉が閉まり、前の扉がバタバタと開く。

「うお……」

俺はさやかだった物を見上げる。

そばではうるさぐらいのヴァイオリンが鳴らされている。

ギギネブラを見たような嫌悪感。そして人魚を模したであろう体。そして手に持つサーベルがあれがさやかである証明だった。

「来るぞ、打ち合わせどおりにな！」

「ジュウベエ！レウス！シュンギク！俺と前に出てくれ！！ジムとキンチャクは後衛に！」

「「「「ニヤ！」」」」

「さやかちゃん！あたしだよ！？まどかだよ！？」

ジムが高らかに硬化笛を鳴らす。
それと同時に車輪が飛んでくる。

「どっりゃあああ！！」

真ユクモノ剣斧を抜き放ち、縦斬り。

そのままに切り上げる。

「はあああっ！！」

杏子が槍を生み出し、車輪を受け止める。

「あぶないですニヤ！！」

シュンギクが武器であるレイアネコレイピアを投げる。

それは車輪を弾く。

「怯むなっ！呼び続けろ！！」
結界を張り、応戦する。

劣勢になり始めて、一瞬。

「うぁ！」

車輪に杏子が弾かれる。

それは自分の結界を壊し、まどかとともに地面を転がる。

「あっ！」

まどかが捕まる。

「さやかちゃ…やめ……」

「ニャアア！！！」

ジュウベエがネコ武者ノ太刀で斬りつけ、そこから黒い光が飛び散る。

怯んだ隙に、杏子が腕を切り落とす。

「ジム！シュングク！まどかを！」

「「ニャ！！！」」

「いい加減…思い出してくれよお…さやか…」

「正義の、味方目指してるんだろ…もうやめてくれよ、元に戻ってこいよおおお!!!」

悲痛な気持ちだった。

出会って半年もしない。他人に近い存在。

でも、この気持ちは何だろう。

サーベルの一閃。

地面が割れる。

杏子の眩きが漏れる。

「頼むよ神様……こんな人生だったんだ…。せめて一度くらい、幸せな夢を見させて……」

世界は理不尽で我侭だ。

誰かが昔、そんな事を言っていた気がする。

人から見れば悪いほうに物事が進むのは日常茶飯事だろう。

狩りだってそうだ。

何時だって狩りは悪く、悪く状況は進む。

流れを良くするのは神でもなんでもなく、その場に居る人間なのだ。

「じゃあ、その『夢』ってやつを見せてやる。」

よく通る声で、それは杏子を俗に言うお姫様抱っこで抱きとめつつ降り立ちながらそういった。

「武兄ちゃん……?」

「無茶するんじゃないよ。この馬鹿。」

ハンターシリーズではなく、モノブロXシリーズを纏う大村武人がそこには居た。

第四十二話 やつと希望が出てきたんだ（前書き）

今回は短めです。

第四十二話 やっと希望が出てきたんだ

「よっ、と！」

杏子と湯雲にまどかを連れて離れるように指示を出してから、魔女と相對する。

…杏子を抱えていたとき顔が赤かったが何かあったのだろうか？

後で聞いてみることにする。

「はあああっ！！！」

ダオラⅡディグリペグの刃が魔女であるさやかを斬り付ける。

「りゃあああっ！！！」

切り上げにつなげるが、どうしても隙ができてしまう。

「武人！」

こちらはガルルガXの防具に変わった圭一がライトボウガンの銘火竜弩を撃つ。

それは連射されて、着弾時に炎を上げる。

「ガアアアッ！！！」

妙な叫び声とともにサーベルが振り下ろされるが、ダオラⅡディグリペグの腹で受け止める。

ガチン、という音と重さと勢いが腕にのしかかってくる。

圭一が援護するが、そちらへと目標を変えたようだった。

横薙ぎにサーベルが振りぬかれる。

間に合わない！！

その時だった。

光とともに

一人の岩のような防具を纏った、
身の丈を超える槍を持った人間が現れ、大きな盾でサーベルを受け止める。

それは、硬いことで有名な、鎧竜グラビモスの素材を使ったグラビトXシリーズに
製作には蒼火竜リオレウス亜種の天鱗すら必要とするプロミネンスソウル。

「やれやれ、やっと希望が出てきたんだ…。ここで潰すわけには行

かないなあ…！」

「き、君は…？」

「俺は、樋山龍太。手助けに来た…！」

第四十三話 それは圭一も望んでいる事だ（前書き）

間開いてすみませんでした。

第四十三話 それは圭一も望んでいる事だ

「……」

俺は圭一の体を抱え上げる。

隣では沈みきったさやかとうなだれる龍太。

こうなったのも、少し前の話だ。

人魚がサーベルを振るう。

それを俺たちは避け続ける。

しかし、縦にふりおろされるサーベルの先にはさやかの遺体があった。

「あっ!!」

気づいた圭一は踵を返す。

「おいっ! 待——」

肩を掴もうとした俺の手は空を切る。

それからは、一瞬だった。

人魚のサーベルが圭一を捕らえて、棒きれのように吹き飛ばす。
防具が凹み、血が流れ出す。

「圭一っ!？」

あわてて駆け寄り、確かめる。

「あはは…これ…重症だ…よ…ね……」

「バカ!何言ってやがる!今治療するから少し待ってろ!!」
ガルルガXメールは凹んで赤い色に染まってクックメールに見えて
しまう。

「そ、それより、は…はやぐ、じないと…が……」
「何ッ!？」

「し、仕 け終 ったから、早く「アアアアアアアアア!」
!」

ちょうど引っかったようだ。
しかし、俺には捕獲用の道具は無い。

「み、右腰の…べ…る に…は く…」
ベルトに挟まれた予備用の弾丸。それと投げナイフ。

第四十四話 神様ってのも、粹な事してくれるもんだな（前書き）

さて、今回ですが、分かった事が1つあります。

俺には、恋愛シーンは無理ですね。
もう少し精進しないと…。

第四十四話 神様ってのも、粹な事してくれるもんだな

「で？何時まで寝てるつもりだ？圭一。」

「…バレてた？」

腕に抱えたバカを起こすように促す。

「ああ。盛大なくらいな。」

「「「「ええええええ！！！？」（ニヤ！？）」「」「」」
龍太とアイルー達は叫びだす。

「ちょ、待て！？あれ血はア！？」

「ああ、あれ捕獲用麻醉弾が碎けた時飛び散っちゃってさ……睡魔に襲われて寝ちゃった、テヘツ！」

「きよ、恭介！！話があるんだけど！！」

「ああ、さやかか、なんだい？」

「わ、私ね、恭介のことが好きだ！！」

「それは、唐突だね…」

「前に仁美に告白されていてもね、私は恭介のことが好き。でも私も恭介が好き。もしそばにいさせてくれるなら——」

さやかをさえぎって、恭介は言った。

「僕ね、さやかを異性として見てなかったんだ。」

「病室に居た時でも八つ当たりしてさ。」

「でも、僕はさ笹草さんであってからどうしても意識しようようになったんだ。どうしてかは知らないけどね。だから、こんな僕でもさやかが好きになってくれたのなら、その返事、喜んで受けるよ。」

「本当？」

「本当にだ。むしろこっちから傍に居て欲しい。」

そこで感極まったのか、さやかは泣き出してしまう。

「…ま、こんなのも良いもんだな。」

「笹草、お前の意見には同感だ。」

「神様ってのも、粹な事してくれるもんだな。」
近くから、剣崎と笹草が聞き耳を立てていたが、二人は全く気づい

て
い
な
か
っ
た。
。

第四十四話 神様ってのも、粹な事してくれるもんだな（後書き）

所で他にMHとクロスしたいのですが、
これとやって欲しいというのがあれば、
どしどしどうぞ！

第四十五話

「マミ？ 入るぞ。」

さやかが魔女化し、元に戻って数日後

俺、雪永幸輝は巴マミの家へと訪れていた。

ギィィ、と不気味な音をたてながら中に入ると明らかに暗いマミが居た。

「マミ、どうしたんだよ学校にも来てないしさ。」

「―ウル が 生むなら… ―死ぬしかないじゃない…」

「マミ？ おい！ マミどうしたんだ！？ 一体！？」
うわ言のようにつぶやき続ける彼女に近づいた。

そのとたん、顔を上げてこちらを見た。

その表情に俺は思わず転がって距離をとる。
背後でパン、という銃声。

そこには魔法少女となったマミがこちらに銃口を向けていた。

「な、なあ…どうしちゃったんだ…？ 一体…？」

「幸輝君、私ね、気づいたの。」

「な、何をだ…？」

のどの奥がヒリヒリと痛み出す。

「ソウルジェムが魔女を産むなら、皆死ぬしかないじゃない。」

「バカってんじゃねえ！！ 大体さやか、の奴も助かっただろ…？」

「でもそれは『奇跡』でしょ…？ 奇跡は何度も続かない。」

「じゃ、じゃあ何で俺まで殺そうとするんだ…？」

「あら、貴方だけじゃなくて他のハンターの皆にアイルもよ？」

「何でそんな事するんだ？」

「事情を知っている貴方達ハンターがもしかしたら契約を唆すかも知れないからよ。キュウベエがそうであったように。」

「何でだよっ！！」

「安心して、皆死んだら私も後を追うから。」
「そんな気遣い無用だ！！」

「じゃあ、さようなら、幸輝君。」
銃口が向けられる。

「付き合ってられるかつ！！！！」
窓を開け、外へと身を躍らせる。

地上まで後10、7、5――

体を伸ばし、二階の他人の部屋のベランダへと手を伸ばし、掴む。

「――わああああああああ!!!!」

掴みきれずに落ちる。

わたわたと手を振り、何とかバランスを保つ。

轟音とともに地上へと着地するとママがこちらへ走ってきていた。

俺は裏路地を走り続けた。それも、ママを後ろに追わせたまま。

「はあ、はあ、はあ、――ああ!!」

足をもつれさせて転ぶ。

次の瞬間黄色いリボンがガッチリと俺を拘束していた。

「――やっと、捕まえた。」

マスケット銃を構えているママが写った。

「大体、何で人の命を潰すんだよ？」

「そんな事、魔女が生まれるくらいなら先に潰してしまったほうがいいじゃない？」

「よくねえよ。そんなのって、自分勝手にもほどがある。」

「——貴方に、何が分かるのっ!!」
突然マスクットで殴られる。

「うぐっ！」

殴られた感覚で言えば十回。それを超えた時には、もう体は動かなくなっていた。
最後に見えたのは、殴りつくして肩で息を吐くマミと、後ろにたたずむ青い鎧の——

第四十六話 ああ、洗いざらいぶちまけるよ(前書き)

はい、今回から過去へとさかのぼってまいります。

第四十六話 ああ、洗いざらいぶちまけるよ

「とうっ!!」

素早くマミへと近寄り、拳を叩き込んで気絶させる。

「あうっ!」

「…危なかった…!」

俺は危惧していた事態が起こったことに軽く舌打ちをしながら雪永の体を抱えて病院へと連れて行く。

「剣崎!!? 雪永は!?!」

「大丈夫だ、安静にしてれば直る。それより——」

「悪い、この事態になるとは思わなかった…。」

あの時は、千歳ゆまがいたから何とかなったのかもしれない。

今は敵である呉キリカも美国織莉子もない。それはある意味うれしい誤算だが、

ハンター側への死傷者がでるのは好ましくない。

「笹草、そろそろ話す時が来たんじゃないか?」

「奇遇だね。自分の正体とか、ほむらの目的とかを洗いざらい、な。」

「じゃ、皆を集めるよ。」

所変わって、ここは湯雲宅。

全員集まって話す事にした。

「すまない。そろそろ話す時じゃないかと思ってね。」

「それはいいんだけど……」

圭一の視線がマミへと移る。

マミは手足を縛られながらも話に参加していた。

正直、目に悪い。

「すまないが、巴のロープは外さないからな。」

「どうしてなんですか!？」

まどかが反論とばかりに声を上げる。

「ありがとう鹿目さん…でも私があんな事をしてしまったからしょうがないのよ。」

縛られたまま、言った。

「じゃ、そろそろ始めようぜ」

「ああ、洗いざらいぶちまけるよ。」

「あれは――」

第四十六話　ああ、洗いざらいぶちまけるよ（後書き）

はい、次回からは色々やっています。

所で、これ書き終わったらこの小説も含めたコラボとかやってみたいんですが希望などがあればどうぞ。

第四十七話 俺はさ、皆

あれは何気ない晴れた日。

俺は村を何をするわけでもなく、ただただ気の赴くままに歩いていたんだ。

家にもどって本を読んでいるといきなり虚空から血まみれのハンターが降ってきたんだ。

もちろん俺は信じられなかったさ。

「す、すまないが……もし、や、を助けてやってくれ……！」

「おい！ 大丈夫か！？」

「俺の代わりに……あいつらを……あいつらを頼む……」

「おいっ！？ ……嘘……だろ……？」

しばらくしてそいつは息を引き取ったさ。

装備を見て驚いたね。G級装備の暁丸・極シリーズに鬼哭斬破刀・真打ときたもんだ。

しかも、老山竜の素材でできたそれはひしゃげたり切り裂かれたような後があった。

どんなモンスターが打ち破ったのか、激しく恐怖したりもした。

でもな、なぜか顔も知らないそいつらを助けたかった……

そして俺は、この見滝原へと降り立った。

「ちょっと待って、」

「どうしたほむら？」

「貴方と会った事なんて無いのだけど…どういふことかしら？」

「さあ？俺にもよく分からない。」

「続けるぞ――」

そこでは暁美ほむら、巴マミ、鹿目まどかが魔法少女として戦っていた。

紆余曲折はあった物の俺も彼女達の仲間として戦い続けてきた。

「あああゝゝゝ！！」

時間停止を使い、ゴルフクラブでドラム缶を殴りつける。

「うゝん…どう思う…？シンさん、マミさん。」

「時間停止ねえ：確かにすごいけど使い方が問題よねえ：」
「いや、リロードや竜撃砲のチャージ時にうまく使えればいいんだが…」

次には青空に制服。まさに学校といったような所だった。

ロープを伝っていくのは無理があるので使い魔へと投げナイフを投擲。

その時前で轟音とともに爆風が。

「ほお。爆弾とは考えたな…。」

「やったあ！はは！すごい、すごいよ！ほむらちゃん！」

「お見事ね。」

無邪気に俺たちは喜べた。…この時ばかりは。

ワルプルギスの夜。そいつを倒した後、まどかは急に苦しみだして魔女になっちゃった。

「ええ!？」

「マジ…かよ…!」

杏子と武人は驚き、圭一は口がふさがらなかった。

「続けるが――」

俺はほむらを立たせて言った。

「ほむらっ！お前は時間を変えてこの世界から離れろっ！！」

「いやあ…！まどかあ…まどかあ…！」

俺はほむらの盾になるようにガンチャリオット改を構え、まどかだつたものと相対する。

「はやくっ！！」

返答を待たずに俺は魔女へと突っ込んだ。

一撃一撃は重く、強固であるはずのギザミXアームの右腕のほうにはひびすら入っていた。

何度も竜撃砲を打ち込み、突き伏せようとするが点で話にならなかった。

何十分も戦い、しかしほむらがまだ居るようなので視線をそちらに向けるが、失敗だった。

「ほむらっ！」

一瞬、そちらへと気を向けたとき攻撃が来た。

「くっ!!」

盾を構えて受け止めようとするが、到底たえきれず——といった感じではなく、文字通り肩まで右腕が『消し飛んだ』。

「——え？」

「つとつと行けえっ!!!!」

それを見て、やっとほむらが動き出した。
消えるのを待って、俺は左腕一本で切り込んだ。

「で…? どうなったの？」
さやかがたずねてくる。

「結論から言えば、俺は勝った。魔女を捕獲してな。ただし、左足首も持ってたがな。」

「シンさん！しっかりしてくださいっ！！」

「ま、どうか…」

この状況下では笑いすらでてくる。

右腕は肩までが消えて血が吹き出て、もうすぐ死が迫っているという事を

改めて自覚させてくる。

「な、なあまどか…」

「シンさん！！死なないでっ！」

「俺はさ、皆を——」

そこで視界が黒くなり、意識が切れる。

最後まで聞こえたのは、まどかが泣き叫ぶ姿だった。

第四十八話　こんなやつてあんまりだ

「——と、まあこんな感じだ。一応他の話もあるが、関係なさそうなんで省くぞ。」

それで剣崎の奴は話を締めくくった。

おそらく以前話した美国織莉子や呉キリカの話だろう。

「剣崎さん…あなた…」

マミが口を開くが、

「おっと、まだ俺の話は聞いてもらってないだろう？」
笹草が口を開いた。

「じゃ、飛ばされた影響云々は飛ばして話すよ。」

鹿目まどか、美樹さやか、巴マミ、佐倉杏子、暁美ほむら。

ここまでは普通にチームを組んでやっていたよ。

俺と、もう一人のハンターを含めてね。

七人で魔女へと挑んだりしてさ、よく危ない目にあったんだ。

でもまあ、なんとか誰一人かけずにやってきた。

あるときさ、ほむらは言ったんだ。

キュウベエに騙されてるってさ。

「あのさあ…そんな嘘ついてキュウベエが得するわけ？それともあたし達に妙な事吹き込んで仲間割れさせたい訳？」

「そ…それは…」

「まさかあの杏子とか言う奴とグルなんじゃないでしょうね？」

「おい、さやかいいすぎじゃないか？」

「でも龍太…」

「あいつと俺は結構話してるが、そんな奴には見えないぞ？」

「まさかあんたがグルなんじゃない？」

「阿呆！大体魔法少女でもないしかも異次元から来たハンターだぞ俺らは。それこそ何の得が有るって言うんだ？笹草もなんか言ってるよ。」

「ん？ああ、ああ。そもそもなんでそんな事を言い出すのか、あるいはアレじゃないかな？」

「アレって？」

「ほむらちゃんが時間を遡っているなら、それは未来予知に近いんじゃないかな？それにさ、その現象って一回見ただけでしょ？それならまだこれが正解だ！って断言は出来ないよ。」

「じゃ、じゃあ信じて貰えないんですか!? 笹草さん…?」

「いやね、仮定の話だけど、それはもしかしたらなにか別の力が加わったのかもしれない。だから信じないってわけじゃないけど信用性が薄いかな…実際に同じ事が起これば…」

「じゃあ笹草、あんたはあたし達の事を試したいの!? 魔女になるかどうかそんな事のためにあたし達を利用するの!?」
再びさやかが叫ぶ。

「いや、別にそういう意味じゃな——」「もういい!!」 さやかちゃん!？」

さやかは走り去っていった。

「ごめん…言い過ぎた。」

「いえ…笹草さんは間違っていないと思います。」

それからしばらくしてあの事が起こった。

さやかの魔女化が。

「てめえっ! 一体何なんだ!! さやかに何しやがった!!」

「さやか! 正気に戻れ! 今なら許してやるから!!」

「お願いっ! やめてさやかちゃん! こんなこと、さやかちゃんだっ
ていやだったはずだよ!!」

「ぐっ！！さやかちゃん！元に戻って！！」

俺は炎剣リオレウスを掲げ、
ひたすらに剣の腹で車輪の雨からまどかを守り抜いていた。それが
精一杯だった。

「ごめん…美樹さん…」

爆弾を使い、さやかである魔女を燃やす。

「さやかっ！こんなのって！」

「酷いよ…こんなのって、あんまりだよ…！」

「くそ…なんでさやかを助けられなかった…畜生…！」
皆一様に悔しがった。

その時、悔しがってた龍太が急に立ち上がり、杏子へとレッドテイ
ルの盾を突き出した。

俺はなぜか瞬間的に龍太の反対側を見た。

杏子と龍太へ向けて銃の引き金を引いていた。

照準は、龍太。

ハンターメイルを貫通し、そのまま杏子を押し倒しながら床へと倒
れこんだ。

「りゅ、龍太…？」

杏子が愕然とした様子でつぶやいた。

「きょ…う…ここ…無事…よかつ…」

「おい龍太!？」

あわてて駆け寄ろうとする俺をリボンが縛り上げた。

「マミちゃん!？何を——」

「巴さん!？」

「ソウルジェムが魔女を生むなら、皆死ぬしかないじゃないっ!!」

「貴方も、私もっ!!」

顔を歪め、涙を流しながら俺へと銃口を向ける。

「ならなんで龍太を撃った!？あいつはハンターだぞ!？」

「邪魔するからッ、悪いのよッ!!」

狙いを俺からほむらに変えたところでピンク色の矢がマミのソウルジェムを打ち抜く。

カラン、という音をたてながらソウルジェムは砕け、マミはマスクット銃を握ったまま倒れた。

「…もうやだ…もうやだよお…」

まどかのすすり泣く音が、そこにはやけに、
大きく響いた。

第四十八話　こんなのってあんまりだ（後書き）

長くなるんで分けときますね。

第四十九話（前書き）

今回は結構急ぎだったので雑かもしれません。

第四十九話

「龍太っ…何であたしなんかのために…身代わりなんかになりやがって…馬鹿野郎…!」

「ぐすっ…っ…」

まどかはさっきから泣いていた。

「狩ってやる…狩ってやるぞ…!!ワルプルギス…ッ…!!!!」
俺の怒りはワルプルギスへと向けられていた。

「うらあああああああっ…!!!!」

無我夢中でワルプルギスに取り付き、大剣を振るい叩きつける。
当たったところから炎が吹き出るが、効果は薄いようだ。

「くたばれえええええ!!!!」

隣で杏子が槍を何度も突き刺す。

後ろではほむらがロケットランチャーを派手に撃っていた。

まどかも懸命に戦った。

「よお…無事みたいだ…」
大剣を担ぎ、杏子へと近づく。

「あたしも何とか生きてるよ…ソウルジェムは…真っ黒だけだな…」
「グリーンシールドは…あるかい…？」

「さっきまであったんだけどな…品切れだよ…」

「…そうか。」

「あのな…最後に頼みが「断る。」
「大方魔女化の前に殺れとかなんとかなら俺は聞けないよ。」

その時、近くで銃声がした。

杏子とともにちかよるとうなだれたほむらと息のないまどかが。

「…あなたたち…。」

「いや、いいよ。俺が信用してなかったばかりに…」

「ぐあっ…あああっ!!」

「杏子!？」

いよいよ魔女化の始まりになり、苦しみ出した。

「ほむらッ!？」

すぐそばのほむらが杏子へと銃を向ける。

発砲。

ドサリ、と杏子が倒れる。

次の瞬間にはほむらは消えていた。

こんなこと、あんまりすぎる。

龍太も、さやかも、まどかも、杏子も、マミも、

誰一人生きていないなんて。

「キュウベエ、いるんだろ？」

「何だい？」

「契約して、俺を魔法狩人にしてくれ。」

「いいよ。君の願いは、何だい？」

「俺の願いは、こんな悲しい物語をぶち壊す。そんなくらい強くて、誰一人欠けさせない、皆が幸せに生きれる物語へと台本を書き換えられる、そんな奴等をここへと導いて欲しい。それが、俺の願いだ。」

その中に、自分自身が立っているかなんて対した問題じゃない。皆死んだ。それで俺一人が帰れたとしてそこにあるって言うんだ？
それだったら皆が生きている方が、よほどハッピーな事だろう。

第五十話（前書き）

今回は話が結構強引なんでどこかが破綻してるかもしれません。

もしあればすいませんでした。

第五十話

湯雲 side

俺は剣崎さんたちが話したことが理解できなかった。

剣崎さんや笹草さんたちがこの一ヶ月を戦い続けてきた事。

「ひっ…ひっく…」

まどかは泣き出していた。

「おいまどか——」

「訳わかんないよお：樋口さんや剣崎さんも一度死んじゃったのに何でそんな事を、「まどか、」

剣崎さんが口を開く。

「俺らはそうしたかったからそうしたんだ。別に気負う必要はない。」

「そうそう。いまならピンピンとしてるし。」

「で、でも剣崎さんは一度死んでしまって腕とかも失ったりしてるのに——」

「腕なら、ここにある。」

長袖のシャツの袖をまくると、良く日に焼けた肌が写った。

「もっとも魔力で出来てはいるが、普段通りに動かすなら問題は無い。そうだろう？」

ニカリと口を開けて笑う。

「所で、なんでほむらは剣崎さん達の事を覚えてないんだ？」
場の空気を読んだためか武人がほむらに質問する。

「わからない。でも本当に皆の事は覚えてないの。」
それも疑問の一つだろう。

話が本当だとすれば、笹草さん達の話の中のほむらはどうしてしま
ったのだろうか？

「なるほどね。これで全ての謎が解けたよ。」
無機質な声とともに、キュウベエ、インキュベーターが現れた。

「いまさらこういうつもりだ、テメエ：！」
杏子が槍を突きつけながら睨む。

「どうしたも、なにもほむらの事やまどか、それに君たちハンター
がここに来た理由だよ。」

「へえ：ぶち抜く前に聞いておこうじゃないか？」

「それなら話そうか：僕の立てた仮説を。」

「まず君たちハンターの来た理由だけど、これは笹草健助の願いに

よるものだ。ここまではいいかい？」

「ああ、構わない。」

「で、次は暁美ほむらの記憶についてだけど、これは平行世界と言えばいいのかな？ 多分君たちハンターと会ったほむらと会わなかったほむらがいる。おそらく彼女はここまでのループする世界で会わなかったほむら、そういうことになる。そもそもこれは本当の時間軸ではないのかもしれない。」

「？」

「わからない、って顔だね。そもそもこの世界の中で他の場所へ時を超えるなんてことはほむらの持つ時間操作の能力がないとできないはずなんだ。それなのに君たちハンターはそれを可能とした。しかも話をきけば文明のレベルはまどか達の世界よりも低いそうだね。」

「ああ。エアコンなんてなかったしな。」

「これでほぼ君たちは過去からきたと言う仮説が成り立つ。もしくは他の星から来たという可能性もなくはないんだけど、ハンターなんて聞いたことがないからね。」

「つまり？」

「僕としてもまず植物の根っこをイメージしてもらえるとわかりやすいと思うんだよね。一本の主根から伸びる側根。その側根にあたるのがこの世界。そう思うんだ。」

「えーと…」

「君もわからないね。つまり主根にあたる部分は本当にハンターの干渉を受けない世界。側根はハンターの干渉を受け付けることができる世界。」

「つまり私は正しくない世界に飛ばされた、そういう事ね？」

「そういうことになるね。」

「だけど――」

第五十話（後書き）

根っこの話のくだりは作者がだいぶ手間取った話です。

二週間ほど。

第五十一話

「これではつきりしたよ。なぜ鹿目まどかが膨大な力を備えているのか。」

「えっ！」

「暁美ほむら、君はこの一ヶ月間を何度も繰り返した。それが中心であるまどかがいくつかの平行世界を螺旋状に束ねたんだ。その因果が、鹿目まどかをここまで育ててくれた。」

「ッ!!」

「感謝するよ、暁美ほむら。」

「黙れ…」

いつの間にか、剣崎さんは銃を構えていた。

「なにが有ろうと、俺達は鹿目まどかを助けるだけだ。」

「そうだね…。じゃあこのへんで失礼するよ。」
「そういつてキュウベえは去っていった。」

「ふう…」

銃をおろした剣崎さんは、いよいよ座り込んでしまった。

「ところでさ、どうやってさやかを助けたんだよ？」
杏子が質問する。

「…ああ、それはな」
剣崎さんは説明する。

グリーンシードもソウルジェムも魂の入れ物には変わらないから、一回魔女を捕獲して、魔女の体と魂を分離する。
次に元の魂の入れ物であるその人物の死体を側に置いておく。
そうすれば確率は高くないが、分離した魂は死体へと寄せられていく。

そうして、人の魂を元に戻す方法だ。
後は、残った魔女を倒してしまえばいい。

というものだった。

「なんて荒治療な…」
俺は思わずつぶやいた。

「ああ、だがな、これ以外に成功例はないんだよ。」
「だけど、魔法の方はどうなるんだろう？」

「精度は落ちるが、問題なく使える——と思う。」

試しにさやかが魔法を使うが、問題はなかった。

「それより、俺はなんであんな近代装備のアイルーがいることに対して疑問を呈したいね。」

「俺の事かニヤ？」

バンダナにダンボールのアイルーが出てくる。

なんだか、すごく違和感バリバリのアイルーがでてきたな……。

「そうだ。なんでだいたい銃器の扱いまでマスターしてるんだ？」

「おっと、銃器だけじゃないニヤ。爆発物や機械、端末の操作なんかも出来るニヤ!!」

晁美ほむらでも、できないようなことまで出来てるし、ほんと、何ものだ？

「一体、お前は何ものなんだ？ 名前は？」

格好をつけながら、そのアイルーはいった。

「スネー……いや、俺は、ジョンって名前ニヤ!!」

第五十二話

「…ジョン？」

俺は目の前の明らかな近代装備のアイルーの話を聞いていた。

そのアイルーは野良のときに、突然海の上に浮かぶ建造物のところで倒れていたらしい。

その時に、その組織——国境なき軍隊とかいう組織に拾われてからという物、そこでさまざまな訓練を受けてきたらしい。

ちなみに国境なき軍隊——（*Militaires Sans Frontières*…通称MSF）とは、単純に言えば傭兵派遣ビジネスという事をしていたらしい。

詳しいことはよく分からない上に、アイルーの方も教える気がなさそうなのでこのくらいにしておく。

「ひゃー…知れば知るほど怖くなってくる組織だな…オイ…。」
「つーかなんだよ傭兵派遣ビジネスって…？明らか危なそうな臭いが漂ってくるじゃねーか。」

「うむ…。そこではやはり戦争にも参加したのか？」

大村が重く口をあけ、いう。

「もちろん、俺も戦場に出たりもしたニヤ。主に諜報とか破壊工作だったけどニヤ。」

怖ええ！なんだよ工作って！？

あれか？爆弾か？吹っ飛ばすのか！？

「同じアイルーでもここまで違ってきちゃうモノなのかニャ…。」
レウスが思わず、といったようにつぶやく。

同じアイルーとしては酷な話だろう。

特にレウスは似たような境遇の元、俺に引き取られたからだ。

「もつとも、この事は誰にも話したりしないで欲しいニャ。」
ならなぜ話したし！

「多分もう原隊復帰ももう望めそうもないからニャ。一応、戦力として信用してもらいたいから経歴とかはなしたのニャ。」

「なんでこんな事に首突っ込む気になったんだ？」

「なんでって、そりゃあやりたいからやる。そうじゃニャいか？」

「一理あるな。俺らはまどかを助けたくて、こうやって来たんだ。」

「さて、ならもう答えは出ているんじゃないかニャ？」

「ああ。もうやる事は決まったな。」

「総力を懸けてワルプルギスの夜を完膚何までに叩き潰す。それ以外の選択肢はない。」

「幸輝はどうなるんだ？」

俺は思っていた質問をぶつける。

「怪我のようすでは意識不明の身だろうな。よしんば意識が戻っても戦闘には無理だろう。」

剣崎がズバつと言い切る。

：視線の端に見えたマミさんは悲しそうに目を伏せていた。

仕方ないと言えば仕方ない事態ではあるが、何とかなる…だろう。

それにしても、ここまで戦力があるのになんでワルプルギスの夜を怖がるんだ？

それは、ある種の疑問だった。

しかし、この後の話で俺はジェン・モーランをも凌駕する化け物だ
と思えることになる。

第五十三話

「やつは…ワルプルギスの夜。歴史上で語り継がれる魔女だ。そのレベルはもはや伝説と言ってもいいだろう」

「そいつが相手か…相手の特徴は？」

「空中へ浮かび、下半身は歯車のドレスを纏ったような姿をしている。」

「しかも、現れるだけでスーパーセルを引き起こし数千人単位の犠牲者すら出してしまうの。本来では単独での撃破はほぼ不可能と言ってもいいわ。」

剣崎とほむらは次々に情報を並べてくる。

「ハンターからすれば、…そうだな…老山龍や祖龍、覇龍、それに崩竜何かよりも余程強い。」

「覇龍よりもなのか……」

武人が思わずつぶやく。

「だが！今回はこちらにも相応の戦力が揃っている！！」

「…しかし、迎撃装置抜きだがもちろん勝算はあるのだろうか？」

大きく剣崎は頷いた。

「まず、ほむらの能力を使って一斉攻撃。その後魔法少女は数人がかりで隙をつくり、マミの砲撃を繰り返す。単純な手だが、それに

平行してハンター達は取り付いてひたすら攻撃。アイルー達には使
い魔の相手をしてもらう。」

「単純なようだが、どれも重要だ。アイルー達の戦列を突破されれ
ば体育館へと避難している人たちに被害が出る。魔法少女が倒れれ
ばあの淫獣がまどかに契約を迫るだろうし、俺達ハンターが死ねば
それで失敗だ。」

笹草さんはそういった。

「とにかく、奴が現れるまで後7日も無い。全員がしっかりと動け
るようにしておけ。解散。」

剣崎はそう締めくくって終わりにした。

帰り道。

俺には例のごとく、まどかと共に歩いていた。

「…心配か？」

「うん…。ひょっとしたら皆が死んじゃうのかもしれないし…。」

「何言ってるんだよ、今までだってこんな事向こうじゃ何度も乗り越えてきたんだ。何とかなるだろう？」

嘘だ。

本当は古龍なんて化け物を相手どったことなんて一回も無い。

向こうでもせいぜいリオレウス狩猟の手伝いをしたことがあるぐらいだ。

だけど、なぜかまどかを不安にはさせたくなかった。

というか、いつもの俺ならこんな面倒だったら即座に逃げるのに、何で立ち向かおうとしているんだ？

俺は考えた。

…答えなんて、出るはずなのに。

そのころ――

「どうしたんだい？大村武人。」

「キュウベえ、いやインキュベーター。頼みがある。」

「――！！！！！」

大村武人は、何かを叫んだ。

「なんだい？いつもの君らしくないね？まあ、僕としては大助かりなんだけどね。」

「当たり前だ。少しでも彼奴らが勝てる要素が欲しいのでな。さあ、始めようじゃないか、キュウベエ！」

「なるほど、それが君の運命か。」

第五十四話 行くぞ、最後の戦いだ（前書き）

本当に遅れてすみませんでした。

第五十四話 行くぞ、最後の戦いだ

パツチリと目を開け、外を見る。

外ではどんよりとした曇り空に、雷の余兆。もう避難の指示が出ているころだろう。

さて、と。

こんな時でも、今の状況を説明しよう。

俺は今現在鹿目家に居る。

…どこからか殺意が湧いてくるのだが、一旦無視しよう。

なぜかという、昨日まどかを送った時に鹿目家の人々から止まっ
て行けと言われたのだ。

無論、断りはしたのだが、うん、まあ、しょうがなかった。ほむら
がいくらか殺気を向けていたのは気のせい——じゃないよな…絶対
…。

「湯雲君ー？そろそろ避難指示も出てるから行こうか。」

まどかの父、知久さんがリビングにいた俺に伝えてきた。

「えっと、すみません。」

家をでてから俺は家へと忘れ物をしたので取りに行くので先に行っ
ていて欲しいということ伝えた。

心配してくれていたのだろうか？顔がこころなしに暗かった気がする。

自宅へと戻ると、アイルー達が出迎えてくれた。

「ご主人、今日ですかニャ？」

「ああ、皆にまず伝えたい。」

「何ですかニャ？」

「全員、死なないこと！！危なくなったら引き返せ！怪我を負ったら無理するな！旗色が悪くなったら即退却！！一人が不利なら連携して助け出せ！！」

『Yes, sir!』

「よし、奴に目にも物を見せつけてやるぞ！！皆――」

「行くぞ、最後の戦いだっ！！！！」

「ニャ！！」

そして準備に入る。

まずユクモノハカマをはき、紐で縛る。その上からユクモノドウギを着てから朱色の帯で固定する。

ハカマの上からユクモノオビを巻きつけ、金具でしっかりと固定する。コテを腕に通して、ユクモノカサを被る。結構これでも動きやすいというのはいい。色々と気に入っているのはココだけの話だ。

最後にいつ強化されたのかも解らなかった真ユクモノ剣斧を装備し、ポーチに道具を詰め込む。

「…いよいよか。」

パンツ、と頬を叩き気合を入れ直す。

「さて――」

俺は振り向きこれから共に戦場へと赴く相棒達へと声をかける。

「ご主人、それでは行きますかニヤ？」

「ああ、行くか。」

「負けるなよ、負けたら承知しないからな!!」
いつになくピーターの声が震えていた。

「そっちもな!!」

俺は笑って拳を上げた。

「湯雲〜! 大遅刻だぞ!!」
既に皆が集まっていた。

あ、さやかはまだらしい。どうやら俺は最後の遅刻者では、

「おい! 一番遅いんだけど? 何やってた!？」

「さやかだってまだじゃないか!」

「さやかは抜け出してくるから遅くなるっていったじゃないか。」
「そういうことだ!」

マジか…。

「ほら、兄ちゃんもアホやってないで気を引き締めたらどうなんだ？」

出会った当初と比べると、かなり変わったきがするなあ…杏子も。

「ごめん、遅くなった!!」

さやかも来たようだ。

「っ!! 来るわ!」

マミさんが言うのと同時、足元に白い霧が。おまけに象などが徘徊し、さしずめサーカスといったところだろう。

そして、『それ』は上空に浮き出るように現れた。

ちなみに今回の作戦は短期決戦を元に行っている。

いくら長引かせても、向こうは無限とも言える力がある。

つまりこちらがスタミナ勝負を仕掛けたところで先に息切れになるのは俺達の方なのだ。

ならば短い間にこちらが総攻撃を仕掛けてぶちのめそう、といった話。

「ほむらッ! 時間停止を!!」

圭一が銘火竜弩を構え、叫ぶ。

次の瞬間、圭一とほむらが打ち出した火炎弾とRPG7とAT-4の弾頭がワルプルギスの夜へと殺到していった。

着弾と同時に爆炎が標的を包み込む。

高い笑い声とともに、流されていくかのように移動していくワルプルギスを、

「兄ちゃん、さやか、湯雲、行くぞ!!!!」

武人と俺は半ば杏子に引っ張られる形で突撃していった。

「リャアアアアアアアア!!!!!!」

ワルプルギスに飛び乗った武人が全力の溜め切りによってくりだされたダオラーディグリペグの刃が、入ると同時に氷片が飛び散るが、ワルプルギスは笑い続けたままだ。

「くっそおっおおお!!!!!!」

斧モードの真ユクモノ剣斧の刃を切り上げ力の限り振り回す。

「だっ!はっ!やっ!!!でやあああ!!!!!!」

「皆、一旦離れて!!」

頭上からほむらが撃ったとされる砲撃が迫っているため一度ワルプルギスからすぐさま飛び降り、身近にあった近くのビルへと着地する。

そのままそこから離れて、近くにいたほむらへと話しかける。

「どうだ?もう倒れても。」

「まだ、あんなのじゃ倒せない。」
そこで無線が。

『そろそろ爆破するニャ。許可を。』

「ええ。構わないわ。」

「イグニッション、ニャ。」

少し離れたところでジョンが起爆スイッチを押し込む。

爆弾によって塔が倒れていく。

「マジかよ…」

しかしワルプルギスを巻き込んで倒れるはずの塔が逆にバラバラになっ
て燃えていた。

…こりゃあ、骨が折れそうだ。

第五十五話

次にほむらはタンクローリーの屋根に乗って橋の鉄骨部分を進んでいた。

そこから飛び降りると、タンクローリーは低空飛行になっているワルプルギスへと突き進む。

爆発と同時に、マミさんは幾千ものマスケット銃をワルプルギスへと向ける。

手を振り下ろすと同時に発砲。

「湯雲、乗れ!!」

剣崎は車を横付けし、乗り込むとすぐに走り出した。

「ほむら、撃て。」

『分かったわ、攻撃に巻き込まれないように。』

『こっちの用意は終わったよ。』

念話は笹草さんが何かしらの用意を終わらせたことを伝えた。

一体、なんの準備だろうか？

笹草 side

「さて…！」

俺はビルから飛び移るべく、行動を開始していた。

しかし、何か忘れているような…

もっともっと、重要な事を。

「うお！?!?!？」

突然足元のビルがグラグラと揺れていた。

それが魔女の力というのはすぐにでも理解できた。

慌てるように飛び降りて着地する。

そのままビルは浮き上がり、ほむら目掛けて突き進んだ。

いつものごとく時間停止で切り抜けるだろうと思った時。

『そんな!?!』

ほむらの焦った声が甘い考えをうち払った。

…そうだ、何も時間停止は無限には使えるわけじゃない…!!

「杏子！武人っ!!!!」

直ぐ様側の二人を呼ぶ。

大村武人が契約して、魔法狩人となったのはもう知っている。(他

の連中、杏子なんかは知らない。」

今必要なのは、二人の力。

俺の能力で二人の固有魔法を合成させる！

「来い！！」

気を大剣へと向け、意識を流し込む。

すると、思ったとおりに炎剣リオレウスが俺の手足のように感じるようになり、

重いはずの炎剣リオレウスは羽のようにふわりと浮き上がった。

そのまま上へ乗り、現在進行系でほむらへと迫るビルへと突撃する。

「行っけえッ——！！！」

全力の突撃でビルの軌道を変更すると同時に、俺は——

大村 side

「嘘だろおおおおおおおお！！！」

俺は全身全霊でシャウトした。隣では杏子が耳をふさいでいるがそんな事はどうだっていい。

いま、笹草は大剣にのって空を飛んでいった。

ビルへと突撃していくのも。

そして、ビルをぶち抜きワルプルギスの夜に弾かれて大空を舞っているのを。

空高く上がった笹草は、避難所の方角目掛けて飛んで行くとやがて見えなくなった。

え？

思わずへたり込む。

あれでは恐らく――！

[illegible]

剣崎 side

「あれは…ッ!!!」
隣の湯雲が息を飲むのが嫌にも分かった。

見間違えるハズもない。
今、健助は大空を飛んだ。
そして、落ちていった。

あの高さから受身もなしで落ちればどうなるかなんて嫌に分かっている。
いくら魔法狩人とはいえ、もたないに決まっている。

思わず何もできない自分に歯がゆさを感じながら、俺はワルプルギスの夜へと視線をむけた。

「畜生ッ!!!」

第五十六話

「——っ!!」

俺が宙を舞っているという事に気づいたのは、前から何かしらの衝撃を受けた時だった。

しかし、その事に気づいた時には一度衝撃のせいか意識が飛んでいた。

乗っていたはずの炎剣リオレウスはへし折られ、わたわたと手足を振るが

それをあざ笑うかのように、突風は俺を紙くずのように浮遊させていた。

数十秒ほどだろうか？感覚的にはそのくらい飛んでいたが、突然の背中からの衝撃。頭の防具が外れて、視界があらわになる。体のどこかの骨が折れる音。続いて激痛。

口を開けるが、痛みのあまり喋る事すらままならない。

ハンターとして幾分か痛みには免疫があると思ったが、今回のそれは異常だった。

まず、痛いのは前か？後ろか？ということすら分からない。

これはまずいと思いつつ、体を起こそうと腕を動かすが右腕は肘からあらぬ方向へと曲がっていた。

誰かが話しかけてくるが、正直行って何もできない。

魔法狩人としての治癒能力が追いつかずに激痛が俺を襲っていた。

「笹草さん!?! しっかりしてください! 笹草さんッ!?!」

頭上から聞こえてくる声を見殺して
痛みから逃れるべく
俺は二度目の意識を手放した。

少し、笹草さんが盛大に避難所のガラスを突き破ってから少したたただろうか？

いや、そんな事今は関係ない。

避難所にはさやかも居ないし、なにより、どうして笹草さんがこんな鎧のようなものをきているのだろう？

なぜ、血まみれの笹草さんが右肘をあらぬ方向に曲げているのだろう？

疑問は尽きないけど、一つだけはっきりしている。

外では、何か普通じゃない事が起きているのだろう。

「笹草さん、此処にいてくださいね。」

聞こえていないだろうけど、一言告げる。

確かめよう。

僕は、外へと向かう。

両親が引き止めようと腕を掴んでくる。

だけど、それをふりはらって進む。

さやかな事もきになるけど、

何より――

自分のなかの何かが、この先を見ないと絶対に自分は後悔するって、
言ってるから。

俺は何をしているのだろう？

手足を広げ、何かに漂っているように感じる。
心地よい。

ずっと、このままでいたい。
ずっと、ずっとここにいたい。

ここはここちがいい。

いやなことも、つらいことも、なにかにとらわれることも、ないから。

でも、なんでそれがいけないって、おも う nder う？

なにかが、なだれこんでくる。

——ちつくしょう！何が守ってやるだ！何一つ、約束なんて…守れてないじゃねえか！！なにがG級ハンターだっ…！！畜生！！

なんだろう？

——このまま、終わるなんて、な。

——誰か、勝ってくれるやつが、こんなクソツタレな結末を捻じ曲げて。俺に救えなかった事を。守れなかったものを。

これはいったい、なんなんだろう？

——それが、君の願いか。でも、それでいいのかい？

——自分が願ったことだ。構わないさ。戻ったとしても、俺には、何もかもないんだからな。

——分かった、それが君の願いなんだね。

——さあ、契約だ。インキュベーター……！！

これは、俺？

そうだ。俺は、戦わなければ。

ここまでなんだ。ループする世界も。何もかも。これを失敗したら、マミを守るどころか、この世界は終わりだ。

なら、全力でぶち当たる以外の選択肢は不要。

さて、行こうか。『俺』が願った結末を迎えるために……！！

第五十七話 諦めきれない、諦めない

「ねえ、キュウベエ。」

「…なんだい、まどか。」

「皆がワルプルギスの夜を倒せるのって、本当なの…?」

しばらく、問いを投げられたキュウベエはしばらく黙り、そして辛そうに口を開いた。

「…それを聞いて、君はそれを信じるかい?」

「……。どうして、皆そこまでして戦えるの?」

「…ハンター達、そして魔法少女達はまだ希望を求めているからさ。」

「今の彼らは、特に暁美ほむら、剣崎真、笹草健助は、何度でも戦い続けるだろうね。無意味にも、性懲りもなく。」

「決して、まどかを救えないと思ったらそれで彼らは終わりだろう。だから、戦う。戦うしかないんだろう。僕には、よく分からないけどね。」

「…希望を持つ限り、救われないっていうの？」

「……そうさ。それに、どちらにせよ、この根っこの世界、本来辿るべきじゃなかった時間軸もここが終着点だろうね。」

「なんでっ…どうしてなの…？」

「笹草健助の願いは、打倒の為の戦力を呼ぶことだ。つまりこれで勝てなかったら、後はもう何も出来ないということになる。」

「でも、じゃあ、湯雲君たちは…!!」

その時、ガラスを突き破って、何かが入ってきた。それが、笹草だというのに時間は掛からなかった。

「笹草さんっ!!」

何かを呼ぶ声。

何かを振り絞るように考えて、

「どこいこうってんだ？」

「ママ…私、友達を「消防署に任せろ、素人は動くな。」

「私でなきゃ、ダメなの!!」

「テメエ一人の命じゃないんだ!! 勝手やらかして――

「わかってる。私だって皆のこと大好きだから、粗末にしちゃいけないって。…皆が大事だから、助けたいから、だから私いかなきゃいけないのっ!!」

「理由は説明できない、ってんだな? なら、」

「私一人でいい。ママは皆の所に居てあげて。」

「今でも私をいい子だと言ってくれる。嘘もつかない。だから、一度でいいから、私を信じてくれる?」

「嘘に乗ってたり、下手うったりしないな?」
そうして、背中を押す。

「ありがとう、ママ。」

「これが、感情を持つということなのかな。大村武人、君は僕にそこまでして、何をさせたかったんだい？この世界の終わりに、僕が感情を持っても、なんの意味も無いだろうに。」

『俺の願いは、この時間軸すべてのインキュベーターに感情を、心をもたせる！それが、俺の願いだっ！！！！』

「でも、なんだろう、この気持ちは。これが、恐怖なのかな？今までぼくがしかした事、あれ、おかしいな……っ寒くもないのに……僕は、失うということに恐怖していくのか……？僕が、僕らが行なってきた事は、正しい、はず、はずなのに……！なんで、なんで僕は止めなかったんだっ！？他にもやりようは、いくらでもあるって、そっちのほうに、いい選択肢のはずっ、なの……っ、なんで……！！……？……？……？」

（マズイっ…!!）

ワルプルギスの夜から飛んで来たビルは俺めがけて進んできていた。

「——あああああああああ!!!!!!」

全速力で走り、すぐ後ろから迫ってくるビルを回避する。

しかし、降ってきたのは多数だった。

すぐそばの地面へと落ちてきて、地面を抉り全方位へと破片を嵐のごとくまき散らしていた。

反射的に、剣モードにした真ユクモノ剣斧を握り、顔と胸を守ろうとガードの姿勢に入る。

しかし、スラッシュアックスの構造は複雑だ。

それゆえ、ガードは出来ない。

では、それを無視してガードを敢行すると、どうなるか。

「ぐ……くそ……っ!!」

思わずガードの出来ないスラッシュアックスを盾にしまったせいか

斧モードの刃はボロボロになり、取り付けたビンは碎けて辺りに中身をまき散らしていた。

それだけならまだいい。

剣モードの剣の部分は完全に碎けて煙を噴いていた。

すぐさまある程度そこから離れてから辛うじてまだ動く斧モードに変更する。

ポーチから砥石を取り出す。

それを刃に当て、切れ味を戻す。

まだ、諦めきれないから。なにがなんでも、食らいついて、そこで、まどかを助けてから、また、普通のこんな戦いなんかない、日常に戻るんだ。

だから、諦めきれない、諦めない。

何もかも、終わってない。なのに――

しかし、そこで誰かが俺の手を掴んでいた。

掴まれたその手はとても暖かくて、それでいて優しく包み込んでくれて、

「…もういい。もういいんだよ。こんな無茶しなくても。」
「ま、どか…?」

「湯雲君、ごめん。」

「私、魔法少女になる。」

それでいて、どこか、自分自身が悲しみを覚えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8295t/>

魔法狩人ハンター☆マギカ

2011年11月17日14時27分発行